

悠遊

第三十二号



企業OBペンクラブ



花見より
口説き日和と
なりにけり

松田 昌康

親音の
すつくと立てり
ツツジ谷
安藤 晃二



悠遊

第三十二号

企業OBペンクラブ

表紙の絵 「背振山」(水彩画)

木村 敏美

主人の退職後の人生は、無農薬野菜を作り孫たちに食べさせるという夢があり、小高い山の上に土地を買い小さい山小屋まで手作りし20年間程野菜作りに専念した。山を削ってできた土を畑に変えるのは大変だったが、その疲れを慰めてくれたのが澄んだ空気と眼下の森、遠くに見える山々だった。

特に背振山は高校生時代に友人の祖父の道案内で登った思い出があり頂上付近にはくま笹が生い茂っていて美しかった。

昨年この土地を手放したがこの絵のような景色と数々の思い出は宝物としていつまでも残るだろう。



目次

▽巻頭言……………	吉田 真人 4	▽米寿雑感……………	野上 浩三 30
II エッセイ II		▽人間の「心」……………	野瀬 隆平 32
▽或る犬との出会い……………	長尾進一郎 6	▽風と共に去りぬ……………	馬場真寿美 34
▽OBペンクラブ十五年……………	中村 晃也 8	▽コミュニケーション能力と「…」……………	浜口須美子 36
▽二人の尊敬する上司……………	豊澤 幸平 10	▽漢詩の美女を訪ねて……………	原田 信 38
▽書斎随想……………	塚田 實 12	▽子 _レ のつく名前の女の子は頭がいい……………	一杉 秀樹 40
▽ノーモアヒバクシャ……………	瀬尾 勝弘 14	▽会津線ノスタルジア……………	
▽核兵器廃絶の願い……………	杉浦 右藏 16	▽原点に思いを馳せて……………	藤原 道夫 42
▽地熱発電の大規模利用開発を推進……………	志村 良知 18	▽ノルマンディーの海岸から……………	松浦 俊博 44
▽北海道ドライブ……………	清水 勝 20	▽北海道周遊……………	松田 昌康 46
▽『小京都巡り』〜加茂市(新潟県)……………	児玉 寛嗣 22	▽トラブル解消旅行……………	松谷 隆 48
▽どちらが幸せか……………	荒野 喆也 24	▽閉ざされた言語空間 日本……………	森田 晃司 50
▽核融合エネルギーの展望……………	木村 敏美 26	▽高齢者の奥穂高岳登山……………	八木 信男 52
▽第二の人生、山小屋の「ソコカラ」……………	川口ひろ子 28	▽出自は百姓……………	吉田 真人 54
▽変貌する江戸と東京……………		▽趣味としての航空機搭乗……………	荒岡 衛 56
		▽オハイオ時代……………	安藤 晃二 58
		▽若返り行進曲……………	池田 隆 60
		▽漱石と子規……………	池松 孝子 62
		▽三つの大きな心配……………	市川 忠夫 64

▽被団協のノーベル平和賞受賞……………稲宮 健一 66

▽俳句を始めて十余年……………上田 信隆 68

▽伊勢神宮と熱田神宮のはじまり……………宇敷 辰男 70

▽ボストンの空に「蛍の光」

 ～孫基禎のリベンジ～……………内田 満夫 72

▽「人生百年時代」に思う……………大津 隆文 74

▽医療から介護へ～難病四年生～……………大月 和彦 76

▽大久保利通の不動……………大平 忠 78

▽浅草演芸ホール……………大森 海太 80

▽中世ヨーロッパの写本……………松浦 純子 82

▽イエス様のもとへ

 ～新井 良祐さんを偲んで～……………清水 勝 84

II 創作短編 II

▽『不在』……………内藤真理子 86

▽シニア五姉妹、父の故郷へ急ぎ旅……………福本多佳子 91

▽松江義士伝……………大塚 喜子 96

II 活動報告 II

▽何でも書こう会……………104

▽掌編小説勉強会……………105

▽サロン21……………106

▽ペン俳句のこの一年 佳句鑑賞……………107

▽ペン川柳……………112

▽ペン・フォト句会……………117

▽英語を読もう会……………118

▽何でも読もう会……………119

▽ホームページ関連……………120

▽クラブ活動を振り返って……………121

▽金京法一さんを偲ぶ……………大野 晁 124

▽都甲 昌利さんを偲んで……………松谷 隆 125

▽会員名簿……………126

▽編集後記……………128

 表紙の絵……………木村 敏美

 アート……………安藤 晃二 木村 敏美 塚田 實

 長尾進一郎 野瀬 隆平 福本多佳子

 八木 信男……………(五十音順)

巻頭言

〳書く、読む、詠む〳を楽しむ

会長 吉田 眞人

悠遊三十二号をお届けします。今年も会員諸氏による多くの作品を掲載する事が出来ました。エッセイ三十九編、創作短編三編と盛り沢山となっております。

一般的に、人は脳のなかで意識以前の形で、常に何かを感じ、考えているといわれています。視覚、聴覚、触覚、味覚などの感覚や想いについて、言葉を与え外部との接触に至ります。この言葉により会話が成り立ち、さらに言葉に秩序を与えたものが書くという作業になるわけです。

この作業を進めることがうまくいけば、「あやううこそものぐるおしけれ」ということになります。一方で、言葉にならなかつた想いや、正しい言葉が選択されずこぼれ落ちた感覚もあるわけで、書くということは難しいものでもあります。

ここに収められた作品が、どこまで想いを拾い上げることに成功しているか。読者である皆さんの判断は如何でしょうか。

後半には各分科会の活動報告を載せています。様々な方面で活発な会合が行われている事が、見て取れます。

この三十二号を手にとって、少しでも興味を持った方がおられたらホームページ (URLは obpen.com) をクリックして気軽に声をお掛けください。〳書く、読む、詠む〳をご一緒に楽しみましょう。各分科会の終了後には、反省会と称する打ち上げ会があり、談論風発のなかで一杯が、また多に楽しいものである事を申し添えます。



エッセイ



油絵 安藤 晃二

或る犬との出会い

長尾 進一郎

幼い頃、よく父に連れられて家の近くの東北線の線路際へ汽車、電車を見に行き、鉄道に親しみを感じてきた。学生時代になると、主要幹線や都市部の鉄道の多くは無煙化されていたが、地方路線へ行けばまだ蒸気機関車が活躍していた。

スマートな電車やディーゼルカーに較べると、蒸気機関車はいかにも無骨で野生味がある。発車時や上り坂では排気音と共に煙を噴き上げ、全力で奮闘している様子が伝わって来て、単なる機械とは思えない人間味すら感じてしまう。一方、下り坂では涼しい顔で快走する。

日本各地に新幹線が走る現代から見れば、蒸気機関車はエネルギー効率の低さや煤煙などから、時代遅れと言われても仕方ない。一方ファンの目から見ると、その黒く大きい姿や吐く煙には、勇壮さと共に情緒が感じられ、鉄道の象徴とも思えた。そうした汽車を撮影していた頃

の思い出を記してみる。

高校に進学した昭和四一年頃、国鉄の蒸気機関車は、全廃計画に従って残すところ約十年と言われた。そこで暇を見つけて、汽車が残っている路線に通い、写真を撮ることにした。貨物列車を含めると、当時は関東地方でも川越、八高、成田、総武、御殿場などの各線に汽車が走っており、家から比較的近いこれらの路線へは、日帰りで訪れることが可能だった。

現地に着いたら手始めに、駅付近で汽車の発車の場面を撮る。発車時は勇壮な煙を吐く姿を撮ることができ、続いて自然の中を走る汽車を捉えるべく、田畑や野山の風景の場所まで歩く。汽車の撮影では線路の勾配が重要な要素で、煙を沢山吐く上り勾配の場所が狙い目だ。

晩年の「SLブーム」と呼ばれた時代には、専門誌に列車ダイヤや撮影好適地の案内が詳しく掲載されたが、それ以前は市販の時刻表に出ていない貨物列車のダイヤは駅で教えてもらい、地図や自分の足を頼りに、良きそなな撮影場所を探した。好適な場所を求めて、撮影をし

ながら一日に二、三駅間を歩くことも珍しくない。

やがて関東の汽車が姿を消したため、次第に東北、信越、中部、関西などへ足を延ばし、泊りがけで出かけるようになった。信州への撮影旅では、定められた区域内が乗り降り自由の信州周遊券を買い、域内の夜行列車や駅の待合室を宿として、四日間、旅館には一泊もしないで旅をしたこともあった。今思えば、学生時代には若さに任せて強行軍をしたものだ。

関西本線が峠越えをする三重県の加太^{かた}付近も、ファンの間では知られた撮影場所だった。駅から歩いて峠を指す。上り、下りの列車がほぼ交互に来るため、列車を撮影する毎に、峠を挟んで反対側の登り坂まで移動する。

峠道の途中の一軒の家の前を通った時のこと、一匹の犬が庭から突然躍り出て、なぜか後を付いてきた。茶色の日本犬の成犬で首輪も付け、人に慣れた飼い犬だと分かるが、家でじっとしているのに飽きたのか。日頃の散歩の如く大人しく私の脇を歩き、撮影場所まで付いて来た。まるで私を主人と間違えているかのようだ。しかし

そこはやはり犬で、永くはじっとしていない。いよいよ汽車が来るという時、線路わきを駆け回り、汽笛を鳴らされてしまった。

次の撮影場所に移動するときも、迷う様子もなく付いて来る。汽車を待っている時間は退屈だろうと、ビスケットをやったりして時間を過ごした。おかげで、こちらも一人でいるよりは気持が和んだ。

こうして犬と共に場所を移動しながら、五時間ほど汽車を撮影しただろうか。今日の撮影はここまでにして、駅へ戻ることにした。そして犬の出で来た家の前を通った時、付いて来た犬は黙って庭に帰って行った。

翌日、再び撮影のため同じ家の前を通ると、その犬は庭で鎖に繋がれて所在無げにしていた。昨日の「家出」を飼い主に見とがめられ、繋がれてしまったようだ。手を振ってみたが、覚えていないのか、座ったままこちらを見ているだけだった。

OBペンクラブ十五年

中村 晃也

早いもので 当クラブに入会してから十五年になる。以前写真に俳句をつけるフォト俳句に関するアルバムを出版したところ、「写真は上手いが俳句がイマイチ」との評を得て高校の旧友大泉潤氏の紹介で「ペン俳句会」に入会したのがきっかけである。

「ペン俳句会」は、何ととっても西川知世先生の指導力、特に短時間に原句を的確に修正される能力は敬服に値する。ほんの少しの部分直すだけで原句が見違えるような名句になる状況を目の当たりにして、経験豊富な先生について学ぶことの重要性を身に染みて感じた。

先生のご主人のおかげで毎年、箱根仙石原近くの温泉付きの宿舎を利用させていただき、吟行のあと美味しい料理を前に句友と歓談するのは何にも増して楽しい行事である。

本文を執筆中に角川書店の『俳句』誌一月号が届いた。

驚いたことに令和俳壇欄に投句していた拙句が三句共入選していた。白濱一洋選「万物が身じろぎもせぬ良夜かな」、山田潤子選「山の辺の道尽きるまで鯛雲」、森田純一郎選「晚夏光ほこりまみれの虫眼鏡」。これはひとえに西川知世先生のご指導の賜物と感謝している。

OBペンクラブ入会と同時に「何でも書こう会」に参加。毎月皆様の文章に接し、懇親会で多くの知己を得た。文章を八百字にまとめる要領を覚え、毎回国内や海外旅行の事柄を纏めて文末にオチを付ける作業は楽しかったが、十年もたつと文章のネタが切れはじめ投稿を続けることが苦痛になってきた。また、公園や博物館の案内書の丸写しであったり、自分の技術的知識の披露に近いものが散見されたり、何でも書こう会とはいえ、魅力の乏しい作品が目につくようになった。

加えて、発表作品についてコメントをするメンバーが数人に固定されて、他の参加者は黙ってそれを聴くような事態が鼻についてきた。

これは会の進行係の腕前に影響されることが多かった

が、一時的な現象であつたと思つている。

入会して二年目に新しい勉強会として「フォト句会」の設立を理事会に提案した。これまでの勉強会とは全く異なる新しいシステムなのでなかなか理解してもらえなかつたが、初回は理事会メンバー全員に出席してもらい何とか楽しくお披露目ができ、数人の理事が即座に入会を承諾してくれた。

勉強会のあとの懇親会は、施設内のビュッフェや参宮橋の蕎麦屋とかではなく、新宿や渋谷界隈のレストラン巡りを企画し、世界の料理をトライすべく、プロマネである小生が毎月事前に数軒のレストランを調査し、メンバーに喜んでもらった。

また、勉強会の進行と懇親会の企画を、アイウエオ順に会員が担当することにし、八月は勉強会をお休みにして、夏負け防止の旨いものを食べる食事を開催した。

フォト句会本体よりも食事が主体になったことは否定できないが、少し贅沢をしても、気心の知れた仲間と旨いものを食べる会は相応の人気を得て、食事会だけに参加されている方もおられる。

現在は次世代のプロマネが中心となつているが、老齡化の波はいかんとも抵抗し難く、会員増強のための工夫が欲しいところだ。カメラが苦手でも、スマホできれいな画像が得られるので新しい形式のフォト句会ができるものと期待している。

これまで俳句、フォト句のような短詩形の作文を続けたが、長い文章を書くことがOBペンクラブの本領であると気が付いて、遅まきながら数年前から「掌編小説勉強会」に入会した。登録メンバーは十人を超えるが、実際に隔月に作品を提出する者は五名前後であつた。

提出される作品は多岐にわたり、時代物、恋愛物、空想物等々、短期間に十ページ余りの創作文が書けるメンバー各位の文章力に感心するばかりである。

文学的に非才な小生は海外出張の経験談、息子の闘病記などでお茶を濁しているが、そろそろこの勉強会からはリタイアの時期が来ていると自覚している。

兎に角、老後の十数年間OBペンクラブのおかげで充実した人生を送ることができている。感謝あるのみ。

二人の尊敬する上司

豊澤 幸平

三年前に会社員生活を終了した。二十二歳から七十三歳までの五十一年間、大阪を振り出しに、東京、ドイツ、米国で勤務、引越しを伴う転勤・異動は国内外で九回を数える。社内外の方々また家族に支えられ、何とか完走出来た。走馬灯のように色々な出来事が頭に浮かぶ。

困難や苦しい出来事が多かったが、達成感や充実感を得た日々もあり、ともかく必死に走り回ってきたというのが実感である。

多くの素晴らしい方々に出会ったが、とりわけ社内での二人の尊敬する上司に出会った。

一人は、大学を出て就職した総合商社で指導して頂いた上司Nさんである。当時、会社では「指導員制度」があり、新人は半年間、手取り足取り仕事を指導して頂ける。Nさんは後年、会社で幹部となられたほど優秀な方

であるが、当時は三十歳そここの新進気鋭の商社マンであり第一線を飛び回っておられた。そのかたわら、大学を出たばかりで全く社会、会社を知らない新人の私に、厳しくも温かく指導をして下さった。仕事に真摯に打ち込む姿勢、分析の重要性、豊かな発想に基づく着眼、物事を的確に捉えるロジカル思考、また説得力が重要であることの教えを受けた。これらはその後の長い会社員生活での基礎となったが、私を含めた部下達は、「N学校の卒業生」と社内であって呼ばれていた。

入社から数年経過、ある取引における商社の役割について悩んでいる時にご相談したところ、「物流を取引に有効活用することを考えたかどうか」と指導を受け、その商品にとり日本で初めての輸送手段の確立に成功した。

「新しいことをやることは素晴らしい。いい仕事をしてくれた。これからも頑張れ」と褒めて頂いたことを今でも鮮明に覚えていてる。

Nさんのお墓は関西にあり、命日の三月には出来るだけ参らせて頂いている。

もう一人の尊敬する上司Tさんは、私の転職先の化学会社の幹部で、十八年間に亘り部下としてお仕えした。私がこの会社に入社した時は既に最高幹部、経営者として活躍され会社の業容を大きく伸ばしてこられていた。環境変化への的確な対応、事業の多角化、M & A等、また人材育成にも力を注いでおられた。

途中入社の際にも、いろいろな部署や子会社の運営、経営を任せて頂いた。十八年間、ほぼ毎月面談し業務報告とご相談を行った。部下からの報告を集中して聞き、書類を熟読、問題点を鋭く的確に捉え、最後に秀でた判断力で指示を出されるTさんに、いつも遭遇した。

記憶力も抜群で、一カ月前に報告したことを毎回、必要に応じ頭の引出しから出してこられるので、辻褃の合わないことや矛盾することを報告出来ない緊張感もあった。特に印象に残っているのは、業界団体の会長を兼務されていた際、私は挨拶文をA4用紙で五枚作成、会議の前日にお渡しした。当日に話をして頂いたが、原稿を全く見ずに約二十分、内容のみならず人名、役職、数字を間違ひなく完璧に話をされたことに大変驚いた。「な

ぜそれが出来るのですか」とお聞きしたところ、「若い時から訓練をしているから」と何気なく仰った。恐らく目に見えないところで大変努力されていると想像した。

経営については当然厳しく、いい結果が出た時は「ようやった！」と大変喜んで頂いた。何かの事情で指示通りやらない時は当然お叱りを受け、始末書を十数枚提出した。「預かっておく。この件はこれで終わり。これからも頑張る」と机の引出しの中に収められ一件落着となる。

仕事のみならずプライベートの面からも部下や若い人に配慮されていた。「奥さんは元気か。仲良くやれよ、大事にしなさいよ」と声をかけて頂くと、「この人の為に頑張ろう」と思わせる不思議な力があると同僚も言っていた。

五十一年間の会社員生活で、若い時代に仕事の基礎や生き方を教えて下さった上司、後半に管理職、経営者になった時代に模範となる上司に恵まれたことは、この上ない幸運であった。

書齋随想

塚田 實

息子は大学を卒業してしばらく経つと、独立して職場近くのマンションに移っていった。私のそれまでの書齋は狭かったので、息子の居た部屋を新しい書齋にした。部屋は半地下で、東側は掘り込まれたドライエリアに面している。北と南はコンクリートの壁に囲まれているので防音効果も優れており、西側は階段で玄関ホールに繋がっている。壁面に飾られているものを眺めると、人生の様々な思い出が湧いてくる。

セザンヌの『大きな松のあるサント・ヴィクトワール山』と『林檎とオレンジ』のプリントが掛かっている。セザンヌが好きで、二〇〇二年十二月には、生家とアトリエのある南仏エクス・アン・プロヴァンスを訪れた。アトリエには、絵そのままの果物が置いてあった。

仕事で海外出張が多かった。またシカゴに留学し、駐在でニューヨークとロンドンに住んだので、多くの美術

館を訪れることができた。スーラの『グラント・ジャット島の日曜日の午後』で有名なシカゴ美術館、ニューヨークではメトロポリタン美術館や近代美術館、グッゲンハイム美術館などを訪れた。メトロポリタン美術館のカフェで、マイヨールのトルソー越しにセントラルパークの『クレオパトラの針』（オベリスク）を眺めながらワインを飲み、食事するのは贅沢な一時だった。マンハッタン島の北端にあるクロイスターズ美術館は静かで、ハドソン川の景観と共に楽しめる。ワシントンのナショナル・ギャラリーやスミソニアン博物館も優れた作品が多い。

ロンドンにはナショナル・ギャラリーやテート・モダンがあるが、私はコートールド美術館が好きだ。欧州全域が担当地域だったこともあり、ルーブル美術館やオルセー美術館、プラド美術館など何回も訪れた。ルーブル美術館で買った高さ三十七センチほどの『ミロのヴィーナス』と『サモトラケのニケ』の大理石像レプリカも本箱の棚にある。絵を見るだけでなく、定年後絵を習い始めたので、今では書齋に描いたキャンバスが溢れている。

浮世絵もある。アダチ版画研究所は沢山の浮世絵を複製しており、葛飾北斎、歌川廣重、東洲斎写楽、喜多川歌麿、鳥居清長の浮世絵を買い求め、季節に応じて壁の展示を変えている。お気に入りには北斎の『神奈川沖浪裏』だ。構図と波の迫力が素晴らしい。廣重の『東海道五十三次 庄野 白雨』は雨の細かい線と竹林を背景に坂道を往来する人が生き生きと描かれている。『蒲原夜之雪』は夜に深々と降り注ぐ雪の静寂が感じられ印象的だ。

書齋の東側はオーディオ・ヴィジュアルスペースだ。天井に届くCDラックがあり、約七百五十枚のCDを収納している。ジャンルはクラシックから歌謡曲まで多様だ。最近では中世音楽を聴くことが多い。レコードプレイヤーもあり、LPレコードもまだ六十枚ほど持っている。フルトヴェングラーやビートルズなどの演奏をレコードで聴くと、懐かしいアナログの音が部屋に響く。オペラはニューヨーク・メトロポリタン・オペラハウスやロンドン・ロイヤル・オペラハウスによく通った。オペラと共に幕間で気ぜわしく食事をとる雰囲気が良い。

ロンドンから車で南へ二時間ほどのグライインドボーン音楽祭では、オペラ開始前と幕間に羊を眺めながらピクニックができる。コンサートはニューヨークのエイブリー・フィッツシャー・ホール（旧称）やロンドンのバービカン・コンサート・ホール、ロイヤル・アルバート・ホール、ロイヤル・フエスティバル・ホールなどで楽しんだ。

随想は次々巡る。はつと我に戻り、改めて書齋を見回すと、書齋と地下の納戸には大きな本箱が二つもあり満杯だ。今は本を一冊買うと、必ず一冊捨てるようにしている。しかし本や壁の飾り物を眺めていると、子供や孫たちには何の価値もないように思える。今年七十八歳になった。あの世には何も持って行けないのだから、残りの人生を考えると積極的に断捨離をしなければならぬ。しかしいつ死ぬか分からないのだから、どんどん捨てる。と今までの人生を否定されるようでなかなか決心がつかない。いつかやらねばならないが、死ぬまで迷いそうな気がする。心は揺れる。

ノーモアヒバクシャ

核兵器廃絶の願い

瀬尾 勝弘

筆者は広島県の出身であるが、広島市内に住む身内がいなかったために被爆者の方々に接する機会はなく、広島、長崎への原爆投下を身近な出来事とは感じていなかった。それでも、広島県内の小学校では毎年の夏休み帳には必ず原爆投下がテーマとして取り上げられていた。

また、地元の新聞では、原爆の日に合わせて紙面のかなりを割いてその特集記事が組まれていた。そのような環境の中で、折り鶴・千羽鶴で有名な「佐々木禎子さん」の話など被爆者が原爆後遺症に蝕まれる悲惨な実態は、少年時代より頭に焼きついていた。

高校生の時、自由を重んじる校風であった母校の修学旅行の行き先は、本土復帰を直前に控えた沖縄であった。生徒全員が授業の合間に校舎の脇で写真部の生徒にパスポート用の写真撮影してもらった。パスポートが必要

であることで沖縄がまだ日本に復帰していないことを実感させられた。

九州から沖縄までは船旅であった。小型の客船であったため外洋に出たときに荒波で激しく揺れた。今から考えると、この外洋を航行した時間は、平和な世界が当然のことと感じていた若者に対して、太平洋戦争の激戦地となった沖縄の地に立つ前に心構えをさせる時であったのだろう。沖縄では、各地の激戦地を訪れ現地の高校生との意見交換会にも参加した。琉球の文化を感じさせる琉球紅型の小物をお土産に買って帰ったのは懐かしい思い出である。

このようにして、沖縄と広島そして長崎が、太平洋戦争末期に一般市民が無差別に大量に虐殺された土地であることを認識するようになった。

その後、半世紀近くの間、学会など仕事の関係で、何度か、沖縄、広島、長崎に足を運ぶ機会があった。

昨年も七年ぶりに広島を訪れた。

原爆ドームの前に、当時の悲惨な状況に心を痛めるとともに反戦平和の誓いを新たにしたい。今にも崩れ落ちん

ばかりの原爆ドームの写真を見るにつけスケッチしたくなるのも、犠牲者の方々の魂が筆者の心を揺さぶっているためかも知れない。

広島から帰って二週間あまりしたときに、ノーベル平和賞が日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）に授与されることが決定したというニュースを聞いた。

今回のノーベル賞委員会の決定は、今まさに世界で核兵器使用の危機が迫っていることを懸念する世界の人々に後押しされた、若手の委員長を始めとする委員らの切実な気持ちによるものであろう。

ロシアのウクライナ侵攻は今や膠着状態となり、戦争終結はおろか停戦の兆しすら見えない。一方的に侵攻を開始したロシアのプーチン大統領は、「戦術核」と称する核兵器の使用も否定しない態度で、NATO（北大西洋条約機構）加盟国などを牽制している。

核戦争の悲惨さは、被爆地・被爆者の惨状を思い返せば誰もが想像できるはずである。しかし、現実の世界は核兵器廃絶に向かってはいない。むしろ、核兵器開発競争に明け暮れる大国や、「核の傘」と呼ばれる核抑止力

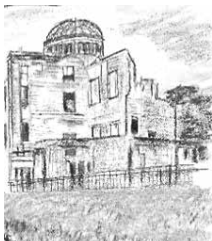
に依存して国際秩序を維持しようとする考え方が世界を席巻しているように思われる。

より強力な武器を持つとうとする理由として、傍若無人な独裁者が支配する国家から攻撃を受けないようにするために国家防衛上やむを得ないという論理が展開される。

そもそも、人間には弱肉強食の生物学的本能があり、人類は争いすなわち戦争を避けられないのであろうか。

世界の現状からすると、戦争をなくすことのみならず核兵器を廃絶することは不可能なようにも見える。しかし、核軍備拡大競争の結末が人類のみならず地球全体の破滅であることは、核戦争のシミュレーションからも明らかである。したがって、人類の未来のためには、遠く険しい道のものであっても、核兵器のない世界の実現に向けて一歩ずつでも前に進む努力をするしかない。

ヒトには、人類愛、生命の尊厳という優れた特性がある。平和を愛する心が、他者を征服し支配しようとする邪悪な欲望を圧倒するのを期待するのみである。



地熱発電の大規模利用開発を推進

杉浦 右藏

地球の温暖化防止国際会議には、COP（約二百の条約締結国・地域が参加、毎年温暖化対策の国際ルールを話し合う国際会議）と、IPCC（気候変動に関する政府間パネル）と呼ばれる二つの機関があります。IPCCは世界気象機関(WMO)と国連環境計画(UNEP)によって設立された政府間組織です。

日本政府、資源エネルギー庁（原子力、太陽光、風力、地熱、スマートコミュニティ等を所管する経産省の外局）は日本の電力政策の骨格となるエネルギー基本計画を三年に一度見直し、二〇二四年十二月に経済産業省の審議会で新しいエネルギー基本計画を発表しました。

新しい計画の素案は、太陽光や風力などの再生可能エネルギーを二〇四〇年度には最大の電源とする一方、これまで依存度を低減するとしてきた原子力も、最大限活用する方針を示しています。日本のエネルギー自給率は

十二・六％だと言われます。そのうちの二酸化炭素排出量は発電総量の四割を占めます。改善には新エネルギー依存を増やすことしかありません。

COP、IPCCの議論に別見解を持つ学者もいます。ここでは興味ある三つを紹介します。

一つ目は、セルビアの地球物理学者ミランコビッチの見解です。地球の公転軌道の離心率の周期的変化など三つの要因で日射量変動周期が決まる。日射量の変化は、北極や南極の氷床の規模の変化、氷期や間氷期が訪れる年代を求めるのに有効だ。ここ十万年の地球の温度変化を調べて、約三万年は適度な上昇下降を繰り返しているが四度目の現在は上昇期カーブが下降せず、上昇し続けている。

二つ目は、英国イースト・アングリア大学の地球温暖化研究で、彼らが著した地球の諸現象が地球温暖化の主要原因とする研究論文です。要約すると、地球は温室効果ガス、太陽放射、太陽変動、日傘効果、エアロゾルアルベド炭素収支（吸収源・森林破壊）、海洋循環、大気循環、大気変動、ヒートアイランド軌道要素、変動地殻変動等

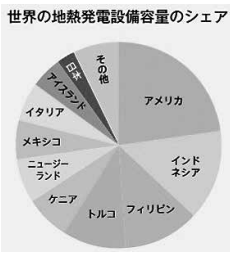
によって制御されている。

三つ目は立命館大学の中川毅博士の「年縞」の研究成果です。福井県水月湖の湖底四五メートルのボーリングにより年平均一ミリ程度の試料を解析し、京都近辺十五万年の気象を年単位で明らかにしました。

前書きが長くなりましたが、東日本大震災までは、日本の必要電力は原子力・化石火力・水力他の三分割で構成されていました。原発事故で原発分を化石火力に依存せざるを得なくなりました。原発の出力を一基一〇〇万KWで計算すると、原発五七基分は五七GWに相当します。地熱発電の出力を一基六万KWで計算すると、千基位が必要です。再生エネルギーを総計しても到達困難です。そこで眠っている再生エネルギーに着目し、大規模地熱発電を、日本の発電源と捉え開発を強力に進めることを提案します。

環太平洋火山帯は千島・日本・フィリピン・インドネシアが連なっています。地熱利用の可能性は世界三位ですが、実際の利用は一〇位以下です。現在、日本の地熱発電所は七〇カ所あります。全部足しても原発一

基分にしかありません。日本の地熱発電の適地は、国立公園や温泉保養地などです。日本はいま電気が必要です。最善の選択をしなければいけない時が来ています。地熱発電には、ドライスチーム、フラッシュサイクル、バイナリーサイクルの三方式があります。更に将来技術として、熱水・蒸気資源が無くとも発電可能な高温岩体発電の研究開発も行われています。世界の地熱発電設備の七〇%は日本メーカが受注しているそうです。頑張れ日本政府です。



北海道ドライブ

志村 良知

昨年六月、夫婦で北海道をドライブした。

学生時代に一月ほど車で放浪したことがあり、以後ずっとチャンスがあつたら自分の車で走ってみたいと思ひ続けていた。二年前、最新の安全運転支援技術をフル装備した車に乗り換えたことで、今がチャンス、と実行に移した。

日程はフェリー船内二泊を入れて十泊十一日。苫小牧に上陸、西に向かい洞爺湖と積丹半島、そこから一気に横断、旭岳を経て網走、北上して稚内、礼文島。南下して富良野を経て苫小牧というもの。コースの素案は子供たちが独立した後夫婦だけで北海道に赴任、四年間で「北海道は極めた」という友人に作ってもらった。

フランス駐在中にはこの位の期間と距離のドライブは何度かやっていた。一番長かったのは当時住んでいたアルザスから千五百キロあるスコットランドのスカイ島往

復で、イングランドも含めて十六泊。その頃のドライブは地図だけが頼り、ホテルも今日はここが到着地と決めた場所を探していた。しかしその頃は私も齢四十代で気力も馬力もあつた。今は七十も半ば、そんな無茶はできない。今回は宿は全て予約し、マップコード（カーナビに指示が出せる地図上の座標）も入念に調べておいた。紙の地図は事前に大体の方向を確認すると途中に何かあるかを見るだけで、走り出したらカーナビ様のおっしゃる通りに、ということになる。

車には、レーンの真ん中を保ち、前に車がいれば車間距離を保って追従し、停まれば自分も停まり、前に車がいなければ指定の速度を保って走る、という運転支援装置が付いている。これには高速道路のみならず一般道の運転でも随分と助けられた。加えて、危険回避ブレーキ、ペダル踏み間違ひ防止、緊急ヘルプコールスイッチ、など至れり尽くせりで助けてくれる（筈である、試していない）。

北海道のドライブの魅力は、美しい風景とおいしい食べ物とを結ぶ道路が真つすぐで車が少ないことである。真つすぐな道には、起伏を構わずに作ったアップダウンのある道と平原を貫く真つ平な道とがある。北海道の道は両者が適度に入り混じって楽しい。

前者の代表は、富良野の『ジェットコースターの道』。富良野地方の丘陵地帯を約二キロ半、真つすぐに突っ切っていく。激しい起伏があり「ジェットコースター」の名前の由縁になっている。

真つ平で真つすぐなのは、稚内に近いオホーツク沿いの牧草地の中を走るエサヌカ線。ガードレール、並木、立木、建造物の類は道路脇にはもちろん見渡す限り何もない。この稀有な風景ゆえに時々観光バスとすれ違うが遙か彼方からやってくるのが見える。

インターネットには北海道の田舎道の運転の特徴として以下のようなことが挙げられていた。

①一般道では制限時速プラス二十位は許容される。ただし制限速度四十のエリアでは制限を守る。こと。い

ずれにせよレンタカーと他県ナンバー車は取り締まりの対象になりやすい。

②黄色信号では基本止まらない。赤になっても数秒間は突っ込む。後続車の挙動に注意。

③車線も路側帯も広いので、一車線でも横に並んでくる車がある。

やや大げさであるが、実際に運転してみて成程これか、と思うことも度々あった。煽られ威嚇されたこともあったが、超ベテランは煽られ慣れているし、後方監視ドラレコも付いている。

二十五年ぶりの長距離ドライブで、車での旅行の楽しさを思い出した。ホテルで荷物を降ろす時も、バス旅行とは気分が違う。これからはそれを味わえる時間も限られる。ならもう少し、安全装備を信じて長距離ドライブを楽しみたい。その前に今年の高齢者運転免許更新という大仕事待っている。

『小京都巡り』(加茂市(新潟県))

清水 勝

久し振りに『小京都巡り』に出掛けようと思いついた。既に三十四か所を訪ねており、今回は何処にするか。

小京都と称せられる市や町は「全国京都会議」に加盟している所が四十あり、過去に加盟していた市町を含めると五十六になる。その他に旅行雑誌等で小京都と紹介される市町は十数か所ある。

そんな中で、余り知られていないが、京都に相応しい名前の「北越の小京都」といわれる『加茂市』にした。

新潟県に加茂とは？

平安京遷都の際に、この地の青海神社が京都の賀茂神社の社領になったことから、加茂と呼ばれるようになったとのこと。現在も青海神社のある小高い丘を加茂山、市内を流れる川は加茂川と名付けられている。

私の『小京都巡り』には拘りがあったて、地元の飲食店

で食事を取り、地元の人と話をし、地元を散策することになっている。

早速、旅館を出て飲食店に向かい、刺身と地酒の『萬寿鏡』を頂く。近くにいらっしゃった方に声を掛けた。

「小京都巡りでやってきました」

「ようこそ加茂に！ そうそう今日は加茂山がライトアップされ、ライブをしていますよ」

「ありがとうございます。後で行ってみます」

食事を終えて出掛けようとしたときに

「少し時間がありますので加茂山までご案内します」

とおっしゃって頂き、お言葉に甘えた。出会う皆さんが挨拶をされるので、この方は地元の有名人のようだ。いろんな話をして判ったことは、地元密着のスナックのママさんだった。帰り道オープン前の上品なお店に寄らせてもらい、加茂市やご家族の話を聞かせて頂いた。

かつて加茂市の主要産業は織物業で、京都の間屋と取引をしていたという。ここでも小京都に相応しい町だと感じた。ママは若い頃、撚糸会社に勤めていたそうで、

今、ご主人と息子さんは撚糸関連の会社を経営されている。こうした話ができるのが小京都巡りの楽しさだ。

翌日は加茂山公園、青海神社を訪ね、街歩きは「ながいきストリート」と称せられる雁木造りのアーケードを歩いた。お寺も数多くあり、加茂川沿いには立派な山門の定光寺をお参りした。植木屋さんが冬に備えて樹々の雪囲いの作業中だった。

加茂市は人口二万人余ではあるが、隣の三条市等と合併することもなく「北越の小京都」として頑張っているのがうれしい。「土佐の小京都」である中村市は四万十市と、「九州の小京都」飫肥は日南市と合併してしまった。

『小京都巡り』は掌編小説の材料探しがきっかけで始めたもの。特に印象的な小京都の町を背景に、恋愛ものや歴史もの等、愚作ながら十五篇を「掌編小説勉強会」で発表した。

主な小京都の紹介を兼ねながら、作品の題名をまとめてみると次の通りとなる。

・松前町（北海道）…『与之助蝦夷へ行く』

- ・角館市（秋田県）…『枝垂れ桜の咲くまでに』
- ・金沢市（石川県）…『金沢中央署の刑事たち』
- ・大野市（福井県）…『おかごとすい』
- ・近江八幡市（滋賀県）…『しまつしてきばる』
- ・京都市（京都府）…『京都回帰へ』
- ・龍野市（兵庫県）…『和菓子と素麴の青春譜』
- ・津山市（岡山県）…『和恵追想』
- ・高梁市（岡山県）…『高梁川の流れ』
- ・竹原市（広島県）…『竹原かぐや姫』
- ・尾道市（広島県）…『尾道父娘旅』
- ・津和野市（島根県）…『三人の津和野』
- ・大洲市（愛媛県）…『大洲花子を探せ』
- ・中村市（高知県）…『土佐一条家の盛衰』
- ・飫肥（鹿児島県）…『火をつけたら消す』

改めて読み返すと、それぞれの町やお会いした人を出す。小京都の一人旅、書いておいて本当に良かった。さて、今回の加茂市を舞台にどんな掌編小説が書けるだろうか。

どちらが幸せか

児玉 寛嗣

JR田端駅の北口から西に向かって坂を下って行くと上野方面に通じる不忍通りに出る。通りを渡ると今度は上りだ。坂を上りきると都立駒込病院が右手に現われる。傍の案内板の説明によると、「病院の改築工事中に、貝塚が発見されて発掘調査が行われた結果、二十軒ほどの住居跡が確認され、四〜五千年前の縄文時代中期に集落があったことが判明した」と書かれている。土器のほかに、漁労活動を示すおもりなどが多く出土されたようだ。昔はこの辺りの台地は入り江に臨む海ぎわだったことから、魚介類がとれるので縄文時代の人々にとっては一等地だったのだろう。この集落は全国的に有名な青森の内丸山遺跡とほぼ同時代に栄えたらしい。

縄文時代とはどんな時代だったのだろう。アメリカの進化生物学者、ジャレド・ダイアモンドによれば、歴史

を辿ると時代の経過とともに、社会構造は、小規模・血縁集団・部族社会、首長社会、国家へと変容してきており、各社会の構成人口はそれぞれ、数十人、数百人、数千人、五万人以上と考えられ、小規模・血縁集団は移動生活、それ以外は定住生活を営んでいたとされるのとことだ。この分類によると工事中に発見された縄文中期の遺跡は小規模・血縁集団のものと推察され、血縁のある親類縁者が集団で生活していたのだろう。魚や貝が不漁となれば、よりよい漁場を求めて土器や漁労道具を携えて移動したのであろう。ずっと奥地にあたる王子辺りでも大きな貝塚が発見されていることから漁場はかなり広範囲に渡って存在していたようだ。当時の日本全体の人口は二六万人、ほとんどが東日本で、特に山梨や長野に多かった。その理由は主食のドングリがよく採れたことによるらしい。多数の小規模・血縁集団が各地に分散して暮らしていたのだろう。

このような社会では、構成員が少ないので意志決定も平等に行われる。諍いの解決も皆の意見を聞いて円滑に行われ、階級分化もエリート層もなく、もちろん格差も

ない。反面、三十代前半までに六十%以上の人が亡くなっており、七十才以上生きた人は非常に稀な存在、文字通り、古希であったという調査結果もある。大半の人は自分で食べる糧を採集出来なくなる以前に亡くなっていた。

翻って、現代の社会構造は、先のジャレド・ダイアモンドによれば、最終変容段階とされる国家である。地域集団であり、一部の独裁国家を除いて投票によりリーダーを選ぶ民主主義の形はとるが、意志決定は集権的に行われる。争いは法律に則った裁判で解決されるが、国家間の戦争や内戦もある。職業の分化が進み階級化されておりエリート層が存在する格差社会である。戦闘に使われる兵器も飛躍的に殺傷能力が増している。一方、医療や栄養学の発展によって長寿化が進み、先進国をはじめとして高齢化社会を迎えつつある。数を増した高齢者は現役世代の負担による年金システムで糧を得ている。

縄文時代と現代を対比してみた。唯物史観によれば、

歴史は発展的に変革されていくもので、時代が下るほどよい社会になるとされ、小規模・血縁集団が散らばっていた縄文時代よりも国家社会である現代のほうが進歩した社会と結論付けられる。

さて、数万年先の人間が縄文時代の遺跡と現代の遺構や史実などからその社会構造や暮らしぶりを比較したとすると、果たしてどちらが幸せだったと判断するだろうか。パレスチナのガザ地区やウクライナ、あるいは内戦の絶えないアフリカ諸国の惨状に目を向けると前者に軍配をあげてもおかしくはない。病院の傍の児童公園で無邪気に遊んでいる子供たちを眺めながら、数千年前にこの場所に暮らしていた縄文人に思いを馳せ、とりとめもなく考えてみた。

参考資料…「銃・病原菌・鉄」

(ジャレド・ダイアモンド著・倉骨彰訳)

核融合エネルギーの展望

荒野 詰也

一、人類のエネルギー利用の変遷

人類は、五〇万年前から火を利用してしたが、この火の利用は人類に巨大な文明を發展させた。その後、西暦一三〇〇年頃に森林資源が激減したため、石炭等の化石燃料を使い始め、そして現在地球温暖化問題を引き起こしている。この為、次の燃料としての核分裂エネルギーを利用しているが問題が多い。

二、核融合エネルギー発生仕組み

炭素社会の次は水素社会である。水素の利用法として二つある。一つは水素の燃焼反応 ($2 \times \text{H}_2 + \text{O}_2 \rightarrow 2 \times \text{H}_2\text{O}$) でありもう一つは太陽活動そのもので核融合反応 ($4 \times \text{H} \rightarrow \text{He}$) である。核融合反応を得るために核融合プラズマに閉じ込める必要があるが、方式としては二種類あり、磁場閉じ込め方式と慣性閉じ込め方式等である。

三、核融合エネルギーの特性

① 核分裂エネルギーとの比較

核分裂の原発は、燃料の再利用に数々の処理が必要である。まず複数の原発からの使用済み燃料の処理システムは大規模である。複数基の原発からの燃料を集めて再処理工場に集めて処理する等、核燃料サイクル加工するまでには複数の工場でいろいろな処理を行う。

核融合炉の燃料サイクルは、核融合システム内でのループなので核融合施設内で閉じている。燃料物質として外部から持ち込むものは、非放射性の重水素トリチウムだけである。

② 核融合エネルギーシステムの特性は下記のようにまとめられる。

- A、燃料が海水中に豊富に含まれている。
- B、燃料一グラムから石油八トンを燃焼したときに相当するエネルギーが得られる。
- C、高レベル放射性廃棄物を出さない。
- D、二酸化炭素のような温暖化ガスは発生しない。
- E、反応により生じる物はヘリウムガスと中性子である。

F、燃料・電源がなくなると反応は自動停止するため
暴走事故は起こらない。

四、核融合炉の固有安全性

核融合炉は放射能が放出される事故が起こりにくく本質的に安全である。プラズマ内の燃料の燃焼は数秒しかかからないので燃料供給が止まれば燃焼は数秒以内止まる。燃料を入れ過ぎてもプラズマの温度が上がらずに制御できなくなり停止する。

五、核融合の資源量

重水素は海水中の水素の七〇〇〇分の一であり豊富であるが三重水素は天然にはほとんどないので、核融合炉のブランケットの中でリチウムに中性子を吸収させて作り出す。リチウムは海水中に高濃度で溶けているので回収利用する。

六、世界の開発状況

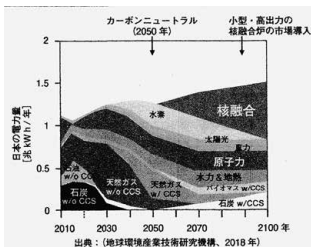
核融合の世界でスタートアップ企業がこの新しいビジネスチャンスを世界中で展開している。この新しい技術への挑戦は国家予算の投入だけではなく合計数千億円もの民間予算が投資されており企業の急展開が始まっている。

る。

国際的には、「ITER計画」がEU・米国・中国・日本等七カ国で以前から活動しつつあり、日本も核融合市場研究会がスタートしている。米国の巨大企業界でもビル・ゲイツやジェフ・ベズス氏等が参画し、カリフォルニア大学のノーベル賞受賞者である中村修二氏もベンチャー企業を立ち上げている。これらの参画者の活力により、従来の核融合エネルギーの実用化の時期が大幅に早まり、目標時期も二〇三〇年代の末ごろまでには実証炉が出来そうである。

七、将来の核融合エネルギーの予測

日本政府は、現在、二〇五〇年カーボンニュートラルを見据えて二〇三〇年の電源予測を0・93兆KWHとして、これを将来に展開すると、核融合の時代は二〇五〇年ころからと想定している。



第二の人生、山小屋の「ソコカラ」

木村 敏美

二〇〇二年三月、主人は四十年間勤めた会社を定年退職した。退職する数年前に「第二の人生の夢は、孫達に無農薬野菜を作って食べさせる事」と標高四三〇メートルに土地を購入した。唯、自宅から目的地迄四十分程かかるので、定年後に十四坪のフィンランド製の山小屋を手作りする事にした。

基礎工事はプロに頼み、壁板張りとは屋根板の取り付けまでの二日間は、まだ現役の職場仲間に手伝って頂いた。その後の半年間は夫婦で、内装や電気の配線、水の配管、塗装、ベランダ等自力で仕上げ、二〇〇三年四月に完成。元々木工が趣味だった主人は、五十二歳で心筋梗塞を患った事も忘れる程熱中し、職場の上司は「仕事の時とはまるで別人だ」と驚かれた。

ベランダを作る際には、屋根の勾配は正面の九千部山が見える様に設計。内装では奥の部屋に段差をつけて広

い板を張りベッドにしたが、時には孫達のダンスの舞台に早変わり。棚は用途にあわせ場所と大きさを考えて作った。掘炬燵も少人数用を二つ作り、大勢の時は繋げる様に工夫。薪ストーブをつけると暖かさだけでなく炎を見る楽しさが加わった。又、自分達のアイデアで玄関正面にアルミのサッシを横向きに取り付けると、部屋から山の景色が一望でき、風呂場も雪景色や星空も見える所に変えると想定外の効果があった。唯、山を削っただけの土を有機栽培の畑の土に変えるのは大変で、五年位かかった。

山小屋へは那珂川市にある新幹線の基地の横を通って行く為、孫達は停車している新幹線を見る度に歓声を上げて喜んだ。暫く行くと杉や檜に覆われた暗い山道に入り、急な坂道を十五分ほど登りきると、広大な明るい世界が広がっている。眼下にはゴルフ場と小さい森、遠くに背振山や九千部山が見える。

完成した時には、手伝って下さった方々を招いて壁に名前を書いて御祝いし、皆「あんなに楽しい経験はなかった」と喜んでくれた。その後も訪れて来る人達は多く、

薩摩芋掘りやスイカ割り大会、収穫祭等をして楽しんだ。

また電気自動車で湧き水を捜すというテレビ番組があり、できたばかりの山小屋に偶然立ち寄り、充電と湧き水迄案内した経緯が放映された。それを見た知り合いの中国人留学生とは一緒に野菜まで作るようになり、彼女の両親も来られ餃子の作り方を山小屋で伝授、今も交流は続いている。

野菜も不揃い乍らそれなりにできるようになり、孫達も喜んで食べる様になった。そしていつの間にか小さい手で鋤を持ち「あっ、腰が痛てー」と言い乍ら畝の溝を整えるようになった。野菜好きは勿論、自然を愛する事や土いじりも好きになってくれた事は大収穫である。

ある時、幼稚園児の孫がベランダの流し台で黙々と何かやっている。見ると慣れない手つきで苺の悪い部分を包丁で取り除いている。聞くと「みんなが美味しそうに食べているのを見ると嬉しいから」と。この言葉は何にも代えがたい宝物となった。

また、大人の声には反応しないのに、孫達が「ホーホケキヨ」と叫ぶと、美しい声で答えてくれる鶯達。美味

しいものを食べると森に向かって「ウメー」と叫び、何かある度に森に向かって叫んでいた孫達を、鶯達は新しい仲間が来たと思っただろうか。鶯に聞いてみたい。

山小屋生活の約二十年間はまるでムーミン谷の様だったが、二〇二四年二月、定年間近で孫達に無農薬野菜を食べさせたいと思っている御家族をネットで知り、譲る事にした。その御家族が私達の出発点と同じ考えで、山小屋をとてても気に入って喜んで大切にしてくれるのが感じられたからだ。

本田圭佑の中古車買取りのコマーシャルに「ソコカラ」というのがある。どんなに頑張っても体力の限界があるの、受け継いでくれる人がいれば終わりではなく新しい旅が始まる。「ソコカラ」の旅で心温まる物語が生まれ、銀河鉄道の旅へ出発した様な気がする。



変貌する江戸と東京

川口 ひろ子

日本橋室町三丁目の交差点、総武本線新日本橋駅地上出口あたりにかつて私の先祖が商いをしていた長崎屋の敷地があったという。この界限は、幕末から百十余年後の令和の御代となっても大規模な再開発が続いていて、残念ながら宿屋の遺構は見当たらない。代替えとして駅出口脇に中央区が区民文化財に指定した葛飾北斎の浮世絵をあしらった案内板が立っている。



江戸本石町長崎屋は、禁教と鎖国の徳川時代に日本橋本石町に店を構えていた御用商人。葉種問屋のほか、九州長崎にあるオランダ商館のカピタン（館長）たちが定期的に將軍家に参府する際の定宿となっていた。カピタンは、通詞（通訳）や館医などを伴って2〜3週間長崎屋に滞在。「江戸の出島」と言われたが、江戸中期以降になると長崎出島より警備の緩やかなこの宿に、諸国の大名やその子弟、医学生、蘭学者、他多くの好事家が、蘭船が運んでくる豊かな海外情報や科学、医学の知識を求めて押しかけた。前野良沢、中川淳庵、平賀源内、他多数。幕末にはシーボルトも滞在し多くの日本人と情報交換をして、賑やかな長崎屋サロンが形成されていった。

何故ここが？ その答えはこの土地の特異な土壤にあるとされている。日本橋一带は江戸創成期から物流を基礎とする都会として作られた。中心部に御用商人たちが住み、町奉行と共に町政に当たり、安定した豊かな社会を作っていた。意欲溢れる人材が集中していたこの界限めがけて全国各地から次々と革新的な人々が移住した。

天下泰平、好景気に沸く江戸、商人の力が飛躍的に伸張して江戸文化は上方文化を凌駕して全国的な規模に成長していった。異人宿長崎屋は発展目覚ましいこの場所に角店を持ち二階広間は独自の海外情報センターの役をも担うようになった。

この界限には以前から版元（出版者）も集中していて、時代が下ると、意欲満々の蘭学者、医師、文化人たちが多くの書物を執筆する。代表が杉田玄白だ。一門とともに頻繁に長崎屋に通い、ここで入手したオランダ語の医学書を翻訳して、『解体新書』を完成させた。

好奇心旺盛な絵師葛飾北斎は外の世界に大いなる関心を寄せていて、晩年に至るまで、水準をはるかに超える浮世絵の傑作を出版してきた。歌麿や写楽など多くの絵師を育て、江戸の出版王と称される版元蔦屋重三郎も北斎の才能を高く評価、挿絵集の大仕事を任せていた。『神奈川沖浪裏』は北斎最晩年の傑作だ。浮世絵の世界に革命をもたらしたと云われる異国のブルーの顔料「ベロ藍」はベルリン王室で生まれた人工顔料、北斎は海の青を描

く為に舶来の高価な「ベロ藍」を求めて、度々長崎屋を訪れたという。

更に日本橋東方隅田川にかけて、大名の上屋敷、下屋敷、旗本、御家人屋敷があり、これら藩邸に住む都市のインテリ層達も互いに知的交流で刺激しい文化の発展にあずかって強い力を持っていた。

安政五年（一八五八年）徳川幕府の衰退と共に御用商人長崎屋も閉店した。

活気溢れる日本橋、オフィス街の荒波に飲み込まれて消えてしまったかつての長崎屋の姿を、北斎作の小さな浮世絵の中に見るのはいささか淋しいが、江戸の世のことも令和の御代の大規模な再開発も「歴史の重なりの上に逞しく変貌を続けている大都会・江戸と東京」の姿を如実に表していて興味深い。

参考資料：『それでも江戸は鎖国だったのか』

『江戸を歩く』

片桐一男 吉川弘文館
田中優子 集英社新書

米寿雜感

野上 浩三

米寿など他人事と思っていました。とうとう自分の事になりました。幸い、健康で毎日を生きています。昨年は念願の、ゴルフのエイジ・シュート（自分の年齢以下のスコアでプレーすること）も達成しました。

自分の「会社人生」を振り返りますと、日本経済に大きな影響を与えた事件（例えば一九八五年のプラザ合意など）に結構多く出逢い、面白い体験をしました。その体験を基に、今年中には『失われた三〇年の原因の究明』という本を出版する予定です。

一方、心掛け始めたのが身辺整理です。その一つが書棚の整理です。私の書棚の最大の主はアガサ・クリステイの作品です。英語版と日本語版を併せますと作品だけで200冊を超えます。

クリステイの存在を私が知ったのは、一九七六年一

月初めの朝日新聞に「ミステリーの女王死す」という記事を見つけた時でした。私は一九七四年の一年間、海外事業に必要な知識を習得するためにロンドンに滞在しました。しかし、クリステイの存在を知らず、当時既にロングランを続けていた『マウストラップ』（ねずみとり、一九五二年初演）も観ていませんでした。

口惜しさの余り、直ちに丸善で何冊か英語版を買って読み始めました。アメリカとイギリスへ出張する機会を利用して全作品を買い揃えました。

今や、これらの本の処分が身辺整理に際しての悩みになっています。地元の図書館に引き取って貰おうと努力しています。

米寿になっても飽きないのがプロ野球です。

横浜市の住民です。自然に横浜ベイスターズのファンになっていきます。この球団は、二〇二四年に、何と、日本一になりました。その終盤、接戦になり九回まで勝負がつかない試合が続きました。その時に登板して頑張ったのが「努力の鬼」の森原康平投手です。

彼はマウンドに立ちますと、捕手に敬礼してから投球姿勢に入ります。多い球種はストリートです。

二〇二四年十一月四日の朝日新聞に「最後のアウト、地道に笑顔で」という見出しで、森原投手を紹介した記事が載りました。戸柱捕手と抱き合う写真も載りました。ソフトバンクとの優勝決定戦で、最後の打者の柳田選手を三振に仕留めた時のものです。

以下は朝日新聞に載った森原投手の言葉の一部です。「日本シリーズ進出を決めた第六戦で私が笑顔だったことを、阪神の藤川（球児）新監督が『あれが今の野球』と選手に訓示されたらしいですね。めちゃくちゃ嬉しかったです。

マウンドでの笑顔は、あえて作りに行くこともありません。表情から感情を変えるのも技術のひとつ。笑顔でメンタルを変える。最近は自然に笑顔がでるようになりました。いろいろな本を読んで得たものが生きています。最近読んだ京セラの創業者、稲盛和夫さんの『心。』は今まで読んだ本を一気に越えてきました。『心がすべて

を決める』みたいなことが書いてあり、緊張や重圧を全部楽しむという境地に導いてくれました。

（中略）

最後の二七個目のアウトを取るのには本当に難しい。でも、選手の笑顔、ファンの様子を見て、頑張ることができます。

シーズン最終盤の二連投で右肩を痛めてしまい、肩があがらなくなりました。ドクターからは『一か月間のノースロー』と言われたほど。CSの最中も一度ベンチを外れたことがありましたし、毎朝チェックを受けて試合に臨んでいました。結構しんどかったですけど、（シリーズ二試合に登板できて）全部報われたなという感じですよ。色紙には、「地道が近道」と書きました。何事もこつこつやる。それが一番自分らしい。派手さはなくてもいいと思います」

身辺整理を始めた矢先ですが、森原選手のこの新聞の記事と写真だけは例外扱いにしました。額縁を新しく買い、新聞の切り抜きを収め、寝室の壁に飾ってあります。

人間の「心」

野瀬 隆平

平野啓一郎の『本心』を読んだ。この会の分科会の一つに「何でも読もう会」と称する読書会があるが、そこで取り上げられた課題本であった。

この小説は、日本の近未来、2040年頃に舞台が設定されている。

主人公の青年は、母親が生前に「自由死」を決断したと語っていたが、何故そのような決断に至ったのか、その本心を知りたいと思ひ、今は亡き母親のヴァーチャルな人間を作ってもらう。AI技術により、すでに亡くなっている人とそっくりのヴァーチャルな人間を作ることが可能となっているのだ。勿論、ゴーグルを装着してだが、その姿を見ながら対話することが可能である。

「自由死」とは、自分の判断で死ぬ時機を選べることで、その頃までには日本でも認められるようになっていた。母の死に際にじっくりと話しが聴けなかったので、この

ヴァーチャルな「母」を通してその本心を探り出そうという物語である。

さらに、小説の中には「リアル・アバター」なるものも登場する。これは、依頼人に代わって、カメラ付きのゴーグルを付けて依頼人の希望する場所に移動して、そこで見聞きすることを本人に伝えるというもの。障害者や老人など、自由に外へ出て歩き回れない人たちの要望に応じるものである。主人公は、この仕事を生業としている。

この小説では、最新の技術が社会生活にどのような影響を及ぼすかの他に、「自由死」からむ死生観や貧困、格差、差別、ハラスメントなどの現代社会が抱える諸々の問題が、次々とテーマとして取り上げられる。

最近の人工知能(AI)、特に生成AIの分野での進歩には驚くべきものがある。これをうまく活用できるかどうかで、企業の力にも大きな差が生まれるであろう。単に仕事の効率化ということではなく、いかにして「新たな価値を創造」に結びつけるかである。

さる調査によると、日本はこの点で他国に比べ大きく後れをとっているという。進んでいるのは、インドや中国などのアジア諸国で、日本にはA Iに消極的であつ不安を感じている人が多いという結果がでている。

A Iを人間の競争相手としてではなく、その進化をチャンスと捉えて仕事の拡大に活用することが肝要であろう。「仕事を奪うのはA Iではなく、A Iを使いこなす人である」と云う人もいる。

この小説が世間の注目を浴び映画化されたので早速観に行く。

小説では2040年代としていた時代設定が、その後予想を超えて速くA Iが進化したので、映画では時代背景が2026年に設定し直されているという。

田中裕子が、今は亡き母親と死後に作られたヴァーチャルな「母」の両方を演じていた。「母」の時に、喜怒哀楽の表情を表わすのか、あるいは表わさないのか、微妙なところをうまく演技していたと思う。

『本心』が出版されたあとのインタビューに答えて、平野は次のように云っている。

「アポリアのない小説は文学として書く意味がないと思うんです。どこかにアポリアを内在させて、その矛盾に向かつて言葉が熱を帯びてゆくのが文学じゃないか。」アポリアとは、ギリシャ語で「解決のつかない難問」の意だそう、アリストテレスによれば、解決し難い事柄をいい、一つの問いに二つの相反した合理的な回答があること、だと云う。

このコメントを読んで、成る程と納得したことがある。小説を読み進めていて、一つの問題に明確な解が示されないうちに、また新たな問題が提示されるので、消化不良のまま読み続けなければならない。そこに多少の困難さを感じていたが、理由がここにあったのだと。

2017年にこの読書会が始まった初回に読んだのは、鈴木牧之の『北越雪譜』と漱石の『草枕』であった。以来およそ120冊の作品を読んだ。あまり文学に縁の無かった私が、多少とも文学作品に目を向けるようになったのは、この会のお蔭である。

風と共に去りぬ

馬場 真寿美

私が熟年離婚に踏み切ったのは、結婚生活三十年を迎えた五十三歳の時だった。二人の娘のうち、長女はすでに結婚し子供もいて、次女はバリキャリとなって二十代でマンションを購入し一人暮らしを始めている。

——さて、これからどうしようかな？

と黙っていたら、実家の母から「あなた一人くらい養ってあげるから、私とお父さんの老後のサポートをしてくれないかしら？」との要請がきた。(……うーん、それもありがたい?)と考えた私は、実家に戻ることを即決した。

当時父は八十四歳、母は五つ下の七十九歳。父は自転車での転倒による骨折で、少々歩行が困難な状態だったので、母にとって老夫婦だけの生活は厳しくなっていたのだらう。私は両親から充分過ぎるほどの愛情を注いでもらってきたという自覚があったから、彼らの老後の世

話することに何の抵抗もなかった。実家に戻るにあたって、次女から「介護にこの車を使って」と青いフィットを譲り受け、代わりに都心の新しいマンションでは飼いきれないという理由で、風太という小型犬を托された。実家に戻ってまず驚いたのは、父と母の間にほとんど会話がない事だった。そりゃあ、一日家にいるだけの老夫婦に話のネタすら無いのは当たり前である。風太を連れて散歩に出かければ、かつて子供たちの声で賑やかだったご近所も、高齢化が進み閑散としている。人は高齢になると、他人と交流したり初対面の人と打ち解けることにも骨が折れるものなのだらう。ケアマネさんや理学療法士さんのせつかくの訪問も、両親は鬱陶しそうだった。なので、私の仕事は週三日ほどのパート以外は、二人の通院、買い物、床屋などの車による送迎と、ケアマネさん、訪問診療の先生、訪問看護師さん、ヘルパーさんたちとの対応に費やされた。けれども、介護に携わる方たちは誰もが明るくて温かく熱心な方たちばかりで、私を介して両親も次第に打ち解け、訪問を待ちわびるようになっていった。朝夕二回の風太の散歩を通じて、

途絶えていたご近所付き合いも復活した。私のセーラー服姿を憶えているご近所さんからは、四人も孫のいる私に、ますみちゃん、ますみちゃんと『ちゃん』付けで声がかかる。

介護において言えることは、私の経験上、絶対に仕事を辞めない方がいいということだ。子育てと同様に、介護はひとりりで抱え込むと、途轍もなくしんどく辛いものとなる。でも、たくさんの人に支えられ多くの人と交流を持ちながらの介護は、それなりに充実してとても楽しかった。父と母がその都度、「ありがとう」「ごめんね」と繰り返し声をかけてくれた事も大きかったのかもしれない。それでも、十年を超えるあたりから、(はあ、いつまで続くのかな……)なんて思ったりもしたものである。

——正味十二年間に及ぶ介護生活

父・母ともに、一切の延命措置は望まない、最期は自宅で迎えたいとの意向だった。その意向を汲んで、ようやく四年前に九十三歳の父を、昨年九十一歳の母を自宅で見取ってあげることができた。すると、風太まであとを追うように相次いで虹の橋を渡って行ってしまった。

——風と共に去りぬ

誰もいなくなっちゃった　ひとりぼっち……
な～んてね。いやいや、夢の一人暮らしでしょ!!

変わり身の早い私は、現在、終活とばかりに必要なものはみな潔く処分して、築四十八年の戸建てをピカピカに磨き上げ、憧れの自由気ままな生活を堪能しているところである。介護といっても親元で、わんこの散歩も欠かせなかったことで、この十二年間というものはメチャクチャ健康的な生活を送ってきた。けれども、今や仕事に行く日以外は、何時に寝ようが起きようが自由である。真夜中にスマホで動画を楽しんだり、ゲームをしていても怒られることもない。せっかく磨き上げた台所が汚れるのも嫌なので、食事はすべて買ってきたもので済ませてしまうので洗い物もない。半年以上、不摂生の限りを尽くしてきた私だったが、自由とか、気ままな生活って手に入れてみると、それほど魅力的なものでもないことに気づいてしまった。だから、

——さあて、これから何しようかな？

頭を捻る私である。

コミュニケーション能力と「・・・」

浜口 須美子

「話しかけて聞き返されることはありませんか？ 電話などで名乗っても名前が伝わらないことはありませんか？ それはあなたの声の老化です」テレビではボイストレーニングの方法が紹介されていた。ありのまま、そのままではドンドン老化して、コミュニケーション能力まで低下してしまうらしい。

そういえば心当たりがある。夫に何度も聞き返されて、夫の聴力が落ちたのか、理解力が低下したのかと思っていたけれど私の声の老化のせいだったとは驚いた。

滑舌の老化に重ねて、私は話の中で「・・・」が多い。文章も同じく、言い切るより途中で放りっぱなしで、結論は相手に委ねてお任せしてしまう。自分ではしっかり伝えたいつもりでも、高い確率で内容がうまく伝わっていない事が多い。作文の授業で「会話では「・・・」は使わないで最後まで責任を持って言葉で伝えよう」と

先生に言われたことがある。滑舌を良くして、言葉はきっちり最後まで分かりやすく伝えることで、相手とのコミュニケーションを円滑にすることが今後の課題だ。

九州に住む小学四年生の孫が家族と共に来た。クリスマスにサンタさんからもらったロボットの犬を私に見せたかったが、壊れてはいけなかったので、スマホで動画を撮影しながら説明するというのを思いついたらしい。その動画を見せてくれた。今どきの小学生はロボットの犬をコントローラーで操り、しかもその動きを説明しながら動画を撮影するといった作業を、いとも簡単にすることに驚いた。ユーチューバーと言えるくらい完成度も高く説明能力も半端でない。最初にロボットの名前を紹介し、その仕組みまでも説明し、実際に動かして、最後にもう一度「このロボットわんちゃんの名前は○○でした」と締めくくる高度なテクニクを駆使して、小学四年生のコミュニケーション能力はなかなかのものだ。

「すごいね。あんたはホンマに賢いわ」と感心した。すると、「あんたと言わないでお名前を呼んでちょうだい。だってこの名前はパパとママが付けてくれて私は

気に入っているからお名前を呼んでね」と言われた。なるほど！ ごもつとも！ おっしやる通り！

自分の名前に対する気持ちをしっかりと表現し、相手にもどのようにしてほしいかを伝える能力は、彼女の今後の人生で大いに役立つはずだ。ロボット犬の説明と、名前の呼び方の事で、私は小学四年生から大いに学んだ。

コミュニケーション能力の強化を意識して、これから頑張ろうと思った矢先、インターホンが鳴った。「インターネットの工事の件でご挨拶に伺いました。玄関口までお願いします」よくある営業トークなので「今、来客中ですので案内の手紙やチラシはポストにお願いします」と丁寧に言った。そしたら「え？ 何ですか？ もう一度お願いします」アララ、伝わらなかった。そばに居た夫が「インターホンでそんなに長く話す人はいないと思うよ。ハイかイエエだけのものやで」と言った。なるほど長々話すなら、玄関まで出てきてほしいと思っっているだろう。相手が求める、または予想している答えを話すことがまずは重要であることを学んだ。

さて、自分のコミュニケーション能力について考えて

いたら、ふと気になる事を思い出した。それは、私が夫に話しかけると、夫は必ず欠伸をするのだ。まだ会話も始まっていない「あのね」の段階での欠伸はほとんど毎回、絶対、必ずである。友人に言ったら、「犬は緊張すると欠伸をするって聞いたけどね・・・」

はてさて、私の話、いや話は始まっていないのだから、私との会話、私の存在に緊張しているのか、それとも飽いているのか・・・

「・・・」を使わずに語尾まではっきり表現するとの決意は早速揺らいでいる。

夫に「なんで欠伸をするのん？」って聞いてみた。そしたら「疲れてるんかな・・・」。夫の答えも「・・・」コミュニケーション能力の高い人は相手の気持ちを尊重し、言語と非言語を駆使して円滑な人間関係を築けると聞いた。夫の「・・・」は、もしかしたら非言語を駆使した最高のコミュニケーション能力を発揮しているのかも・・・知らんけど。

漢詩の美女を訪ねて

原田 信

出発地は中国大陸西部の揚子江の難所、三峡です。詩聖杜甫（盛唐）が「近くに王昭君が生まれ育った村が今も在る」と書いた場所です。朝廷から遊牧民の地に追いやられた（前一世紀）運命。多くの詩人の作があります。中でも杜甫の作品は、さりげないこの句の前後に名句が連なり、清の著名な文学批評家は古今の絶唱と称えています。「独り青塚を留めて黄昏に向かう」（そこだけ青草が茂る昭君の墓）「琵琶の語りは胡語をなすが、千載分明、怨恨を曲中に論ず」（あれから千年、昭君を偲ぶ琵琶の語りは胡語だが）。

次に神話の二人の女神が登場します。三峡に迫る険しい山々の一つ巫山で前一〇世紀、周の王が昼寝していると西王母が現れ共寝しました。そして別れ際に「朝は雲に夕べは霧になってこの山にいます」と告げます。伝説「巫山の夢」から「雲霧」は《仁左衛門》ではなく《男

女の仲を》意味するようにもなり、李白（盛唐八世紀）の作、「雲雨巫山枉斷腸」（枉げて王は、女神を見失った）。

西王母から夫が貰った靈薬を盗み飲みした女神はたちまち月に飛ばされ冷たい孤独の世界に閉じ込められました。伝説「嫦娥奔月」李商隱（晚唐九世紀）は女神の心の内を「靈薬を盗みしを悔い碧天青海、夜夜の心」。月に青い空や海はあるの？ 科学的疑問は時に詩の鑑賞を妨げません。二〇二四年六月、中国の無人月探査機「嫦娥六号」が月の裏側の土を採取して帰還しました。西王母の名前は日本でも高級な桃、椿の品種、和菓子、茶碗の銘に利用。

次は北の西安、歴代王朝の都、長安。八世紀の唐では世界最大。玄宗皇帝といえど存知、楊貴妃、四大美女第三。白居易（中唐九世紀）の長恨歌は「春寒くして浴を賜う華清池、温泉の水滑らかにして凝脂を洗う」と結びます。華清池は今も温泉が湧く観光地。ただ、池の中から突き出ている白亜のヌード像はいただけません。今の写真は着物を羽織っています。

今度は西安から南東へ千四百キロ飛び、上海に近い蘇

州です。前五世紀には呉の国があり、隣の越と江南の覇権を争います。李白（盛唐）の「臥薪嘗胆」は双方の王の決意。越は美女西施を送り込み、色香作戦に成功。四大美女第四。北宋の蘇軾（十一世紀）は近くにある西湖に遊び、その景色を西施に見立てて「水光晴、山色雨、淡粧濃抹相宜し」（薄化粧も厚化粧も共によい）。

越の本拠地、酒で有名な紹興から西施とともにもう一人、南宋の大詩人陸游（十二世紀）の妻を挙げます。詩人は愛妻唐婉との仲を母親に引き裂かれました。十年後、二人は偶然出会います。元妻は夫連れ、詩人の席に一盆の酒肴が届きました。「夢断たれ残り香消えて沈園四十年」、時に詩人は七十五歳、思慕は八十すぎまでも。

北へ向かいます。大陸の中央東部、安徽省にある古戦場。前三世紀、楚と漢の決戦垓下の戦い。楚の武將項羽は「四面楚歌」（史記）の中、自己の命運を悟り、「虞や虞や汝を如何せん」と歌って果てました。京劇「霸王別姫」虞美人です。

北隣りの山東省済南は中国の代表的な女流詞人、南宋の李清照（十二世紀）の出身地。詞は詩より自由な形式

で、宋代に流行。学者との結婚生活は幸福でしたが晩年は不遇。「暖かく、またたちまち寒くなるころはもつとも気が休まらない。二杯や三杯の淡酒では、とてもこの夕暮れを過ごせない」。自分の気持ちを春は名のみ微妙なうつつろいに重ねています。

最後の北京では、「貴妃醉酒」などに出演、あでやかさで観客を魅了したメイ・ランファン、梅蘭芳です。でも女性ではないんです。京劇の伝説的な女形おやま。多くの史劇を創作、海外公演にも成功。一九三七年、北京を占領した日本軍から出演を強要された女形が舞台で振り向くと、その顔はなんとヒゲ面でした。二〇二四年は生誕一三〇周年にあたり、北京の劇団も来日し、十月の東京公演の演目は梅蘭芳が一九二二年に創作初演した「霸王別姫」の改編劇でした。

中国では歴史や神話の美女を主人公にした、テレビ時代劇、それもシリーズ製作が盛んです。美しさと凄まじいほどの剣舞が売り。物語はみんなが小さい時からなじんでいる。大作の製作費は百数十億円を超え、年収十億円以上の主演女優も出ています。

子どものつく名前の子は頭がいい

一 杉 秀 樹

表題は一九九五年に刊行された本のタイトルである。

著者は社会学者の金原克範。当時は東北大学大学院に在籍し、博士論文としてまとめたものが出版された。

本のなかでは、仙台市の私立女子高校の入学難度と子のつく名前の合格者数との間に正の相関関係があることが指摘されている（調査は一九九三年実施）。

この本を読んだ色川大吉（当時東京経済大学教授）は、改めて大学生を対象にデータを集めて検証した。一流校として東大、京大、三流校として名前は伏せるが二校を取り上げ、一九九七年から三年間の女子学生の名簿から集計を行った。その結果は金原氏の言うとおりの傾向を示していた。子のつく名前の子の比率の一番高いのが東大文系大学院生（60%）、つぎは京大の文系学部一回生（51%）、三流校のひとつは約40%、もうひとつは32%であった。

ある都市での新生女兒の名前をもとに子のつく名前の割合を時系列でみると、一九五四年までは80%以上であったものが、一九六四年には50%に急減しており、その後一九七六年まで40%程度で推移している。冒頭の調査の頃では受験生の40%程度が子のつく名前であったことになる。

子のつく名前と進学校の関係については、著者の調査によれば、一九七六年頃まで相関関係はない。関係が明らかになるのは一九八四年頃の進学からである。

では一九五四年から一九六四年までの子のつく名前の急激な減少の背景にあったものは何か。また進学先との相関関係はいかにして生まれたのか。

著者はメディアの果たす役割に注目している。一九五三年にNHKが民間向けTV放送を開始し、十年後にはTV普及率は90%に達し、これと相関して新生女兒の子のつく名前が減少している。これはTVタレントに子供つかない名前が増えたことに影響されていると考えられる。母親を対象としたあるアンケートでも、長時間TVを視聴している母親ほど娘に子のつかない名前をつける

場合が多いとの結果がある。この時代に親がどうメディアアと向きあい、子供に何を教育してきたか（してこなかったか）、が子供の将来に影響を与えているというのが著者の推論である。

このような統計的な推論が著者の主眼ではない。

彼はアルバイトとして塾で中高生を対象に延べ四百人ほどを教えた経験があり、そこで、中高生とのコミュニケーションがほぼ不可能に近い、という恐るべき状況に直面し、その背景にある彼らの思考、行動様式を理解する目的でさまざまな角度から調査を行って論文をまとめている。

調査の一環として、著者は多くの塾の生徒（女の子）と面談を行っており、問題を抱える彼女たちの多くが、情報をもとに自分の夢を描くがそれを実現する方法を理解していないこと、情報を受け取るだけで発信能力に欠けること、人の話を聞く能力に欠けること、などを指摘している。そしてこのような女生徒を「シンデレラ型」と呼ぶ。一方で、感情よりも理性で行動する傾向にある女の子たちを「ヤマトナデシコ型」と定義づける。「ヤ

マトナデシコ型」は現実に立脚して情報に関心を持ち、積極的に生かしていくリアリストである。一方「シンデレラ型」は想像の世界で夢をふくらませ、情報は入力するだけでただ消費して、楽しみを追いかけるロマンチストである。

先に指摘された、母親のTVとの向き合い方、それから想像される家庭での環境を考えれば、子のつく名前に「ヤマトナデシコ型」が多く、そうでない名前に「シンデレラ型」が多いことは容易に想像できる。

TVが普及しつつあった一九五七年に大宅壮一がTVメディアに翻弄される様子を「一億総白痴化」と呼んで流行語となった。今にして思えばこの指摘は正しい。

この本が出版されたのは一九九五年、凡そ三十年前である。子のつく名前が絶滅危惧種以下となった現在、同様の調査は不可能であるが（いま流行りの判じ物のような名前を使うことは可能かもしれない）、「シンデレラ型」の子供は「シンデレラ型」になりやすいであろうし、主要メディアがスマホ、SNSとなった現在、「シンデレラ型」が増大していることは疑いが無い。

会津線ノスタルジア

（原点に思いを馳せて）

藤原 道夫

会津線は今ない、只見線となっている。ここで敢えて用いるのは、利用していた時の呼称を使いたいから。この沿線には、自分が成長してゆく上で原点となっているエピソードが散りばめられている。年を経る程に子供の時の事が断片的ながら鮮明に浮かび、いとしささえ覚える。懐かしさがつゆのり、昨年十一月只見線に乗った。以下に会津若松を出発してから順番に想い出を綴る。

①七日町 幼稚園児だった夏に、浦和から祖母に下野尻の実家に連れて行かれた。ある日、気が付くとリヤカーに乗せられていた。青空に白い雲が目に入ってきた。ずっと後で聞いたことは、高熱を出したため磐越西線上野尻駅に運ばれ、七日町の医院まで行ったとか。記憶にあるのは、近くの踏切の信号音がカンカンと響いてきたこと。医院に数日入院したようだ。次に気が付いたのは

広い病室のベッドに寝ていたこと。戦争未亡人になった大叔母が付き添ってくれていた。母が話すには、七日町の医院ではらちがあかず、ダメを覚悟で大宮日赤病院に移したとか。二等車を使ったことを強調していた。二か月ほど入院して何とか一命をとりとめた。病名は消化不良のことだが、確かなことは分からない。浦和の家に戻ったのは通算して三か月後だった。

②西若松 高校の最寄りの駅。ここを利用して通学していた友人がいた。冬はさぞかし大変だったろう。

③会津本郷 本郷焼の窯がある街。会津藩の奨励により生活什器として陶器が作られていた。これを民芸運動家の柳宗悦が見出して高く評価し、世に知られるようになった。会津地方なら大抵の家にある「にしん鉢」はここで焼かれたもの。実家にも目立つ所に置いてあった。

④会津高田 ここに母方の実家があった。終戦の一年間のみ住んだ。その間にもさまざまな事があった。会津一之宮伊佐須美神社の重要な行事となっている「御田植祭」に参加し、少し離れた所まで歩き、狭い田圃に入って渡された苗を植えた。ちゃんと根付いただろうか。

学級全体で落穂拾いに出かけたことがあった。友だち三人で話しながら集団からどんどん離れてしまい、夕方学校に戻らずに家に帰ってしまった。翌日登校するや「とらさん」の綽名がある女の先生に噛みつかれるように叱られた。十二月上旬のこと、授業中に小使いさんが入ってきて「お祖母さんが亡くなった」とそっと耳打ちしてくれた。涙を流しながら雪が薄っすらと積もっている校庭を横切つて家に帰り、一人で下野尻に向かった。

会津高田を過ぎると列車は北に向かって山沿いを走り、会津盆地を一望できる。ピラミッド型の磐梯山も小さいながらはつきり望めた。近景に所々でオレンジ色の実をたわわに付けた柿の木が見られる。高校の校歌が自然と浮かんでくる。

飯盛山の桜花 鶴が城址の秋の草 会津平野に行く雲
は 移り変われど若人の理想は永遠わがこゝろに変わらじな

(柳澤 健作詞、古関裕而作曲)

列車はまた西に向かって山間に入り、⑤⑩の各駅に停車した後目的地に着いた。

⑪会津柳津 この地名がすっかり記憶に刻まれている

のは、十三詣で訪ねたから。すでに『悠遊』二十七号に発表したのだが、十一歳の春、上野尻から柳津まで汽車に乗り、田蔵寺の虚空菩薩像をお参りした。帰りは徒歩だった。下野尻の家まで三里ほど離れている。四時間くらいかけて皆と一緒に歩き切り、無事に家に帰った時の感慨は忘れ難い。人並みに歩けることが証明された！

今回田蔵寺辺りを散策しながら改めて思う。会津の田舎の風土が自分の身体、それに感性を育んでくれたのだ。

もう一つ、職業上の原点に触れておきたい。それは大学の教養学部時代のこと。よき師、よきクラスメイトに恵まれた。一学年の担任は数学界のホープS助教授だった。数学の授業が素晴らしい、解析の問題を独自のやり方でスマートに解いてゆく。苦手の数学が好きになった。クラスメイトには登山を教えて貰い、文学、音楽などについてのちょっとした会話に刺激を受けた。二年になって進路希望調査があった際、漠然としていた医学部志望を固めた。翌年三月には入部試験が待っている。様々な体験と共に、希望に挑戦した青春の一時期だった。

ノルマンデーの海岸から

松浦 俊博

昨年は連合国軍によるノルマンデー上陸作戦が決行されて八十周年の節目に当たる年だった。作戦に参加した生存者はもう百歳前後になっていることから、式典は例年より大々的に行われた。

イギリス首相は午前中のイギリス主催の記念式典には出席したが、午後のオマハビーチでの国際式典には外相を代理に立てて早退し、イギリスに引き上げた。七月に行われる総選挙に向けた民放のテレビインタビュー収録のためだったそうだ。国内外から非難が集中したのは言うまでもない。国際式典には上陸作戦を担った国々の大統領や首相たちが出席し、さらにはウクライナ大統領も参加した。国王チャールズを置き去りにして早退した一九八〇年生まれのイギリス首相にとっては、第二次世界大戦は過去のものだったのだろうか。ヨーロッパの首相なら、ドイツ元大統領ヴァイツェッカーの「過去に目

を閉ざす者は結局のところ現在にも盲目となる」という有名な言葉を知っているはずだが。

さて、この上陸地は一〇世紀初めにノルマン人が建国したノルマンデー公国があったところである。ノルマン人ルヴァイキングは、プロ級の造船術を持ち、川を遡るのにも長けた漕ぎ手たちの集団で、八世紀から十一世紀にかけてヨーロッパの海や川を自由に往来した。セーヌ川下流に封土を与えられたロロは公国を建てて西フランク国王の家来になった。その一五〇年後に現れたギョーム二世はイングランドに侵入してノルマン朝を打ち立て、自らイングランド国王ウィリアム一世となった。

南イタリアとシチリア島にもノルマン人の建国した国があった。ここは第二次世界大戦では、カサブランカ会談の決定により、連合国軍が北アフリカから上陸作戦を行なった地域である。ノルマンデー上陸の一年前に、シチリア島上陸、イタリア半島北上が行なわれたわけだが、この作戦もノルマン人が建国した地域から行なわれたのは偶然とはいえ不思議な気がする。

南イタリアとシチリア島を支配したノルマン朝の両シチリア王国は、もともとはノルマンディー公国出身の騎士たちが傭兵として南イタリアに移住し、報酬として与えられた封土を発展させてきた国である。ロベール・ギスカールは南イタリアのビザンツ帝国やアラブの領土を占領し、弟のルτζジェーロ一世はシチリア島をイスラーム勢力から奪い、さらに息子のルτζジェーロ二世は南イタリアとシチリア島の両方を制圧し一一三〇年に、ローマ教皇から王位を認められた。

そのルτζジェーロ二世の娘のコンスタンツァがシユタウフェン朝の神聖ローマ皇帝ハインリヒ六世と結婚したことにより、王位は夫のハインリヒ六世と結婚したことにより、王位は夫のハインリヒ六世と結婚したことにより、王位は夫のハインリヒ六世と結婚したことにより、王位は夫のハインリヒ六世と結婚したことが、無理からぬことだったと思う。

混在するシチリア島のパレルモで育ったこの皇帝は、文化の遅れたドイツより両シチリア王国に住むことを好んだ。このフェデリコ一世の時、両シチリア王国は最盛期を迎えた。ローマ教皇の提唱で始まった十字軍はイスラーム教徒と戦い血を流して勝つことが名誉とされたが、彼はイスラーム教徒とは戦わず外交で勝負し、イェルサレムを期限付きではあるが奪還した。また、王国を法で統治する国家を目指したり、イスラーム教徒を官僚に用いたりして家来たちを驚かせた。中世の国家としては受け入れられないことがあまりにも多かつたであろう。

神聖ローマ帝国というヨーロッパ唯一の帝国を統治するフリードリヒ二世が大半を過ごしたシチリア島から、留守にしていた神聖ローマ帝国の北辺まで南北に二千km離れている。帝国では彼の死後まもなく大空位時代を招いたが、無理からぬことだったと思う。

多文化共生の中で生きたフェデリコ一世が、各地で対立している今日の世界を見たら、どんな解決策を考えるだろうか。

北海道周遊

松田 昌康

昨年九月中旬、三夫婦恒例の旅行で北海道を周遊した。初日、新千歳空港からレンタカーで旭川に向かった。

旭川まで150キロ、旭川で宿泊。夕食はジンギスカン料理。有名店の大黒屋は予約できず、ホテル紹介の店に行った。メニューの中にエゾ鹿肉が有り、珍しいのでラム肉と併せて注文、エゾ鹿肉は色が濃くさっぱり味、ラム肉は脂がのり美味しかった。

二日目は、旭川から名寄、ウブシを経て天塩川を下り、日本海側の海岸線に沿ったオロロンライン（R106）を北上して310キロ、稚内で宿泊。海岸線沿いの道の途中には数十基の発電用風車が並んでいて圧巻だった。

海は白波が立っており、車を降りると風が強かった。水平線の奥には形の良い利尻富士がくつきりと見えた。その見晴らしの良い一本道を進んでいる時、海側の草の茂みから野良犬が出てきて立ち止まったので、車を止め

た。よく見ると尻尾が長く太いキタキツネだった。写真を撮った。我々の方をじっと見ていたがおもむろに道を横切り、草むらの中に消えた。まさに旅行の醍醐味のひとつ。稚内市内の空地で数頭のエゾ鹿の群れが草を食っているのを見かけた。町なかに野生の鹿が出てくるとは、これも驚きだった。港に近い海の見えるホテルに泊まった。

三日目は、ノシャップ岬から宗谷岬に行き、東海岸を下下して230キロ、紋別で泊まった。ノシャップ岬からは、利尻島がよく見えたが、風が強く海には白波が立っていた。船は係留されていて港からの出入りは無く、かもめは風に流されていた。観光客は近場の人のようだった。丘の上の稚内開基百年記念塔まで行き、展望室に登った。そこから遠くのサハリンの島影も見えた。宗谷岬では、間宮林蔵の銅像と日本最北端の地を示す記念塔があり、その前で多くの外国人観光客が記念写真を撮っていた。我々も記念撮影をした。海岸線に沿って紋別まで。途中でトイレ休憩を兼ねて道の駅に立ち寄った。ホテルは紋別漁港の近くで、夕食は海鮮丼が美味いという店にした。暖簾代わりか、入口の軒から干し鮭を何尾か

吊るしていた。

四日目は、車窓からサロマ湖を見て、常呂町カーリングホール（市営）に立ち寄り、途中でウトロカムイワツカの滝に寄り道して、網走まで行程235キロ。常呂町カーリングホールでは、たまたま全日本大学対抗選手権大会を開催、本物の試合を観るのは初めて。レーンが想像以上に長かった。二階の観覧席のフロアに、平昌オリンピックでメダル獲得した女子チームの写真と使用した用具が飾ってあった。近くの日本のサンゴ草群生地に寄った。遠く海まで広がる湿原を朱色のサンゴ草が埋め尽くし、多くの観光客が湿原に突き出た木道の端まで列を作っていた。手前の広場でイベントが催されていて、舞台上でアイヌの踊りが披露され、アイヌの民族衣装を着た人たちも多かった。海岸線に沿って行くと、小清水原生花園があった。道路に沿って走る釧網本線に原生花園駅がある。小高い丘の展望台に上り、波立つ海と赤い実をつけた浜茄子の群生を観た。斜里町を過ぎ、知床半島を羅臼に向かう途中にカムイワツカの滝がある。立派な土産物店には、中国人、韓国人が多かった。少し階段を

登ったところに展望場所が有り、崖を伝って流れ落ちる滝を背景に皆で写真撮影した。悪名高い知床遊覧船の港、ゴジラ岩を見て、山の上のホテル知床で宿泊。

五日目は、知床峠に登り、羅臼で昼食を摂り、標津を経て、摩周湖に行き、阿寒湖畔のホテルまで、270キロ。知床峠、羅臼の港からは目の前に国後島が見える。

羅臼の道の駅は展示場と併設で、壁に3m以上の羅臼昆布の実物を展示。奥様方は、値段を見比べつつ出汁昆布を買っていた。標津、弟子屈町から摩周湖へ。その日は一転して快晴、摩周湖は多くの外国人観光客で賑わっていた。木々の緑に囲まれた湖面はコバルトブルー、まさに絵葉書。屈斜路湖を眺めつつ、阿寒湖畔のホテルへ。

六日目は、足寄町の道の駅「あしよる銀河ホール21」に寄る。ここ出身の松山千春の記念ブースが有った。高速道路に乗り、きれいな曇雲が空を縦断する町営池田ワイン城に寄り道してワインを試飲した。高速に戻って札幌に行き宿泊。夕食は、狸小路のラーメンの美味しい店。七日目は、新千歳空港まで50キロ。レンタカーを返し、空港で孫たちに土産を買い、帰りの飛行機に乗った。

トラブル解消旅行

松谷 隆

一九九九年十月に十年間の駐在を終え帰国後も、毎年一週間程度のアメリカ旅行を楽しんできた。しかし、二〇一九年十一月二十八日の昼前にロサンゼルス空港から出発したアメリカン航空で帰国以来、五年間もアメリカの地を踏まなかったというより、コロナのせいでアメリカ行きを諦めていたというべきだ。

昨年九月下旬、日本航空からの「格安航空券発売」のメールを見て、駐在時から維持してきた大手C行口座の解約には直接交渉しかないと思い、アメリカ旅行を決めた。十二月三日出発、九日帰国の便を予約。エコノミーの代金で一ランク上のクラスを確保できた。

トラブルの発端は九年前にゴールドクレジットカードが一ランク格下げられた時に、オンラインシステムへの

アクセスがクレジットカードに限定されたことだ。もちろん、預金口座の入出金にはなんら不自由はなかった。だがこのとき、口座番号をしつかりと確認しておかなかったことがあととの問題を引き起こした。

四年前、外国に住む外国人のカードは無効との一方的な通知がきた。だが、不思議なことに口座は維持できた。手紙やチャットでシステムにアクセス可能にする試みもすべて実らず、預金残はATMで確認するだけ。アクセスさえできれば、口座解約は簡単なのにと悔やんでいた。

アメリカの金融機関では「口座維持料」を課す銀行が多い。C行も三年前に月間預金額三千ドル以下には毎月十一ドルの維持費を二五ドルに値上げ、さらに昨年三月から維持費の他、閲覧料や照会料までとるようになった。

一昨年十月には預金残が減少したけれど、直接送金が可能とわかり、四十数年來の付き合いがあるカリフォルニア州在T氏に代理入金を依頼したところ、快諾していただけた。しかし、日本から同氏への送金がマネーロ

ンダリングでないとの証明をつけて、やっと実現した。また昨年五月には立て替え入金までしていただいた。

なぜ、これだけの費用をかけても口座を維持したのかと疑問視する読者が多いと思う。

その答えは、亡妻の第一の元気の源はラスベガスのカジノで毎年特典の多いダイヤモンドカードを更新することだったからである。毎年、長女が「お母さんが一番元気なのはアメリカから帰ってきたときだ」と言い続けてきたほどだ。

特典の最大なのはグループのほとんどのホテルで繁盛期以外なら最大五泊が無料になることで、レストランの優先予約、優先入場もある。またカード会員限定のラウンジまである。

ATMカードでは一日五〇〇ドルしかおろせないのので、手持ち資金を二人のカードで補充していくためだ。

さて、ロサンゼルス到着の翌朝十時過ぎに、C銀行の有人支店に行き、窓口でATMカードを出し「口座を閉鎖する」と伝えた。笑顔で「身分証明書を」。パスポー

トを渡すと、「しばらくお待ちを」。T氏とその後の予定を話し始めたなら、呼ばれた。

「お待たせしました。口座を閉鎖しました。預金残と明細書です」と、紙幣を確認しながら、渡してくれた。

T氏の立替金にプラスがあったのにはびっくり。だが、高くついたけれど、借金が消えることがうれしかった。

同夜はT氏宅に招待され、お嬢さん一家と一緒に大変な持てなしを受け、うれしかった。奥様とは約四十年ぶりの再会を喜び合った。

翌朝、同氏の運転で、ラスベガスまで約五時間のドライブ。到着後はダウンタウンで三泊、亡妻と楽しんだカジノ、レストラン、ショッピングモールなど懐かしい風景を楽しめたのは、T氏のご厚意のお陰で、大変ありがたかった。来日時にはそのお返しをしなければならぬ。それよりも、今年もロス行きを実現したいのが本音だ。

閉ざされた言語空間 日本

森田 晃司

二〇二四年は、元ウクライナ大使の馬淵睦夫氏や近現代史研究家の林千勝氏が予測していた通り、激動の年となりました。

世界を支配してきた欧米中心の国際金融資本に対して、自国の文化・歴史を守り抜こうという戦いが成果を上げてきました。ロシアを中心としてインド、中国など、五か国で始まったBRICSは、今や九か国に増え、さらに加盟申請が後を絶たない状況のようです。既に欧米と拮抗あるいは凌駕する力を蓄えてきています。

一方で欧米内部でも激しい変動が起こっています。移民の大量流入やインフレによる生活苦などに我慢できなくなった民衆が既存の政党・政府に退陣を迫り、ナシヨナリズムを奉じる新しい政党が急激に支持を伸ばしており、仏、英、独、伊など主要国でその動きは顕著です。米国でも、金融資本家を中心としたエスタブリッシュ

メントの手から、米国を米国民の手に取り戻すと訴えてきたトランプ氏が大統領に再選されました。

世界は大きく変化しようとしています。国民の多くはこの歴史の変動に目が向きません。日本だけが世界の変化に取り残される危険にも気が付きません。日本人は「閉ざされた言語空間」にいるからです。

一九四五年九月のGHQの日本進駐の直後から、海外との交信を禁じられ、日本人は列島内に閉じ込められることになりました。

次いで、延べ約一万人の日本人有識者の協力を得て、徹底した言論統制を開始します。さらには東京大学の南原繁氏ほかの学者の協力を得て、戦前・戦中の良書約八千書が闇に葬り去られました。GHQの検閲を受け、お眼鏡にかなった図書やニュースでなければ日本人の目に届かなくなってしまうのです。

平成元年に、江藤淳は『閉ざされた言語空間 占領軍の検閲と戦後日本』を上梓しています。米国ワシントン

に滞在し、図書館や資料館を連日訪れて、戦中、戦後の外交資料などをつぶさに調べ上げて発表しました。戦後の日本は、GHQの、米政府の、あるいは、その元締めたる国際金融資本の思惑に沿わない言論は一切禁止されたのです。

この「言論統制」の影響はさまざま、日本人の思考は、戦前と戦後では全く相違する思想の断絶が起こり、日本人の精神が意図的に改変されてしまったのです。

一九五二年のサンフランシスコ平和条約の発効を前に、さすがにこの検閲体制は除かれましたが、GHQの圧力は残り、未だに「閉ざされた言語空間」から抜け出せず、います。

日本の言論空間は、かくして欧米の金融資本に支配されてきました。国際報道も欧米、特に米国の大手マスコミの影響を強く受け、ロシア・ウクライナの戦闘など、極めて偏向した報道に終始しています。

コロナ用ワクチンは有害無益というのが、世界の通説になりつつありますが、日本だけは、未だにワクチンを打ち続けています。

しかも、mRNAタイプのワクチンは無益有害と開発元の米国の元CDC長官（疾病予防管理センター）が議会証言をしているにもかかわらずに、日本の厚生省は、同タイプで、しかも自己増殖されるという、レプリコンワクチンを世界に先駆けて認可して、昨年十月から高齢者向けに接種を始めています。

日本の言論空間では、碌な治験も行われずに厚生省が認可したレプリコンワクチンに潜む重大な危険性について議論されることはなく、一般国民は「閉ざされた言語空間」に置かれたままです。

主体性のない外交、沈滞続きの経済政策など、あらゆるところに、外圧による惨状が及んでいます。真の独立を戦い取るには「閉ざされた言語空間」こそ打破されるべきものです。

トランプ氏の再登場は米国の言論空間を根本から変えつつあり、日本にも好影響がありそうです。他力本願ながらも期待するところです。

高齢者の奥穂高岳登山

八木 信男

昨年八月に奥穂高岳登山に出かけた。

六八歳の私と六五歳の友人の二人づれ。遭難すれば間違いない新聞のバッシングに会うだろう。見出しは、また高齢者が北アルプス遭難。

遭難してニュースになるのはいやだから、事前の準備としては以下の三つを行った。

- ・ 八経ヶ岳や愛宕山に登山し、長時間の登山に慣れる。
 - ・ テント泊の装備を担いだ行動を想定して金剛山から葛城山の縦走をテント泊で行う。
 - ・ 穂高岳山荘から頂上への岩稜通過に備え、宝塚にある蓬莱峡で岩稜地帯の階段を使い登降の練習。
- もちろんそれ以外でも、エスカレーターには乗らず、毎日1万歩は歩くようにした。ただ、体重は思うように減らずこれは最大の課題だった。

最近、高齢者の山での遭難記事を見ると、体力不足で

歩けない、転倒して骨折するなどの事例がある。これは無理な行動から来る疲労が原因だと思い、テントを背負うての行動は原則として1日4時間を限度とし、30分歩いては休憩をとることにした。そして無理をして頂上を踏むという意思は持たないことにした。

食料も軽量化をはかり、寝袋も薄いものを持参し、寒さはセーターと雨具でしのぐことにした。もちろん酒などは持参せず小屋で買うことにした。

八月一日 晴れ

大阪から近鉄で名古屋へ行き、名古屋から乗った夜行バスで上高地に朝の5時半に到着。今日のキャンプ地である横尾へ向かう途中では、熊よけのクマベルが数か所に立っていて、熊情報も貼ってあった。横尾についてテントを張ったが登山者が多く熊は出ないだろうと一安心。

八月二日 晴れ

6時出発。今日のキャンプ地の涸沢へ向かってゆっくりと進む。屏風岩を眺め、4時間歩き涸沢へ到着。テントの数はかなり少ないのでよい場所を選んで設営。快晴の下、テントの中はサウナのように蒸し暑いので困った。

仕方ないのでテントの外に出て前穂から奥穂にかけての稜線をスケッチする。12時、小屋の売店でお高いカップヌードルとカップワインを求める。

夜は標高2300mだけありさすがに冷える。薄い寝袋だからセーターを着ても少し寒い。夜中にテントから顔を出し空を見ると満天の星だった。

八月三日 晴れ

今日も快晴。徐々に赤く染まるモルゲンルート（朝焼け）の山並みを楽しむ。5時半出発。涸沢小屋を過ぎると日差しが強いので熱中症に気をつけて進む。斜面のトラバースからはヘルメットを着用することにした。

ザイテングラードという登山道の取りつきからは急な登りが始まる。ジグザグと悪いガレ場を登り、ここでも30分に一度の休憩。途中、富士山が遠くに小さな台形として見えた。子供連れの親子とは追いつけられたり、追いつけられなかったりしながら行く。

穂高岳山荘に到着。涸沢側につくられた岩の扉からは遠くの山がよく見える。30分ほど休憩し、頂上へ向かう。頂上への岩稜地帯は、いきなり梯子登りの連続だ。今日

はまだ人が少ないのか渋滞は起きていない。

梯子場をすぎるとジグザグの登山道となり、やがて奥穂高岳の頂上が見えてきた。

10時、混雑している頂上に到着。頂上を示す看板での写真撮影は順番待ちだ。知人の写真だけを撮り下山を開始。雲が湧き始めている。いまのうちと槍が岳をバックに写真を撮り、穂高岳山荘へ一気に下る。梯子場の下りもなんなくクリアし、小屋へ戻りラーメンの昼食。

ザイテングラードを下り、14時、無事涸沢に戻ってきた。

八月四日 晴れのち曇り

6時に涸沢を出発。横尾で上高地から松本までのバスをスマホで予約する。今日もゆつくりと歩き13時半に上高地に到着。河童橋周辺はラッシュ状態。インバウンドばかりだ。観光もせずバスターミナルへ急ぐ。新島々駅まではバス、そこからは松本電鉄で松本へ向かった。

とりあえずお風呂へと浅間温泉に向かう。松本駅前まで打ち上げを行い、夜行バスで大阪へ向かった。

写真は以下にあります。 <https://img.gg/wiNp9L>

出自は百姓

吉田 眞人

他人の出自、あるいはルーツに関心のある人はいないのである。従って、以下は自らの覚え書きとして記すものである。

出自は百姓だ。ただし、遅くとも三代前の曾祖父の代から、農作業に従事したことはない。場所は群馬県山田郡川内村、昭和二十九年桐生市に合併され現在に至る。

叔父が「吉田家のルーツ」と名付けた小冊子をまとめている。本家のすぐ近くにある墓地（代々の墓）にある石碑や墓石を調べたもので、初代吉田五郎兵衛は享保年間（将軍吉宗の頃）の人である。百姓であるにもかかわらず以降累代吉田姓を名乗っているのは、多分、何らかの役職（庄屋や名主）による名字帯刀許可を得たものと推定している。名前に「衛」の字がつくことも、これ

を裏書きしている。五郎兵衛以前の墓碑はないので、それまでは普通の百姓だったのである。

曾祖父の代に明治の世になり、商品経済がこの田舎の村にも押し寄せてきた。

多少の経済的ゆとりがある者が妾を持つ事は、この時代には珍しくなく、曾祖父も例外ではなかった。彼が特異だったのは、彼女を単に遊ばせておくのではなく、小間物屋を開かせた事である。さらに掛け売り（後払い〓付け）制度を導入し、売り上げを伸ばした。天候不順等で農産物の収穫が減少した時に、付け代金を払えない農民が出る。その時に、彼らの土地や山林を受領、このようにして地主としての規模を拡大した。一種の「資本の原始的蓄積」である。また、小間物屋に従事することになった彼女も、読み書きはもちろん加減計算程度の簡単な算数が出来た、という事で時代の勢いが窺える。

曾祖父は地主だけでは飽き足らなく、その後織物工場（機屋〓はたやと呼んだ）も始めた。絹織物産地桐生の一角を担うことになった訳である。

戦後の農地解放令により、全ての小作農地を失ったが、山林は残った。この山林をベースに織物工場の再建を図ったのが伯父である。

昭和三十年代の初め、伯父が桐生市選出の県会議員に立候補した。彼は旧制中学を卒業した後、長男であったので、家業を継いだ。業績も順調だったのだろう、次は名譽と考えた。保守合同で成立したばかりの自民党から出馬すると金がかかる。そこで同時期に左右合併したばかりの社会党から出馬することにした。ただし元来保守的思考の塊なので、何を主張して良いかわからない。次男坊である私の父がいわゆる進歩派であったので、スピーチ原稿等全てを父が書き、伯父がその通り読み、話すという分担が続いた。無事当選し二期務めたが、さすがに途中からは進歩派風演説も台本無しに行うようになり、社会党県議団長も務めた。

父は師範学校卒業後地元と東京で代用教員、その後大に進み、この間に大正デモクラシーの影響を受けた。卒業後出版社に勤務、労農派の大政翼賛会への吸収もあり、産業報国会にも奉職。太平洋戦争が激しくなると故

郷に疎開し、そのまま居着いて県立高校の教師になった。私の兄は東京生れだが、私は田舎生まれだ。

子供の頃の思い出

昭和三十二年、十二才。

伯父が現役の県議員中に祖母（父、伯父の母）が亡くなり、盛大な葬儀が行われた。知事の弔辞等は覚えていないが、田舎の屋敷前の川沿いに、孫の数だけ高い柱を立て、長い幟を括り付け、はためかせた風景は、はっきり覚えてる。

昭和三十年、十才。

山林組合がバスを仕立てて伊東へ行く旅に、母と共に招待された。初めての長距離バス旅行である。途中の川崎では日本鋼管（現JFE）の工場横を通った。田舎では全く見られない途轍もなく大きな工場で、蒸気や煙を盛んに排出した生産棟が何処までも続く感じがし、圧倒された。後に製造業、中でもいわゆる重厚長大産業に就職したのは、このときの印象が強烈であった事の結果であろうか。

趣味としての航空機搭乗

荒岡 衛

飛行機が好きで大学では航空学科へ進んだ。就職先として航空機を製作する三菱重工業を選んだ。ところが配属先は火力発電用ボイラの設計だった。それで航空機の方は趣味で続けることにした。もちろん46年に及んだ会社生活を振り返ってみると、新設計に数多く携われたし、設計システムの開発や保守の仕事を70歳まで現役として続けられたので、エンジニアとして満足している。趣味としての航空機であるが、写真を撮ることは学生時代から始めていて、入間基地でブルーインパルスや羽田空港で旅客機を狙っていた。しかし写真を撮るだけではつまらない。やはり乗って空を飛びたい。もちろん視力も悪くパイロットにはなれないから乗客として旅客機に乗るしかない。初搭乗は1972年4月大阪―高松線のYS11だった。空からの眺め、離陸時の加速度感等々、空を飛ぶことに快感を覚えた。

学生時代に読んだ斎藤茂太著の「飛行機とともに」に搭乗時にいろいろ記録を取る話があり、それを真似て手帳に記録をつけ始めた。数を重ねるうちに記録する項目が増え、A4の記録フォームを作り書き込むようになった。初めは項目名を手書きしたフォームをコピーして使った。次に少し見映えをよくするために項目をレタリングシートにした。現在はエクセルシートにして印刷して使用、帰宅後に結果を打ち込んでいる。当初千回ぐらいは搭乗したいと考え、この記録をもとに「千回飛行」というタイトルで搭乗記を書いていたこともあった。しかし余裕がないので記録のみ続けている。

遊覧飛行というものもあるが、一般人にとって飛行機は移動手段であり、行った先で仕事、観光、義務（例えば法事）など何かをする。私の場合、当然移動手段としても使っているけれども、搭乗そのものを目的とする場合が多々ある。最初の搭乗は飛行を体験することが目的だった。次は各種の記念フライトである。その最初は1981年3月に東亜国内航空が導入したA300の有償ファーストフライトだった。初便であるので出発前に

セレモニーがあったり、記念品をくれたりする。シートも真新しいし、乗務員も緊張している。このような新しい機種 of 初便、既存機種の引退前の最終便、新航空会社の初便、新空港の初便等、数多くの記念フライトに乗った。当初は国内線のみであったが、そのうちに国際線にまで及んだ。日本航空ジャンボジェットB747のラストはホノルルー成田、B787のファーストは成田ーポストン、といった具合である。全日空の名古屋ー広州線に全席ビジネスクラスのB737が就航した際は広州滞在時間1時間強で日帰りした。

他に搭乗を目的にする場合、様々な機種、航空会社、空港を利用することがターゲットになる。機種は小型のセスナ172から総二階だてのA380、超音速のコンコルド、さらに飛行船、ヘリコプタを含め、大別しても50機種、細かく分類すると230機種に搭乗した。航空会社は110社、国内の空港では北は礼文から南は波照間までヘリポートを含め109空港で離陸あるいは着陸を経験した。海外の空港はイラクのバグダッド、バスラなど仕事だったからこそ行けた空港を含め110ヶ所を

訪れた。

フライト回数と機種を連結させる試みもした。どういふことかというところ「747回目のフライトにボーイング747に乗る」という手合いである。A300、B737、B747、B767は国内線で対応できた。トライスター(L1011)の時は全日空から退役していたのでデルタ航空のロサンゼルスーアトランタ線で達成した。

このようなことをするのは自分だけかと思っていたら、他にも何人か同好の士がいて知り合いになり、情報交換をしながら航空会社に電話をかけたり、窓口に並んだりして席を確保した。しかし最近ネット予約が中心となり、特に新機種の初便などの場合、乗るためでなく転売目的で買う奴ができて席を取り難くなった。

現在挑戦中なのは1000機搭乗である。これは乗った機体の数で、同じ機体に複数回搭乗しても1機とカウントする。2024年末時点でフライト回数は2552回、機数は986機、弁慶の刀集めではないが死ぬまでに1000機に到達したいという心境である。

オハイオ時代

安藤 晃二

六九年初頭、商社でニューヨークに赴任した。歴史に残る豪雪の翌日、凍てつく快晴の空を被うマンハッタンの摩天楼を眺めながらの初出社は今も鮮明である。着任して解ったが、顧客の殆どは、中西部までの米国の東半分に分けており、全米への空路網が至便のこの町で、毎日のようにラガーディア空港の駐車場の木戸を抜けて、ターミナルに進出、地方出張に向かう生活となった。

しかし相手の工場は必ずしも大都市にあるとは限らず、その空港から数十マイルのドライブは常識である。レンタカーカウンターは常に赤色デザイン、エービス社を選び、最短時間で保険等書類手続きを済ませて、空港玄関を出るや、右手に並ぶ発車準備済の車に飛び乗る。地図を見るのは運転しながら、という事になるが、一番の頼りは耳に残るカウンター嬢の指示、「真つすぐ行って、サインをフォローすれば、絶対間違わないわ、大丈夫よ」

日本式の事細かな道案内を期待しても、応えてくれるような米国人に会ったことがない。

私の戦場は、先ずはオハイオ州であった。いの一番でシンシナティを訪れる。「ケンタツキーへ、ようこそ」「えっ?」。真実であり、且つジョークなのだ。オハイオ川の蛇行故にシンシナティ空港は対岸のケンタツキー州に鎮座する。成程、これが市にとって最も便利なロケーションなのだ。

私は当時ニューヨークで、日本からの鉄鋼の販売を担当した。折しも、タイヤ業界での大革新であるステイールラジアルタイヤに埋め込む鋼製のタイヤコード（真鍮メッキの撚り線）は、タイヤメーカーにとってもコードメーカーにとっても、ナイロンコードからの転換という、高度な開発案件であり、二年間もかかる加速試験をフォローしつつ、供給側の日欧が売り込み戦にしのぎを削っていた。タイヤメーカーといえば、当時はグッドイヤー、ファイアストーン等、米国が最強で、歴史的に、これら

大手の生産拠点は、オハイオ州アクロンに集積していた。アクロンへはニューヨークからの直行便は少なく、やはりエリー湖畔のクリーブランドから、一時間のドライブということになる。ハイウェイにたどり着くまで田舎道を捜しながらの手探り運転である。

冬のある日、クリーブランド空港に小雪が舞っていた。この地を中心に南方向に流れる広大な平野を人々はオハイオバレー（溪谷）と呼ぶ。溪谷とは大げさであるが、この幅広いルートからエリー湖に向かって暖気が押し寄せ、そこでカナダからの寒気とぶつかり天候が急変する。ローカル道でワイパーも動かない降雪となる。ホワイトアウト状態に加えて、明らかに新雪下で起きるフィッシング（車の尻尾が左右に大きく揺れて、ハンドル操作が効かなくなる）の恐ろしい経験をした。果たして自分が道路に居るのやら、畑に落ちてしまったのかも解らぬまま、這々の体で近くのホリデイインに逃げ込んだ。

アクロン行きを繰り返す中に、この親しみ深い町の様

子も判って来る。タイヤのメッカであるこの町が、ボーリング発祥の地であったり、夏の子供達が主役のソープボックスレース、石鹼会社の段ボール箱に入り三十米程の高さの土の丘を滑り降りて順位を競う素朴な大会へ全米から人が集まるのも面白い。お陰で出張のホテルが取れなかった失敗もあった。

ファイアストーン・カントリークラブはCBSクラシックが行われるゴルフ界の聖地で、オハイオ出身のニクラウスが大活躍する。私と同じ年のジャックの道具と聞いて、ターニーを購入するも、素人が使いこなせる代物ではなかった。その進化型が発売されるや、性懲りもなく、また買ってしまふ。そのターニーは今、新品同様の儘、物置のゴルフバッグで眠っている。



若返り行進曲

池田 隆

「自然人類学」が面白い。生物としてのヒト（ホモ・サピエンス）の特性を科学的に研究する学問である。私が学生だった六十数年前にもサルを飼ったり、ジャングルでチンパンジーやゴリラの生態を調査したりする研究が行われていた。だが当時は全く関心が沸かなかつた。

退職の後、柳田国男、折口信夫、宮本常一、網野善彦、中沢新一、レヴィ・ストロースなどの本を開き、民族や民俗の面からヒトを研究する「文化人類学」に興味を覚えだした。さらにそれと関係の深い社会学、心理学、思想哲学、宗教学の書も読み漁ってみた。

しかし「なぜヒトを殺してはいけないのか」「なぜヒトは姦淫してはいけないのか」「なぜヒトは利他をすすめるのか」「なぜヒトだけが生殖のためでなく、快樂のためにも性行為をするのか」「なぜ神や宗教が生まれるのか」「なぜ人新世と言われるほどにヒトが異常発生し

たのか」「なぜヒトはひとりでは生きていけない社会的動物なのか」などの素朴で根源的な疑問に、それらからは満足な答が得られなかった。

このモヤモヤした気持ちのまま人生も終わるのかと諦めていたところ、たまたまSNSで「自然人類学」に関する長谷川真理子の講義に触れ、光明が見えてきた。彼女の話に自分なりの解釈を加えてみると、

ヒトの祖先はアフリカのジャングルでサルのように果実を食べる樹上生活をしていた。ところが気候変動で砂漠化が進み、ジャングルがサバンナになり果実が少なくなる。地上に下りて二足歩行を始める。はじめはチンパンジーのように前屈みで腰や膝を曲げ前足（手）も使う歩きだった。まだ素早くは歩けない。ただ直立姿勢で頭の重さを胴体で支え易くなった。頭脳を大きくすることが可能となり、だんだんと知力が増してくる。

言語を高度化し、道具や衣服を使い、火をおこすことを覚えて猛獣から身を守り、逆にそれらを狩猟して肉食を始める。摂取するカロリーやたんぱく質が増え、脳がさらに発達する。筋肉がつき体力も増強する。

さらには体毛を薄くして冷却能力を上げ、長距離走では猛獣に負けなくなる。集団となり共同してマンモスなどの大型動物を狩猟し食料に変える。共同作業は仲間同士で互いの気持ちを察し合う知性を生む。すなわち殺人を禁じ合い、利他を敬う精神が出てくる。

しかし狩猟の成果は気まぐれで安定しない。安定的な果実採集も依然として欠かせない。そこで妊娠するメスが採集作業、オスは狩猟と役割分担が進み、両者に体格差や体力差が生じてくる。ただ二足歩行に適した骨格では産道をあまり広げられず、大きな頭部をもつ胎児を生みにくい。ヒトはみな未熟児として生まれてくる。

長期間の未熟児の世話は母親だけでは難しい。父親との安定的な共同作業が必要となる。そこから一夫一婦や快樂のための性行為の習性が生じた。

頭脳の発達時は時空を超えた好奇心・探求心や抽象力を生み、仮想世界を考え出す。科学や宗教、哲学、芸術、文字、貨幣、AIはまさに頭脳の産物である。

このように二足歩行が人類進化の原点である。老化とはこの人類進化のプロセスを個人が逆向きに辿ること

ある。まず知性や記憶力が鈍り出し、膝や腰を曲げた前屈歩行となる。後は車椅子、寝たきりと死を待つのみ。自らを振り返ると、知的趣味のエッセイ書きもネタ探しに苦勞するようになった。日課のウォーキングも「テクテク」だったのが、「トボトボ」になってきた。

毎日4 km、高低差100 mの周回コースを60分かけて6000歩で歩いてきたが、気が付くと途中で腰が曲がり、足を引きずり、手を後ろで組む「トボトボ」歩きになっていく。歩く姿勢に自己嫌悪を覚え始めていた矢先、実感を伴う嬉しい発見をした。スマホに録音してある古関裕而などの行進曲や応援歌をかけると急に元気が出て、「スタスタ」と歩けるようになるのだ。

胸を張り入場行進する若人の気分となる。所要時間は50分を切り、歩数も5000歩で歩けた。20%も短縮する自己新記録だ。この齢で!! 先日はその自信を胸に諷訪湖一周16 kmのコースを一気に歩いてきた。

歩行機能に対する行進曲の効能については脳科学がドーパミンの分泌などと説明するかも知れない。知的機能についても薬剤でなく効果的な楽曲がないものか。

漱石と子規

池松 孝子

夏目漱石は大文豪として誰もが知るところであるが、俳人でもある。『漱石俳句集』や『漱石詩集』などの俳句集が出版されている。生涯に二千五百二十七句を作っている。

漱石と子規は明治二十二年旧制高等学校の同級生として出会った。「寄席通い」という共通の趣味があったことから親しくなったという。子規の漢詩文集『七草集』を漱石が読み、巻末に批評を書いた。逆に子規が漱石の紀行文『木屑録』を詠んで批評することもあった。

子規はいくつものペンネームや俳号を使っていた。瀬祭書屋主人、竹の里人、雲助などだ。「漱石」もその一つで明治二十二年に夏目金之助に贈った。二人の友情の証しだ。その友情は子規が明治三十五年、三十五歳で亡くなるまで続いた。

漱石は東京帝国大学英文科卒業後、松山に英語教師と

して赴任した。下宿先ではしばらく子規と共同生活をしたが、その時、松山の俳句結社「松風会」の句会が大勢の仲間によって開かれた。そこに漱石も加わるようになり、これがきっかけとなって子規は漱石の俳句を添削するようになったという。

鐘つけば銀杏散るなり建長寺

漱石

漱石がこの句を詠んだあと、病状が快方に向かった子規は、松山に漱石を残して東京に戻ることになった。ちなみに子規は柿が好物で病床でも食べるほどだったという。また、漱石は子規のことをあだ名で「柿」と呼んでいたとも。

柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺

子規

先の漱石の句があつて、この句があると思う。子規は東京に向かう途中、奈良に立ち寄った。その費用は漱石の援助によるものだった。

次は松山を去る子規に送った別れの句である。

永き日や欠伸うつして別れゆく 漱石

別れの寂しさとともに滑稽さとユーモアを合わせて感じる句だ。

脱いで丸めて捨ててゆくなり衣更 漱石

本名は嘔とわからず草の花 漱石

初夢や金も拾わず死にもせず 漱石

叩かれて昼の蚊を吐く木魚哉 漱石

子規は漱石の句を「斬新で句法も自由なものだ」と評している。私はこれこそが漱石の江戸っ子たる所以だと思ふとともに、ある意味、常識を超えていて愉快だ。



三つの大きな心配

市川 忠夫

一九九九年から二〇〇〇年にかわる時、世界中が大きな心配をしました。官庁・企業の情報システムに「年代切換えのバグ」があると、社会に大混乱をもたらす心配があったためです。幸い、心配は杞憂に終わりました。

あれから二五年の年月が過ぎ、新しい年「二〇二五年」が始まりました。しかし、これまでの二五年を振り返ってみると、「三つの大きな心配」が浮かび上って来ました。三つの心配は、昨年（二〇二四年）一気に噴き出したように感じられます。

第一の心配は「自然環境の大破壊」が猶予できない段階に来たことです。地殻変動・地球温暖化や飲食物への不純物混入により、「大地」「空気」「水」が危うくなってきました。「大地」には巨大地震や大噴火が潜んでいます。「空気」温度は昨年観測史上最高を記録しました。

「水」にはPFASなどという訳の分からない危険物質が含まれているそうです。人間生存の根幹「大地」「空気」「水」にまで、悪魔の手が伸びて来ました。「どうしたものか？」と思い悩みますが、よく考えてみると、策はありそうです。私たちの価値観を「地球の一員に相応しい価値観」にかえればよいのです。策の一例を考えてみました。

学校時代、「第一次産業、第二次産業、第三次産業」という言葉を学びました。これらを根本的に見直すのです。簡単に言えば、「第一次Ⅱ生産・製造する産業」、「第二次Ⅱ消費・使用する行動」、「第三次Ⅱ還元・復元活動」です。これまで「捨てる、廃棄」などと軽く見られていた活動を、しっかりと「第三次活動」とするのです。人間以外の生物は皆、このルールで生きています。同じ神様がお創りになったのに、人間だけが「間違った産業分類Ⅱ間違った価値観」に固執しているのです。「新しい価値観」を教育・普及させれば、十年後には人間の行動がかわり、「清々しい空気」「清らかな水」に近づくでしょう。

第二の心配は「人間関係の大破壊」です。ウクライナ

やパレスチナの戦争を見れば明らかで、既に第三次世界大戦に入っているなどと言う識者もいます。報道番組・記事を見ていて不思議に思うのは、プーさんとゼレさん、あるいは、ネタさんとハマ君の「連日の会議」や「徹夜の会議」などがひとつも報じられないことです。もしこのような問題が企業間で起きたならば、部門長間の話合いに始まり、社長間の話合いに至ることもあり得ます。それでもダメな時は、会長間の話合になることもあるでしょう。企業に譬えれば、プーさんはロシアの、ゼレさんはウクライナの社長です。しかし、どちらの国にも会長がいません。そういう場合は「現代の宗教家」の出番です。ロシアやウクライナの宗教家幹部は今、何を考えているのでしょうか。

もう一つの策は、「現代の皇帝制」です。お金中心の政治家・経済人ではなく、好奇心主動の科学者・技術者でもなく、人の心と幸福を常に念頭に置いている「現代の皇帝」を大統領・首相の上に位置づけるのです。日本の天皇陛下のようなお方です。トラさんにロシアの、シーさんにウクライナの「皇帝」になっていただくのはい

かがでしょうか。きつとトラさんは喜んで引き受けてくれると思いますが。

第三の心配は「人工知能の異方向発達」です。科学の成果は「よい使い方をすれば、人間を幸せにする」と思っていました。が、ダイナマイトや原子力は、戦争に使えば殺人道具です。しかし、人工知能の使い方は、凡庸な私にはよく分かりません。敢えて私の「カンピュータ」を駆使して想像してみますと、「人々の格差拡大の道具」になるような気がします。人工知能は、ぜひ「自然環境の確保」や「人間関係の改善」に使ってほしいものです。

二五年後、二〇五〇年のある日、「天国の小窓」から「地獄の小穴」からかもしれないが、私はそつと地球を覗き見るでしょう。今はまだ一〇歳にもならない孫たちが、もう三〇代になっています。

「朝の清々しい空気を胸いっぱい吸い、清らかな水でうがいし、美味しい朝ごはんをよく噛んで食べ、元気いっぱいいでいる姿」を見たいと願っています。

被団協のノーベル平和賞受賞

稲宮 健一

今回のノーベル平和賞受賞は核兵器が使われた時の悲惨さを、改めて世界中に知らしめたことに大変な意義があった。しかし、原子爆弾が戦争に使われる可能性を日本はなぜ知り得なかったのか。また、使われる前に戦争を終結させることができなかつたか残念に思う。筆者は一九四四年、国民小学校一年で、覚えている掛け声は「米英撃滅火の用心」、「神国日本はやぶれない」。「七つボタンの予科練の」などの行進曲も頭に残っている。

一方、物質の究極を求める研究は西欧を中心に進んできた。戦前は日本も西欧の最先端の研究者と交流があり、日本の中心は理化学研究所の仁科芳雄であった。戦後ノーベル賞に輝いた湯川秀樹、朝永振一郎などは西欧と同じレベルの実績を保持していた。しかし、開戦になると、世界との学術交流は途絶えた。一方、欧米の原子核物理の研究は着々と進んでいった。アインシュタインが示し

た $E=mc^2$ 。即ち、質量欠損とエネルギーとが等価であることの現象は原子番号の大きな原子で観測され、ウランの核の崩壊時に膨大なエネルギーが発生することが予測された。この現象は戦争中の日本でも分かっていた。現実に膨大なエネルギーを手中に入れるには核分裂を連続して起こす必要がある。エンリコ・フェルミがこれを実現した。この現象を実験室から工業化の段階に進め、原爆の製造に到達した。この理論は日本でも知られていたが、工業化はできなかった。米国に亡命していたアインシュタインはこの核分裂のエネルギーをナチスドイツが爆弾に応用することを恐れて、米国が先に実現するように助言したと報じられている。残念ながら、この心配は日本に向られた。

真珠湾攻撃で始まった日米開戦は緒戦の成果を誇るも、ガダルカナルの開戦で大艦巨砲の空母を失い、以来、太平洋の島々が次々に陥落し、テニアン島から飛来したB29によって広島と長崎の悲劇が発生した。なぜ、このような悲劇を受ける前に戦争を終わらすことができなかつたのか。

All Loomis という退役軍人をウイキペディアで検索すると、米国の底力が見られる。彼は第一次世界大戦の退役軍人で、一九二九年の大恐慌時に財をなし、自らガレージ研究所を開き、レーダーの開発に寄与した。このグループがMITの航空機搭載用レーダーの開発に参画した。日本では株屋と言えば、「ぎゅうちゃん」が有名であるが、私財を投入して最新研究に寄与した話は聞かない。

同じ時期に国内ではレーダーの心臓となるマイクロ波を発信できるマグネトロンを東北大学の八木秀次門下の岡部金次郎が発明した。世界初である。航空機搭載用レーダーを実現するには数々のブレイクスルーが必要であったが、米国はこれを達成した。一方、日本のレーダー（電探）は完成度が低く、実戦配備には至らなかった。戦後明らかにされた米国のマイクロ波構成部品は東名阪の通信網に使われ、長距離通信に革命をもたらした。もう十年前程前、大河ドラマ「真田丸」の余韻で、長野県の上田城に行き、近くの松代の大本営跡地を訪ねた。四四年サイパン陥落のあと、本土決戦の時の国の中

枢機関、皇居、大本営、その他政府機関を疎開させるため、岩盤をくり抜き、約六〇〇坪からなる地下豪であった。既に沖繩戦で米軍の物量作戦のすさまじさを実感しているはずなのに、さらに、四五年春になると、本土の各都市がB29の爆撃を受け、都市、工場施設がほとんど破壊されていた。しかるに、本土決戦、「神国は負けない」の掛け声のもと、鈴木貫太郎を中心とする首脳の決断とご聖断が降りるまでに、勝ち目のない戦争に終止符を打つことができなかつたのか。

「真田丸」では最終的に真田氏は滅んだ、しかし、徳川は残った。内戦では民族は残るが、これは外国との戦争では通用しない。

四四年疎開先で、母に聞いた、ソ連が攻めてくることがあるのかと。条約があるので、せめて来ることはないという返事だった。しかし、これは破られた。もし、この状況下、本土決戦で戦争が長引いたら、北海道はソ連の施政下に入っていたかもしれない。南北に分かれた日本など考えたくないが、戦争の領土の奪い合いは過酷なものだと思う。

俳句を始めて十余年

上田 信隆

私が俳句を始めたのは、七十歳を過ぎていた。小学校の幼馴染の薦めで企業OBベントクラブに入会をした。物書きには少々興味があったので当初はエッセイの欄に投稿をしていた。俳句の会があると知って早速参加することになった。

高校時代の恩師が「斎藤茂吉」のファンで短歌には少々触れたことがあったが俳句は教科書でしか見ていなかった。

企業OBベンの俳句に参加してから五、六年たつと他の俳句結社に顔を出すことになった。この時はもう稽古事からは卒業をして本格的に俳句を学ぶところへと変わってきたと思う。俳句は楽しむものだと思いが夢中になつてくると常に俳句が自分の傍にいて、何をみるのも俳句に置き換えるようになる。ほとんど病気の状態までに

なるようでないと上達はしない。

又俳句は座の文学と言われるように俳句の仲間との交流が大変重要になってくる。基本的には俳句を楽しむことにあるのだが、お互いに切磋琢磨するのも俳句の上達には必要だと思われる。

多くの人と俳句に接すると本当に俳句がうまい人は世の中には何人もいることがわかる。俳句は性別、年齢にはほぼ関係がない。うまい人は最初から目を引く俳句をつくる人が多い。しかし俳句は年をとってからでもうまくなる人はざらにいる。むしろ年齢を重ねて腕を上げる人に一流の人が多くと思われる。俳句の平均年齢が七十五歳といわれているのも頷けるところだ。

さて俳句を勉強するうちに主宰との関係がたいへん大事という事がわかってくる。よき指導者としての主宰のアドバイスなどは俳句に於いては大変貴重な経験になると思う。

私は最近著名な俳人のホームページのお手伝いをするようになった。この先生の俳句に対する姿勢は一段違つ

て見える。

特に句会での「選」については本当に驚かせられる。普通の人とは全然違う見方をする。その人の「選」の俳句をみるとなるほどと納得させられる。無論多くの人が推薦する句も採られるが、時として「なんでこの句が？」と思うものがある。しかしゆっくり考えてみると合点がいく。先生の「選」は納得せざるを得ない。プロというもののはこういうことかもしれない。

そこで私は先生に「どうしてそんなに良い選ができるのでしょうか？」と聞いたことがあった。しばらくして先生曰く「経験ですかね」と……。全くの愚問かもしれないと私は少し恥ずかしさを覚えた。

俳句に限らずよき先生に技術、物事の本質を学ぶことはいくつになっても大事なことだと思う。自己流は所詮底が見えてしまうし、長く続けていくことはかなわない。大切なことはよく自分を見つめて人の言うことを学ぶ姿勢にあると思う。本当に世の中にはいろいろな方面で優秀な人が多い。やりたいことは色々多いがいかにかのあ

る人から学べるかが人の生きる上の糧になるかを知るべきだと思う。

私は八十を超えてから又囲碁を打つようになった。大学時代のクラス仲間から誘いをうけて囲碁を再び楽しんでいる。ある日、プロの指導を受けるようになった。院生の出の人だが教え方はまるで違う。かれこれ二年近くなる。なんと四段の腕前になった。

肉体的には八十を超えれば衰えるのはやむを得ないが、頭脳のほうは進化を遂げることが出来る。少なくとも衰えを減少する効果はあると思う。

生きている以上、人間はやる気が大事だと思う。又自分の力を謙虚に考えて無理なく楽しみ心底これからも俳句など楽しんでいこうと思う。

それにつけても原稿の締め切りにぎりぎりに間に合わせるの今回の投稿はご迷惑をかけ、大変恥ずかしく思っている。

伊勢神宮と熱田神宮のはじまり

宇敷 辰男

伊勢神宮と熱田神宮を訪ねて昨年妻と二人で旅をした。初日にマイカーで初めて熱田神宮を訪れ、翌日は二十八年振りに伊勢神宮を訪れた。

熱田神宮は凡そ千九百年前、三種の神器の一つ、日本武尊たけのみことが使った草薙剣くさなぎのつるぎをこの地に祀ったのが始まりで、伊勢神宮は凡そ二千年前、天照大御神を祭るための地を伊勢に定めたのが始まりとされている。

二つの神宮のはじまりに共通して登場するのが倭姫命やまとひめのみことの伝説である。日本書紀では「倭姫命」、古事記では「倭比売命」と表記される。倭姫命は第十一代垂仁天皇の皇女で、第十二代景行天皇の皇子である日本武尊の叔母にあたる。

天照大御神はそれまで宮中に祭られていた。しかし疫病が流行り、国の乱れが治まらなくなり、大和国の大神おほみわ

神社じんじやの近くの笠縫邑かさぬいのむらに臨時の祭場を設け祭ることになった。そこに倭姫命が登場する。天照大御神を祭る最適の地を求めて倭姫命が中臣、物部、大伴らを伴い長旅に出る。四十年近くをかけ伊賀、近江、美濃などの国を経て伊勢国に入り、天照大御神を祭るのに最もふさわしい場所として、倭姫命が今の地に神宮を創建したとされている。この時、草薙剣くさなぎのつるぎと天叢雲剣あめのみづらぎも笠縫宮を経由して伊勢神宮に移されたという。

日本武尊が東国の討伐に向かう時、叔母の倭姫命が甥にこの剣を与えた。相模国で火攻めに遭った時、その剣で草を薙ぎ掃い敵を退けた。その後、日本武尊は東国の平定を終え大和国に戻る途中、尾張国で妃の屋敷に神剣を置いたまま、伊吹山の神との闘いに向かい、致命傷を負う。そして大和国に戻る前に亡くなる。残された神剣が熱田の地に祀られ、熱田神宮の始まりになった。

熱田神宮の常夜燈が立ち並ぶ玉砂利の参道を踏みしめて、落葉が折り重なる境内を歩くと、樹齢千年の巨木の

クスノキや、生い茂る木立にカラスが鳴いていた。御神木の下でその糞が妻の帽子にポトツと落ちてきた。八咫鳥ではないけれど、それが神のお告げだったのか、ランチタイムで美味しいひつまぶしに出会うことが出来た。

翌日、伊勢の外宮を参拝し、おかげ横丁の茶店で赤福を食べ、陽の射す五十鈴川の澄んだせせらぎを渡り玉砂利の参道を歩いて、内宮の広い境内を見て廻った。

伊勢神宮では、四月に神宮神田の稲種下ろしのまつり、五月にお田植え始めの式が行われ、十月に神嘗祭で新しいお米を天照大御神に供えて稔りに感謝する。志摩半島の最東端の国崎では、六月から八月にアワビ漁が行われ、熨斗鮓を作り、伊勢神宮に献上している。

これらのお祭りや、神田やアワビ等の御料地を定め、神宮所管の宮社や、祓などの神事、神職の指針を示したのが倭姫命で、神宮運営の基礎を確立したとされている。

内宮と外宮を結ぶ御幸道路の中ほど倉田山に、倭姫宮が鎮座している。伊勢神宮には十四の別宮があり、倭

姫宮は地元の篤い信仰と熱望に依って大正十二年に創建された別宮である。

平成二十五（二〇一三）年に第六十二回神宮式年遷宮が執り行われた。前回訪ねた二十八年前は正宮に向かつて左側が古殿地であったが、今はそこに正宮が建て替えられていた。式年遷宮は十四の別宮でも正宮に準じて行われる。晴れた空の下、小鳥のさえずる境内で、静かに佇む茅葺屋根の倭姫宮に参拝した。日本書紀が出来た凡そ千三百年前、日本という国がはじまった頃から続く式年遷宮に依って、十一年前に造り替えられた社殿は、別宮も正宮と同様に、屋根の上が黄金色に光り輝き、倭姫命が威光を放っているかのようであった。

今回残念だったのは、予約をしていなかったのでアワビが食べられなかったことであった。でも伊勢神宮の帰りにマイカーで走った県道沿いで、松阪牛の美味しいすき焼きに出会うことが出来たのは、倭姫命のご加護だったのかも知れない。

ボストンの空に「蛍の光」

孫基禎のリベンジ

内田 満夫

通りかかった映画館のひとつのチラシが目にとまる。

ランニング姿の若者の姿があつて、タイトルに『ボストン1947』とある。太平洋戦争終了わずか二年後の一九四七年、当時米国の軍政下にあつた韓国の選手が、何と伝統のレースを制覇していたのである。

私が小学校高学年だつたある日のこと、授業が終わると級友たちが、シンズウがどうのこうのと言いながらそわそわしだした。どうも映画を観にくらしい。どんな内容だかわからないまま、皆にくつついて映画館に駆けつける。

一九五三年のボストンを制した山田敬三をモデルにした作品だつた。主演は根上淳。映画のいくつかの場面は今でも鮮明に覚えている。映画のタイトル『心臓破りの

丘』とは、三十キロ以降に待ち構える同コース象徴の長い上り坂のこと。幾多のドラマが展開されたレースの勝負どころだ。

この山田敬三には、私が東京の鉄鋼ビルに通勤していた三十歳代後半の頃、東京駅頭でよくすれ違った。交友とてなかつたが、八重洲口の一角に彼の勤務する藤田観光の営業所があつたのである。

高校に入ってふとしたキツカケからマラソンを始めて、もう六十五年になる。だから山田敬三と前後してボストンを制した田中茂樹、濱村秀雄らの名もよく知っている。しかし日本選手に先んじる韓国選手の快拳があつたことについては、迂闊にもまったく見落としていた。

一九三六年のベルリンオリンピックのマラソンで、孫基禎(ソン・ギジョン)と南昇竜(ナム・スンニョン)が、金、銅メダルに輝いたことも、もちろん知っていた。当時韓国は日本に併合されていたから、孫のベルリン優勝の記録が今に至るも日本国であることは覆らない。その無念を晴らすべく、この二英雄が有望後輩を発

掘・育成して、当時すでに世界的レースであったポストンに送り込むリベンジを計画したのである。『ポストン1947』は、その史実にもとづくドキュメンタリータッチの作品だった。

表彰台に立つ徐潤福（ソ・ユンボク）の晴れやかな表情が大写しになる。ボストンの碧空に太極旗が翻る。流れる韓国国歌。字幕の歌詞には、東海（日本海）、白頭山の文字が躍る。ところがその旋律の、どこか無性に懐かしく、何とおだやかな調べであることか！

それもそのはず、それが「蛍の光（原曲はスコットランド民謡Auld Lang Syne）」であることに、ほどなく気がついた。我々が幼い頃から慣れ親しんできたメロデーだ。韓国の国歌はそれまで長く、蛍の光の旋律にのせて歌われていたのだった。

大韓民国の正式建国がその翌年の一九四八年。韓国国歌はそれ以後、同じ歌詞ながら新しい曲にのせて歌われるようになるのだが、徐潤福のボストン制覇の時点ではまだ蛍の光だったというわけである。

孫基禎はベルリンの表彰台で日の丸を隠したことが問

題視され、その後競技からの引退を余儀なくされる。朝鮮の東亜日報も、孫のユニフォームの日の丸を消して報道したとして発行停止処分を受けた。

韓国がベルリンでのリベンジを最終的に果たすのは半世紀あと、一九九二年のバルセロナオリンピックまで待たねばならなかった。黄永祚（ファン・ヨンジョ）が日本の森下広一との一騎打ちを制して、堂々金メダルに輝いたのである。

ちょうどNHKの朝ドラ『虎に翼』が放映中の頃だった。上京の機会を利用して、主人公のモデル・三淵嘉子が学んだという明治大学に立ち寄った。同大博物館の「虎に翼」展ブースを覗いたあと、常設展示を見ていて思いがけずそこで孫基禎に出会う。

マラソン発祥の地から彼に贈られたというギリシャ兜の展示があった。ベルリンの翌年、彼が明治大学の法科に入学し四年で卒業していることもはじめて知る。しかし箱根駅伝名門の競争部への入部が許されることはなかったのである。時代に翻弄された彼の無念が、あらためて胸に迫ってきた。

「人生百年時代」に思う

大津 隆文

最近折に触れて「人生百年時代」という言葉を耳にする。実際に百歳以上の長寿者の数も年々増えているようだ。私も八十五歳、あと十五年で百だ。しかし、現状ではそこまで行けるとは思ってもいないし、目指そうという気もない。というのは私にとっては百歳がそんなにバラ色とも思えないからだ。

むしろ今関心があるのは、なぜこんな年寄りの自分が生きているのかだ。君は何のために生きているか、なぜ生きているのかと問われても返答に窮する。

人間にとって不老長寿は大昔から夢であった。日本人にとつては「村の渡し」の船頭さんは今年六十のお爺さんと歌われたように、かつては六十歳が長寿だった。それが目覚ましい医学の進歩、食料事情の改善のお蔭で今や平均寿命は八十歳を超え、長寿の夢が叶いつつある。

では世の中幸せ感が溢れているだろうか。急速な長寿

化の中で私達は生き甲斐、充実感を、見出しているだろうか。仕事や子育てから解放されたのはいいが、何のために生きているのか、戸惑っているのではなからうか。

また肉体的には長寿になったが、精神の方はどうだろうか。肉体の長寿化に精神面が追いつかないことが、認知症の増加になっているのではなからうか。

かねて私は人生を三区分して考えていた。第一段階は一人前の人間になるための「教育」の時代、次いで自分と家族のため、世のため人のため働く「勤労」の時代、そして最後に、人生をエンジョイする「享受」の時代。

私はこの第三段階で既に約二十年、教育や勤労の時代のようなストレスもなく、ありがたく毎日過ごしているが、このままずっといけるかどうかが不安が生じてきた。

私の母も家内の母も百歳を超えて長生きしたが、歳とともに心身の活動が衰えていき、正直気の毒だった。自分もその軌道を辿っているのではないか、という恐れが強くなってきている。

人生三区分の私見も変えるべきかとも思い始めた。第

一段階は前述の一と二を合わせた「目的」のために生きる時代だ。そして前述の三を分けて、前半は人生を楽しむために生きる時代、後半は積極的に人生を楽しむことも出来ず、死なないから生きている時代となるだろうか。

この新第三段階、人生の最晩年の心身の自由が失われた状況下（寿命と健康年齢の差は約十年という）の生き方をどう考えたらいだろうか。

当然色々の介護、人のお世話を受けなければならない。感謝の気持ちを忘れないようにしよう。母は晩年認知症が進んだが、介護ホームではスタッフの方に常に手を合わせ「感謝感謝」と言っていた。自分も母を見習いたい。

さらに体は全く動かさず認知症も進んだ状況になると、それでも生きるのか、生きなければならぬのかとの疑問も生ずる。人には自分の生死の選択は許されぬかという問題だ。軽々に答は出せないが、緩和ケア、尊厳死は許されても、安楽死となるとその選択は道理、摂理に反すると考えるべきではないか。

以前NHKのドキュメンタリー番組で、福島で被曝し

た牛の世話をしている人が紹介された。肉牛としても乳牛としても今後役立つ可能性はなく、子牛も残せない牛達。なぜ世話をしているのかと問われた人の答は、命を全うさせてやりたい、だった。

「命を全うする」ことが、この世に生を受けた者の務めではなからうか。生きるからには楽しく朗らかに生き切ることを目指したい。いざとなればお任せする、と割り切ることも大切かもしれない。老残、老醜という言葉は嫌だが、名もない老爺、老媪に引き込まれるような笑顔の人がいる。ああいう笑顔の境地になりたいものだ。

「ピンピンコロリ」が年配者にとっては理想と言われるが、どうしたら実現出来るか。ピンピンと自立して生き続ければ最後はコロリと逝ける、と信じておおらかに生きていくことにしよう。それが一番幸せそうだ。

人生百年時代の到来は慶賀すべきことではあるが、難しい課題が提起されている気もする。

最後に恥ずかしながら拙句を一つ、

残る蚊や長生きさほど楽でなく

医療から介護へ／難病四年生

大月 和彦

二〇二〇年秋、T病院の神経内科でパーキンソン病症候群（大脳皮質基底核変性症）と診断された。難病認定を受け、通院し診察を受けている。

それから四年経過した現在、身体全体の筋肉の劣化が進み、脚力の低下による歩行難に、嚥下能力の低下、痰つまり、構音障害、便秘など、多くの症状が現れ、病状が進んでいる。転倒や転落の危険にさらされるので、室内の移動には歩行器が必要になる。家族との会話も不自由。また知人や友人との電話が通じにくくなるなど、病状は、少しずつであるが、確実に進んでいる。

二〇二四年秋、妻と娘に付き添われてT病院を受診した。主治医に最近の状況を報告し、嚥下障害（誤嚥）などが心配だと訴えた。これには答えず、しばらくして、「話しにくいことだが」と言いよんだ後、「あなたは

八十九歳。肺炎や転倒で寝たきり状態になった場合に備え、たとえば、胃ろうや人工呼吸器使用の可否などを家族で相談しておいたら」という。

なるほど、そういうことだったのか。病院側の「無い袖は振れない」を伝えたかったのだ。ケガや不治の病気が重篤化した場合に、胃ろうなどの延命治療はしないと家族で決めてある。

二〇二二年夏から同病院のリハビリ科で理学療法と言語聴覚療法のコースを受けていた。

高齢の難病患者を指導するのは、言語聴覚士Aさんと理学療法士Wさん。

言語聴覚士Aさんの指導は、防音装置のあるレッスン室で。挨拶の声が小さいと、顔を近づけて「おはよう」と大きな声を出す。「おはよう」とこたえると、「声が小さい！ もっと大きな声を」とはっぱをかける。体育会系？

発声の基本は呼吸にある。まず腹式呼吸。鼻から息を吸い、口からゆっくり出す。下腹部に手を当て、絞り込むようにして声を出す。「吸ってー、吐いてー」。向かい

合つて両手を相手の肩に載せて、唱歌「故郷」を怒鳴るように歌つて終わる。

理学療法士Wさん。歩きの一步が出ない「すくみ足」向けに、杖の根元に20〜30cmの蛍光塗料の入ったプラスチック製の横棒を付けてくれる。使つてみると、不思議なことに、棒を乗り乗り越えようとして足が動く。Wさん手製の杖は現役だ。

二〇二四年秋、このリハビリは、突然打ち切られた。医療保険の都合らしい。

F市から介護保険の要介護の認定を受け、選任した介護支援専門員（ケアマネジャー）の指導で各種の施設の利用や車いす借用など介護サービスの利用が出来るようになった。

二〇二二年春からリハビリ専門の通所施設のデイケアに行く。社会福祉士、機能訓練指導員（柔道整復師）などの資格を持つスタッフが車でピックアップした利用者が集まり、朝礼が始まる。スタッフの挨拶でその場の雰囲気やわらぐ。

椅子に掛けたままの三十分の体操は、身体全体の筋肉を動かすように出来ているすぐれもの。濃密で終わった後は気持ちいい疲労が残る。

トレーニング、歩くのに必要な筋肉強化のための器械のニューステップは、六分間でヘトヘト。消費カロリーは二十〜二十五キロカロリー。マッサージのウォーターベッド。

ユーチューブには、言語聴覚士による嚥下体操や発声訓練、整形外科医の嚥せの予防など高齢者や難病患者対象のコンテンツが多く、自宅で出来る。

誤嚥予防、発声訓練など必要なプランを毎日続けるつもり。また、週一回のデイケアで、日ごろの運動不足を補いたい。

大久保利通の不動

大平 忠

昨今の内憂外患こもこも至るの情勢を見ると、幕末の頃の日本、そして一人の政治家を思い出してならない。

幕末に維新三傑と言われる西郷隆盛、木戸孝允、大久保利通の存在は、日本にとって幸運であった。中でも、幕府の打倒から新政府の樹立、近代化の方向性の確立まで、終始中心において、その施策と行動に誤りがなかったのは大久保利通であった。

ところで、稀有の政治家大久保の真骨頂は、何だったのだろうか。修羅場を共にくぐり抜けてきた岩倉具視はこう言う。

「大久保は、才なく史記にも暗い。ただし、ことに臨んでは不動であった」。岩倉の言う「不動」とはどういう意味か。

まず文久二年（一八六二年）以来、島津久光と共に公

武合体のため力を尽くす。だが、その限界を覚り、幕府を外した公議政体構想へと向かう。さらに幕府打倒が必至と考えは移り、それも平和的手段から武力での打倒へと転換していく。大久保の政略は不動ではない。次々に変容していく。その政略についても、池辺三山曰く「自分独りで考えた主義方針というものは見当たらない……最善のものを深思熟慮の上でこれを執って……」

また、行動を共にするものも代っていく。自分を登用してくれた島津久光とも訣別し、朝廷を見限り、自らの母体の士族階層を切り、先輩であり盟友の西郷とも対決した。

そこで、大久保の「不動」とは何かを考える。それを支える軸、例えば回る独楽の軸ではないか。

「西欧列強の歯牙に対抗し、自立した独立国家を築く」。この国家像こそが大久保の軸、決してぶれない軸だったのではないだろうか。軸がぶれないために、判断も牙え施策の優先に誤りがなく的確となる。熟考の末、瞬時に決断し、決断するや全力をあげて実行した。実行に当たっては、思想、主義主張、人の情、名利を超越して命

を賭けた。獅子は鼠一匹捕まえるのに全力を尽くすやり方である。政策の一つ一つに力が籠っている。

政治の岐路に立つ決定的瞬間において、大久保は断固として踏ん張り動かなかった。慶応三年（一八六七年）十二月九日王政復古クーデターの夜の「小御所会議」、翌年一月の「鳥羽伏見の戦い」、ここでは岩倉具視、西郷隆盛と共になりふり構わず劣勢を跳ね返して初志貫徹した。

明治六年（一八七三年）十月の「征韓論政変」では、ついに西郷との対決を決意し、二人の息子に遺書を残す。「国の進むべき道を決めるにつき、自分の信ずることを父は行う。……変が起こるやも知れぬが、その前に父の思いを知らせておく」

西郷は、両雄の対決に敗れた翌日、大久保を訪ねて、「おいは帰る、後の事はよか頼む」と言ったそうである。西郷は、考えが違っても、国を背負うのは大久保しかないなと認めていたのである。この時の大久保の踏ん張りによって、朝鮮との戦い、それから予想される列強からの干渉も無事避け得た。

大久保は、本来漸進の人である。西郷隆盛、木戸孝允

と異なり、理想にこだわるところが少ない。「一利を興すは一害を除くに如かず」の人であり、徹底したりアリストとも言えよう。自分の足らざることを自覚し、埋める労も厭わなかった。久光と大久保、西郷と大久保、岩倉と大久保との連携、そして「逃げの小五郎」を追いかけた大久保だった。「版籍奉還」「廢藩置県」は、大久保と木戸との連携の結果の合作であり国のかたちを決めたのだった。人材の登用についても、薩摩藩にこだわることが少なく長州の伊藤博文、肥前の大隈重信を重用した。ときに、大久保は「有司専制」との批判を受けた。しかし、欧米視察から帰って表した「立憲政体に関する意見書」を読むと、立憲政治の必要なこと、君主と国民のあり方など、明らかに天皇機関説である。木戸が同時期に出した「憲法制定の建言書」と、内容はほぼ同じで、近代国家への見事な展望を持っていたことがわかる。

いま、日本は世界の中で存在感を失いつつある。望まれるのは、世界を俯瞰しての新しい国家像を持ち、強い意志と戦略を持った大久保の如き政治家であろう。

浅草演芸ホール

大森 海太

昔の会社のOB、OG有志、十数人による下町会は、折々集まって東京の下町あたりを散策したり、名所旧跡をたずねたりしている。今回（十月下旬）は浅草の寄席（演芸ホール）をトライしようということになった。

おりから浅草六区界隈はインバウンドの外国人観光客であふれかえっていたが、さすがに寄席には見当たらない。でも平日の昼席にもかかわらず客席は八割超の入り、なかには中年のオバサンのおひとり様もおられたが、けっこうとけこんでいる様子だ。

昼の部は十一時四〇分開演で四時半まで約五時間、二十人近い演者が入れかわり登場する。私は途中から入場したのだが、それでも落語、漫才、手品、コントなど、いろいろと楽しめる。

そんな中で春風亭柏枝という若手の噺家によるちょっときわどいネタがなげやら面白かったので、このさい（

紹介したい。

ある家庭でお父さんが部屋に息子を呼び出して、なにやら問い詰めている。

「お前もいい年だし、誰か結婚したいと思う相手はいないのか？」

息子はおもいながら、「おとつつあん、実は〇〇さんちのA子さんと結婚したいと……」

「なにっ、〇〇のA子、そ、それはいかん」

「なんでいけないの？ A子さんなら良い子だって、おとつつあんも言ってたじゃないか」

「む、む。お母さんには絶対に内緒だけど、実はな（声をひそめて）A子はオレの子供なんだ」

「ええっ。それじゃ僕と彼女は異母兄妹っていうこと？」

「そういうことなんだ。すまんけどほかに結婚したいと思う相手はいないのか？」

「わかりました。それじゃ△△さんちのB子さんならどうかと思うんだけど……」

「なにっ、△△のB子、それもいかん、それもいかん、

絶対にいかん」

「ええっ、どーして。なんでB子さんもいけないの？」

「む、む。お母さんには内緒だけど、実はB子もオレの子供なんだ」

「ええーっ。B子さんも異母兄妹ってこと。困っちゃうな」

「ほかにないのか？」

「それじゃあと一人、××さんちのC子さん、彼女ならいいでしょ」

「××のC子？ うーむ、そいつもダメだ」

「ええーっ、C子さんも異母兄妹ってこと？」

「まあ、そういうことだ」

「ひどいや、ひどいや。それじゃ僕はいったい誰と結婚すればいいんだよ」

そこへ母親が買い物から帰ってきた。

憤懣やるかたない息子は、お母さんの部屋に行つて洗
いざらいをぶちまけた。

それを聞いてお母さんはビックリ仰天、目の玉をつり

あげて怒り狂う。

「まあああ。お父さんが他所^{よそ}で三人も子供を作つていたなんて。知らなかった。あの人だけはと信じていたのに、絶対に許せない。う、う、うーっ」

お母さんは悔し涙にくれていたが、ふと思いなおしたように息子に向かつて、

「でもね、心配しなくたっていいんだよ。お前はその三人の誰とでも結婚してかまわないよ」

「だつて三人とも僕の妹なんだろう」

(声をひそめて)「それはね、お父さんには絶対内緒だけど、お前はお父さんの子じゃないんだよ」

場内は一瞬しーんとなった後、爆笑のうずとなる。柏
枝師匠は深々とお辞儀をして、すーつと楽屋に下がる
(この間^まがいいですね)。

それはともかく、この話、どなたか掌編小説のネタに
しませんか。

中世ヨーロッパの写本

松浦 純子

昨年の夏、中世の写本を集めた展示が国立西洋美術館で行なわれた。「写本」とも優雅なる中世の小宇宙」という魅力的なタイトルが付けられた展示だった。中世の写本のほとんどは時代と共に親冊子から切り離され、持ち主も転々とした零葉の形で私たちの目に入る。

小さい零葉は携帯可能なサイズ。横線を薄く引いてその間に文字を入れる。文字のサイズは5か6のポイントである。細い羽ペンでこのサイズの文字を五〇行以上独特の書体で書く。最初から終わりまで字が乱れることなく、あたかも活字で印刷したように書く。文字だけでなく装飾も作業が細かい。大事な文章の書き出しは最初の単語の一字目が目立つように大きく書かれている。例えば *saluum* (健康) がその単語だとすると、Sは4、5行分の大ききで書かれ、さらにその文字に鮮やかな色

で装飾が施されている。文字装飾の担当者は、文章に係る装飾を一字の中を考えながら描いている。途中で間違っただろうか？ ふと心配になる。

ミサの楽譜を書いたページもある。今の五線譜と違い、四線譜である。音符も今の様な楕円形ではなく長方形。ひとつひとつの四角の形や大きさが微妙に違っているとこからすると、スタンプではなさそう。決して手抜きはしていない！

目を見張るきれいな一般信徒用の時祷書もある。聖職者や修道士が執り行う定時の礼拝を定めた日課書もある。毎月の暦を書いたページは七日でひとかたまりになっているので、今の暦と同じサイクルである。七日のうち一日だけ何も書いてない日は休業日だったのだろう。

活版印刷機で作られた写本もあった。黒インクで印刷した後、数か所に赤や黄色を色付けしていた。活版印刷術が普及した後になっても獣皮紙に手書きで書いた写本もあり、やはり写本は人が書く方が味わいがある。

これらの文化的作業のほとんどは中世を通じて修道院

で行なわれていた。公用語のラテン語を理解できる修道院の内部だけが、特別な文化創造の場であった。修道士は「祈り、働け」のモットーから、一日数回の祈りや新しい農業技術の開発などの労働を行ない、さらに古典の保存のため写本に力を注いだ。従って写本は、聖書、教会の法令集、聖務日課、時祷書、ミサなど宗教関係の本を筆写するのが中心であった。写本を行う修道士である写字生は仔牛や羊などの皮革を加工して作られた獣皮紙に、手書きで文章を筆写したので修道院は唯一の出版工房としても機能した。しかし、時代が経つと、装飾は修道士以外の絵描きなどが担うようになり、また、有力者の依頼で作られるようになると世俗の出来事が主題になり、花や昆虫、小動物で装飾されることもあった。

私が今回の展示では是非見たかったのは、「ベリー公のいとも豪華なる時祷書」だったが、残念ながら見ることはできなかった。もうずいぶん昔のことだがこれを初めて本で見た時、あまりにきれいな色彩に目を奪われた。絵画の上部には黄道十二星座がコバルトブルーの中に描

かれており、農民の生活を描いた部分も空は鮮やかな青である。この青色の美しさは言葉で言い表せないくらいの衝撃だった。本物はどれほど美しいのだろう。旅行先の美術館や城などで写本の展示があると、つい探してみようが、やはりフランス以外では見られないのだろう。

この時祷書は一四一〇年代にベリー公ジャン一世がフランドルのランブル三兄弟に描かせた装飾写本である。時祷書とはキリスト教徒が用いる祈禱文、賛歌、暦などを記した日課書のことである。ジャンはフランス・ヴァロワ朝の王族で、祖父のフィリップ六世の時代に始まった英仏百年戦争の時代に生きた。彼は戦いに出陣する一方で、美術品のコレクションや芸術家の保護にも力を入れたと言われている。中世の農民は農奴という不自由身分で貧しいという印象が強いが、十五世紀初めは絵に描かれているように鉄製農具を使い、以前より余裕のある生活を送れるようになった。色鮮やかな服装を本当に着ていたのかは疑問だが、絵の対象となり得たのは農民の地位が向上した証拠だと思う。

イエス様のもとへ

「新井 良侑さんを偲んで」

清水 勝

新年会をはじめ会場設営の行事には、必ず新井さんは顔を出されていました。そして机運び等の力仕事を、何ら苦にせずニコニコしながらしておられました。新井さんのこの笑顔はみんなを和ませ、優しいお人柄で周りの雰囲気も温かなものにされていました。

新井さんに人間関係についてお話を伺った際に「出会った人すべてが恩人。感謝と敬愛の念が心の深いところから湧いてくる」と、おっしゃっていました。

『企業OBペンクラブ』についても、聖書を気兼ねなく話せる場と機会を提供してくれると感謝の念を述べておられています（『悠遊』28号）。

新井さんの大学院時代の恩師は「新井君と話をしていると、世の中に悪い人は一人もいないね」と語っておられます（『悠遊』26号）。

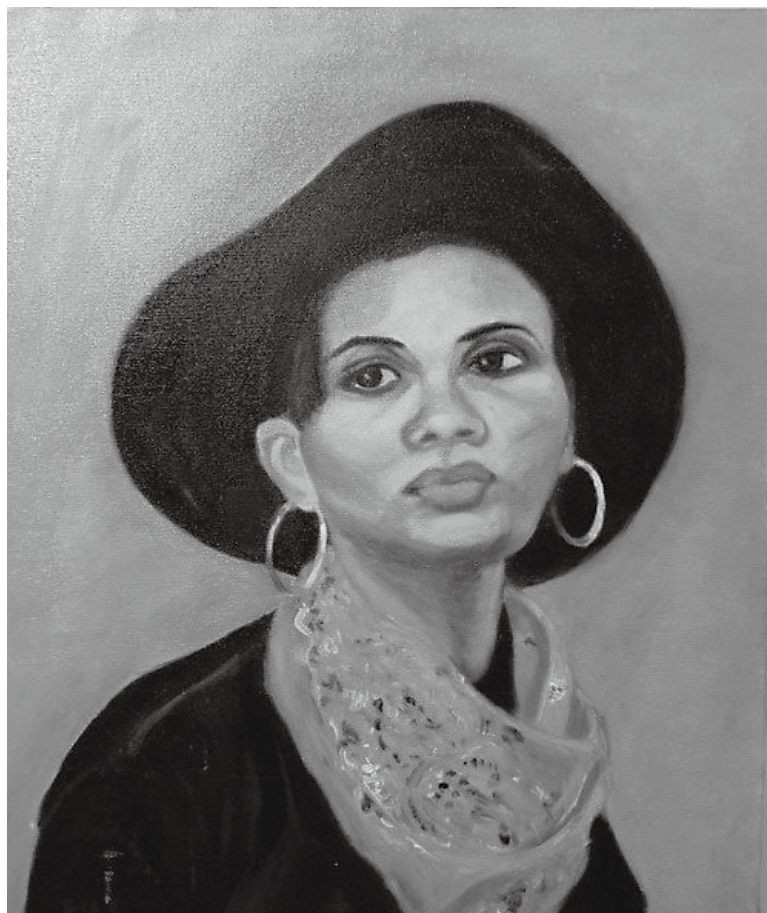
新井さんがクリスチャンになられたのは二十三歳の時だそうで、大学時代の後輩で恋人（後の奥様かな）がクリスチャンの集まりに参加すると聞き、変な新興宗教に引っかけたのではないかと心配になって、様子を探りに行ったのがきっかけだったそうです（『悠遊』24号）。

奥様とはいつも一緒に日曜礼拝に出掛けられ、常に聖書をお読みになっていたようです。『悠遊』のエッセイの末尾には聖書の言葉を書いておられます。

『企業OBペンクラブ』の活動では、新会員講演で「健康についての雑感」を薬学部出身ならではの話をされてきました。また、「サロン21」では、『薬害問題と治療の安全』という資料を提示され、議論を主導されていました。専門分野については温厚な人柄の中に熱い思いを述べておられたのが印象的です。

奥様は七年前に一足先にイエス様のもとに行かれました。新井さんもその後を追い、今頃はお二人でイエス様の下でニコヤカなお顔で、周りの人と楽しくお話をされていることでしょう。益々お幸せに！

創作短編



油絵 福本 多佳子

『不在』

内藤 真理子

ピンポン

「お向かいの山口です。鍵が落ちていましたが、三上さんではないですか？」

杏子がインターホンに声を掛けると、ご主人がズボンのポケットを探りながら出てきた。

「そうです、そうです。車のキーも家の鍵も全部くっつけているのですよ。気が付かなかったな。いや、ありがとうございます。こりゃあ山口さんに足を向けて寝られませんな」

「よかったですわ」

「いや、ありがとうございます。どこにありました？」

「ゴミの集積場です。少し前にそこで三上さんをお見かけしたもので……」

「そうですか、これ、特注なのですよ」とご主人に何度も頭を下げられた。そういえば、ゴミを出しに来たの

もこのご主人だった。奥さまはどうしたのだろうか？ どうして特注の鍵を作ったのだろうか？

杏子は、こんな時にパパが生きていたらどんなに良かったらうとつくづく思う。

山口家では、息子が生まれた時から、夫婦はお互いを「パパ、ママ」と呼んでいる。息子はとくにそう呼ばなくなったのに……。

杏子の家がこの郊外都市に越して来たのはパパと結婚して間もなくだったので、住み始めてからかれこれ五十年位の月日が経っている。

ここはバブルの時期に大手の電鉄会社が【充実の街】というネーミングで、町ごと設計をして造った、いわゆるベッドタウンで、ほとんどの人が東京に通勤していた。パパもここから一時間弱はかかる都心の広告代理店に定年退職まで通っていた。退職してからは、この【充実の街】を散歩したり、庭に花を植えたり、旅行を楽しんだりと、二人で機嫌よく過ごしていたが、パパは癌になり一年前に死んでしまった。

パパは優しい人だったが、お喋りだった。無口の杏子を相手に一日中喋っていた。一人でテレビを見ている時でさえ、台所にいる杏子に話しかける。

「ママ、この女優は何ていう名前？」とか、

「ママ、今度の旅行は京都にしないか？ ほら、保津川下り、涼しそうだよ、ちょっと見てごらんよ」などしゃべり続け、あげくに台所に向かって白々しく「ママ、綺麗だよ」と付け足す。そんな時は「はい、はい」と受け流すことにしていた。

杏子は元来、アクティブな性格ではなく、ただ几帳面なので、趣味は徹底的に掃除をすることと、寝る前に推理小説を読むことぐらいだった。まあ、聞き役の人生は、性に合っていたと言える。

だが、誰にも言えないが、癌の闘病の間中「ママ、ママ」と、少しも離れたがらない彼に辟易していたので、正直、亡くなった時には重い荷物をやっとな下した気分だった。

もつとも、パパは私にばかりではなく、誰に対してもお喋りだった。ドライブで景勝地に行けば、そこに居合わせた夫婦連れの奥さんと話を弾ませる。そして仕入れ

てきた話を聞かせてくれる。

もちろん近所の奥さんとも気さくに話す。

パパが生きていたら三上さんの奥さんのことも情報収集を怠らなかつたに違いない。

それにしてもどうしたのだろう、三上さんの奥さん。

このゴミの集積場は【充実の街】の一区画の杏子の家も含めて十二軒がゴミを出すことになっている。

長い年月には、ここで奥さん同士、よくお喋りをしたものだった。

【充実の街】はかなり大きくて全体で三百軒位の家がある。それがみな、杏子たちが越して来たのと同じような時期に、同じように働き盛りの家族で、それぞれが生活をしてきた。

区画の同じ十二軒は、身内のことから子供達のこと、それに加えて、この町の色々な情報を分かち合ったものだった。

銀行員が多く住んでいる区画の通りを、銀行通りと呼んでみたり、浮いた噂が立った家が何軒かあると、不

倫通り」と名付け、面白おかしく話題にして盛り上がったこともあった。だが、だんだん年を取り、そんな話にも興味がなくなり、今では会っても挨拶をするぐらい。

現在はゴミ集積場の十二軒のうち、二軒はいなくなり更地になっている。三上さんの右隣の家は、子供が独立したのを機に夫婦で老人ホームに入ったそうだ。

杏子の右隣の家は悲惨だった。

もう三年くらい前になるが、早朝のこと、救急車が来て、その後にパトカーが来た。台所の窓から見ていた杏子は、二階でまだ寝ているパパを起こし、

「お隣の小松さんの家に救急車とパトカーが来ているけど……」と言うと、パパはすぐに跳ね起きて北側の窓から通りを見下ろし、あわてて着替えをして外に飛び出した。そして、小松さんの、もう嫁に行った娘さんに事情を聞いて帰って来た。

「ママ、小松さんの奥さん、入浴中に脳溢血を起こして死んでたんだって」

「美香ちゃんに聞いたの？」と、娘さんの名前を言うと、「うん、昨日の晩、九時過ぎに電話をしても出ないから、

今朝、又、電話をしたのだけど、出ないので来てみたら、お風呂で死んでいたんだそうだよ、隣の旦那さんは早く亡くなったのだよね」

「うん、でも早いと言っても美香ちゃんが結婚をしてからだだったから、十年前くらいだったかしらね」

「じゃあ、奥さんはすっぽんぼんで昇天してしまったのだ」

「いやだわパパ、奥さんと言ってもお婆さんじゃない、私も死ぬときはそのパターンがいいわ」

「えーっ、服ぐらいは着た方が良いのじゃないかー」

そんなことを思い出していたら、ますます三上さんの奥さんのことが気になりました。いつから見えていないのだろうか。

「あー、パパが生きていたら……」そんなことを考えながら庭木の水やりをしたりして、ふとお向かいを見たら。

「あら、三上さんの家、車がないわ。」

さっき鍵を届けた後から、ご主人は出かけたのかし

ら？ それとも、奥さまが一人で車を運転して出かけているのかしら？

気が付いたら杏子はフラフラッと門を出て、道路を渡って三上さんの家の方を見ながら歩いている。通り過ぎぎわに、ちょうど窓の前に立って外を見ていたらしいご主人と目が合ってしまった。杏子は気が付かないふりをして行き過ぎようと、歩きました。

「山口さん、どうかされたのですか？」

杏子の背中に三上さんのご主人の声がした。

三上さんはガラス窓を開けて急いで出て来たらしい。

困った！ 杏子とはとっさに首に巻いたタオルを取って丸めて両手で持った。

「山口さん、何かご用でしたか？」と、ご主人。

「いえ、あの、洗濯物が飛んだので取りに来ましたの」

「あーそうですか、で、回収できましたか？」

「はい」

杏子はそう応えて、ぐるぐるに丸めたタオルを少し持ち上げ、慌ててお辞儀をして道路を渡った。

私はどうかしている！ 三上さんの奥さんが居ても居

なくても、関係ないじゃない！ 何故気になるのだろう。

我ながら、バツカみたい！

そう思っていると、後ろから「ブーブブー」と、クラクションの音がした。

振り返ると、一人息子の国丸が会社の名前のロゴが入った車の運転席で笑っている。驚いて車に近づくと、ウインドーを開けた国丸がニコニコ笑いながら

「おかん、ちゃんと生きてる？」

「あら国丸、どうしたの、何しに来たの？」

杏子たち夫婦が「パパ、ママ」と言い合っているのに、国丸は従弟たちの影響もあって両親のことを「おとん、おかん」と呼ぶ。

「やあ、国丸君、しばらく見ないうちにすっかり大人になってしまったんだね」

三上さんも踵を返して話に加わった。

「ああ、三上さんのおじさん、こんにちは、いやだなー、もう五十だよ、僕」

「えー、五十か、スポーツ用品のメーカーに勤めているの」と車に書いてあるロゴを見ながら「こっちが年を

取るのも無理もないね」と言った。

「あ、おばさん、お元気ですか？」と、国丸。

「ああ、元気も元気、世界遺産巡りに目覚めて一人であつちこつちに旅行しているよ」

「おじさんは行かないの？」

「そんな元気、ないよ、おじさんは……」

思わぬところで奥さんの情報がわかったのだ。

「国丸、何か用事でもあるの」と、杏子が言うと、

「そりゃあないだろう、一人息子としては、おかんが、ちゃんと生きているか、心配して寄つたのに！」

「あらそうなの、私は十年や二十年はほっておいても大丈夫よ。心配なんかしないでよ」

「素直じゃないね、おかんは！」

「そうですね、山口さんは薄情だな、国丸君が心配しているのに……」

三上さんも茶々を入れる。

「はい……」杏子は下を向いて返事をした。

「おばさんは何処に行かれたのですか？ いつ帰られるのですか？」

杏子の知りたいことを、国丸はすげすけと質問する。

「おばさんはね、今、韓国に行っているのだよ。成田まで車で行って駐車場に預けて……慣れたもんだよ」

「一人で？ 凄いな、おばさんは！」

「そうだろう、おじさん一人、留守番だからって、家の鍵を最新式の変えたりして……。それなのにおじさんは鍵を落としちゃって、国丸君のお母さんに届けてもらったのだよ。先ほどはとも……」

「いいえ、どうも」

杏子は、あたふたと返事をしながら、あまりにパパに似てきた息子に辟易としている。

ん？ 本当にそうだろうか。杏子が気になっていたことの総てが解決したのに？

「パパ、何で私を置いて行ってしまったの！」

気が付けば、パパの不在に恨み言を言っている杏子だった。

了

シニア五姉妹、父の故郷へ急ぎ旅

福本 多佳子

令和六年の秋、シニア五姉妹が十三年ぶりに父親の実家を訪問した。友人が「皆、年取ると故郷を訪れるのね」と言った。そう意識して訪問したわけではない。（でも、そんなものかも）と肯定した。思えば九年前に姉妹四人が祖母の故郷、長野県飯田市にある菩提寺訪問を計画、祖父母の位牌を納め、墓参りと祖父の実家を訪問して以来、姉妹での旅行が増えたと感じている。

姉妹の父親は夏の家族旅行・週末の近郊ドライブ、スポーツへとまめに子供達を連れ出した。けれど大人になるにつれ、皆、自分の親友や気心合う友人との旅行、テニス、スキー仲間との旅行で追われ、家族旅行は減った。姉妹もそれぞれ違う学校、仕事、結婚へと進み、交流が減る。それが年を経て、両親亡き後、協力し合うことが増え、共有する時間の中で若い頃は知らずにいた互いの一面を知る。共通の思い出・価値観が多いことを発見する。

幸運なことに全員が健康で旅行するだけの時間的、経済的余裕もある。配偶者や子供という家族から独立した個人の時間を持てるようになった。これらが姉妹での旅行が増えた大きな要因であろう。

五女の由貴は若い頃は海外旅行で有給休暇を使い果たし、国内旅行は年取ってのお楽しみと考えていた。けれど高齢者となった昨今、日本はどこへ行っても当時想像していたより綺麗になり楽しい場所になっている。まだ長距離ドライブを楽しむ体力と気力もある。時々姉妹三人での旅行を楽しんでいるが、五人全員の参加というのは珍しい。今回はたまたま、父の実家を継いだ従兄が十二月に家業をたたみ「これからは悠々自適の生活」と言ったことから、長女、典子が「何か貢献したいから、姉妹揃って訪ねましょう」と誘ってきたのだ。久しぶりの典子の提案に「今忙しくて行けない」と返答した由貴も、全員が参加と聞き「この歳で姉妹全員が元気で旅に出かける機会なんて、そうある事ではない」と思い直し、参加と決めた。のんびりやの典子はゆったりとした旅程

を考え、ホテル予約から、和歌山県に近い父の故郷である五條市への列車のスケジュールまで従兄に聞いている。最近の典子はメールもしなくなり電話連絡のみ。「五人が出席というのに、電話連絡だけではやってられない」と四人が感じ始めていた。

「旅程がゆったりし過ぎ」と文句を言い始めた姉妹の中でも、常にスケジュールいっぱいの旅をしている次女の朋子と由貴は、京都でレンタカーを借りるのがベストと思っていたが、張り切っている典子の気持ちを尊重し、できる限り任せようとしていた。しかし姪がLINEで四姉妹に「ママの予定は一体どうなっているの？」と一斉メールを送ってきた。

そこで「待ってました」とばかりに由貴は典子に電話をかけ「混雑の京都でわざわざランチなんかしてないで五条に直行しましょう。京都でレンタカーを借りれば前から行きたいと言っていた十津川村観光も楽よ」と長女に提案したが、「バスでのんびり旅するのが良いんじゃない」。誰もがそれだけの日数、家を空けられるわけではない。せっかちな朋子と由貴は希望の場所に行き、

用事が済み次第に帰京と考えている。そこで二人は皆が発つ前夜の夜行バスで向かうと決めた。ネットには関東バスが二階建の北欧スカニア製で運行とあった。残念ながら二人の出発日は奈良交通の夜行バスになったが、カーテンで仕切られた三列リクライニングシートのバスは出発と同時に暗くなり、静寂に包まれ人の姿は見えない。熟睡することが出来た。

この二人が高速バスに乗るようになったのは十年以上前、奈良に住む従弟が叔父の生前葬儀と称して食事会を企画、親族を招待した。その時、東京在住の従兄に「ベストの行き方は？」と聞くと「実家に帰るには夜行バスが一番。新幹線は使わない」と勧めてくれた。それを機に二人は、東京から日本各地への高速バスネットワークがいかに充実しているかを知った。列車と違い、乗車したら寝ている間に目的地に到着する。早速、奈良交通の夜行バスで京都経由奈良へと向かった。他の姉たちは新幹線。車内では、京都在住の外人客と思われる男性たちが枕をバッグから取り出し、ゆつたりと眠り始めた。帰りは従兄と一緒に五條から夜行バスで帰京という選択だ。

どこでも眠れるという自信がある二人はそれ以降、昼間の高速バスも利用し始めた。列車だと駅に止まるたびに人の動きを感じるせいか、眠ることはほぼ無い。高速バス内で安心して眠りに陥る二人に自家用車でも眠る事が無い神経質な姉は呆れている。子供の頃の五条駅への行き方は夜行寝台列車「大和」時に蒸気機関車の煤の匂いが気になった。現在も新幹線で京都に着いても、乗り継ぎなしで五条駅へ行くのは難しい。

五條バスターミナルには従兄が待つていた。家へ向かうと、トースト、コーヒー、ハムエッグといった洋風朝食以外に父の好物だった茶粥も用意されていた。そこへ山林経営をしている本家の昭夫が迎えに来て、念願の十津川観光へと向かった。以前から一度、山の中にある本家の古い家を見においでと誘われていた。朋子は「二十年ほど前に行ったことがある。あの景色をもう一度眺めたい」と言う。彼の車で五條市内を出発、国道を走りトンネルを抜けた。一か月前に訪れた房総の海沿いの古いトンネルと違い、明るく道路幅もゆったりしている。「大

阪から週末に観光客が楽に来られるよう新しい道路も建設中。あの村役場が火事になって古い書類が消失し戸籍謄本も古い時代まで遡れない」と言っていた。

熊野川に沿って十津川村へと走り、谷瀬の吊り橋、昂の郷、野猿、川沿いの温泉に立ち寄り、彼の旧家へと進んだ。国道一六八号から山道（昔と違い、ほぼ舗装されている）へ入ると対向車も後続車も見ること無く高い木々の間をドライブ。山の斜面に小集落が見えてきた。

「子供の頃はこの道を父親と歩いて五條へ向かった。町家に泊まるのがとても楽しみだった」。そう言う彼も若い頃に家族で五條市内に移住、山の作業を手伝ってくれた男性陣を車に乗せて山に通勤している。

山道のカーブした先に「父方の曾祖父だか？」が出たという檜皮葺屋根の古民家が現れた。途中の道沿いには廃屋となった寺。まさに山と谷の村、地名からして「谷」の字がついている。本家の古い家の周囲で人が住んでいる家は一軒のみ。彼の家からの眺望はまさに山また山。兩戸は全て閉じてあるが竈のある台所に入った。家の横の山際に代々の墓があり、彼の子供時代に祖父が亡くな

った時は墓から一段下がった場所で焼いたとのこと。車を持たない時代にはそれが最も適切な方法だったのだろう。

中庭から谷を挟んで正面の山と向かい合った。「クマが歩いているのを見る。猿はよくいるよ。鹿や猪も」と言う。昔と違い、こんな山奥でも道が簡易舗装されていて埃っぽさが無く、一見ただけでは無人の家も廃屋に見えない。山の中といっても暗いわけではなく、谷を挟んだ正面の山は明るい空と光に満ち溢れていた。小学教育は派遣教師により受けたとか。山の中の彼らの作業場の休憩所へも立ち寄った。「山に百合を沢山植えたが、猪に百合根を食べられ全滅、桜の木も千本植えてみたが多々がやられた」。広く見通しの良い野原から周囲の山々の頂きが輪を描くように連なっている。高野山はあの方向と指さしてくれた。そこから近い道沿いの美しい滝を見上げながら、観光客が誰もいないことを不思議と感じる由貴だった。

十津川村観光はこの日だけ、しかも夕方到着の姉たちと従兄夫妻とその娘夫婦に本家夫妻との夜の食事会があ

る。主要ポイントを車で回るだけで市中に戻った。前回も高野山滞在は実現したが、新宮までの南下は延期したままだ。「熊野古道歩きと熊野本宮大社、速玉大社、熊野那智大社をめぐる旅は何時になったら実現できるの？途中で川湯温泉にも泊まってみたい」とゆったり旅行を夢見る由貴だった。

京都へは数えきれないほど何回も訪れながら、奈良は常に遠い場所と感じていた。中学生の時に由貴が見学した奈良の観光名所巡り、それぞれが距離的に離れていて、電車の待ち時間が長く、時間潰しに従兄についてパチンコ体験をした。食べ物も美味いとは思えなかった。

高校の修学旅行では奈良の主要観光スポットを効率よく見学。さらに斑鳩の里、石舞台、飛鳥寺の大仏そして最後に京都へ向かう途中のバスで立ち寄った浄瑠璃寺を思い出す。奈良はまさに京都以前の文化圏と思ったのは飛鳥寺の大仏のお顔だった。その後の日本の大仏とは違う、大陸、インドの影響を受けたお顔だと感じて印象深かった。

長女・次女には五條での疎開時の思い出がある。二姉妹が帰京した翌朝の散歩。「この家の先には……、あの人は……」という思い出話をしている。そうした記憶を辿るのも二人の今回の旅の目的の一つ。前回の訪問時、古い街並みの一部は残っていたが、煤けた街並みと思つた新町地区は古い家屋が綺麗になり、素敵な旧市街に変わっていた。まるでお化粧した若い女性のように思った。

その日の午後、以前から希望の當麻寺へ立ち寄ることが出来た。ゆっくり見学できたわけではないが、たまたまお庭をのぞいた當麻寺の塔頭で「私の書と絵をご覧になりませんか？」というお誘いを受け、ゆっくりお話を伺ったことが、旅の良い思い出になった。その後、暗くなつていく奈良の街を従兄たちが車を飛ばし、竹藪を通り過ぎ、石舞台までドライブ。残念ながら昔と違い、塀に囲まれ門は既になつてしまっていた。再訪出来ただけで嬉しかった。五條市から當麻寺までの道走っている間も歴史上有名な地名が沢山現れる。姉妹は車から歴史上の風景、世界を眺めている気分になつた。

従兄が、五條市も年々人口が減っているのでこの先も市として存続するのかと危惧していた。確かに市の統計によると杞憂でないことがわかる。令和六年十二月末の人口は二六、九〇〇人で十年前に比べると十八%以上の減少だ。年齢別で見ると六五歳以上が高い。高齢者人口が高いとはいえ、最近は四人揃うのが難しく麻雀をすることが無くなつたとぼやいていた。

従兄の家には、いくつもの洋間の他に次の間付きの広い和室に大きな仏壇や炉が切つてある。本家の当主の家も同様で山の家から大きな仏壇が持ち込まれ、修理が施され、見上げてしまう立派な物だつた。朝、抹茶を招待され、立派な仏壇の前に順々に座り手を合わせた。信州でも気がついたが、地方の和室には床の間と違棚が並び、良い木材が使われ、毅然とした存在感を感じた。父は長男だったが、東京での人生を選択、私たち五姉妹はお盆の行事がどんなものが知らずに育ち、家に仏壇というものは存在しなかつた。まだまだ地方には日本の文化や慣習が残っていると実感した。

松江義士伝

大塚 喜子

城から下がって幾つもの門を通り抜け、空を仰いだ。

堀端の二〇〇本余りのしだれ桜の蕾は、そろそろ咲き始めるだろう。

大矢喜八郎は、松江藩筆頭家老大塚外記から、御用部屋で「上意討ち」を言い渡された。この御用部屋は、初代松江藩主が、祖父徳川家康公から賜って、江戸城から移築したものである。喜八郎が入室したのはこの日が始めてであった。

「これは名譽のお役だ。討手に任せられるは武道の譽れに他ならない」

外記は扇を抜き、肥満した躰をせわしく扇いだ。家老であったも「上意討ち」を命じるのは平静でいられないようだ……。

「受け賜りましたが、西川数馬が討たれる理由をお教えいただきたい」

数馬と喜八郎は幼いころから藩校で学問を競い、白石道場で竹刀を打ち合った仲である。

「それは言えぬ」。外記は再びせわしく扇を動かし、目の前に飛んできた蜘蛛を払った。蜘蛛は外記の頭上に止まった。

「西川と大矢殿は、白石道場の双壁だったそうだな。殿は御存じであったぞ。流派はなんであったかのう？」

「無双直伝横田流にございます」。蜘蛛を目で追いながら、扇を帯の中に戻すと、畏まっている喜八郎に

「話はこれまでだ。しくじるなよ。この度の上意討ちを果たせば、加増してとらせるとの仰であった」と付け加えた。

喜八郎が屋敷に帰ると

「お帰りなさいませ」。父の代からいる下僕の庄助が、気がかりそうな顔で主人を出迎えた。この度の筆頭家老の緊急な呼び出しが、平時は平穩なこの家に波紋を広げている。喜八郎は改めてそう思った。父の声を聞きつけた七歳になる娘の喜代が

「お帰りなさいませ」。両手で紙風船を抱いて走り寄っ

て来た。その後から母の登志子が静かな足取りで喜八郎を出迎えて

「ご家老様の御用はいかがでしたか？」

「それは、後ほど話します」と答えて風船ごと喜代を抱きあげた。紙から漏れる乾いた音に慌てる何気ない動作が、子を産んで間なくして死んだ妻に似てきた。

喜八郎は部屋に籠り、祖父が手に入れた古刀の手入れを始めた。刀身に丁子油を塗って鞘に収めると、母が入ってきて、喜八郎の前に茶をおいた。喜八郎が

「お役目を果たせば御加増があるそうです」と言う

「祖父の時に一度、そなたの父の時に二度、そのようなことが有りました。最初は父上も首尾よくいきました。御加増もありましたが、二度目のお役目は、返り討ちに合いました」

父の喜一郎が不慮の死を遂げたことは知っていたが、返り討ちだったとは聞いていなかった。つづいて母は

「先に御加増いただいた三〇石も召し上げられました。淡々とした口ぶりに悔しさが滲んでいる。

「して、この度の相手は誰なのですか」

「西川数馬でございます。期限は十日後迄に。しかも、上意打ちの理由は教えてもらえませんでした」

「理由を教えないのは何時ものことです。でも、今日から十日の後までに討てとは、如何にも緊急で御座いますね」

「殿は五月に江戸へご出立されますから……」。敢えてあつさりと答えた。余計なことを考えたくなかった。己は数馬を斬らねばならないのだ。

「数馬殿は一ヶ月前に嫁をとられました。大層美しい方だそうですよ。亀嵩のたたら鉾の頭の娘だと、郷の兄嫁から聞きました。それも数馬殿の男ぶりを見初めた娘の方から望んだご縁だそうです」

仲間内の噂で、数馬が嫁を貰ったことは知っていたが、母が今言ったことは知らなかった。ここ八年間は顔を合わせても、挨拶をする以外は言葉をかわしていなかった。

藩主は四十歳になる。江戸表に正室と嫡男がいる。側室は国元に四人いた。数馬は見なくてもいいものを見、

言わなくてもいい事を言ったのかもしれない。何はともあれ、自分は上意討ちを命じられたのだ。数馬を斬らねばならない。

喜八郎は次の日から、握り飯を持って裏山に行き、劍の工夫をした。

先ず土の上に立ち、刀を頭上に抜きあげ、瞬時の速さで真つ向に振り下ろした。四半刻、同じ動きを繰り返した。これは無双直伝横田流立ち技【暇乞い】の奥義(壱)である。相手に別れを告げる時に使う技である。

汗を拭うと、今度は土の上に正座して、垂直に刀を抜きあげて、瞬時に真向に切り下げ、横振りして鞘に納めた。これは【暇乞い】の奥義(弐)である。【暇乞い】の奥義(参)は目を閉じ、膝の前に指先を衝き、風の動きを捉え、風と共に刀を抜き、草を切り落とすのだ。

三つの奥義の工夫をした後で、喜八郎は刀を抜きあげては、振り下ろす事を一〇〇回やった。全て寸分の狂いなく、地面の同じところに刃先は留まった。

こうして喜八郎は劍の工夫を五日間続けたが、いくら稽古を重ねても身が震えた。

上意打ちをする者は、斬る前に「上意」と言葉を発する作法がある。発した瞬間に数馬も刀を抜きあげるだろう。二人が同時に抜き放った刀が頭上に振り下ろされれば、相打ちになって、共に命を落とす。二人は互いに手の内を知り尽くしている。寝床について天井を見上げると、数馬が刀を振りかぶる姿が浮かんでは消えた。

「ずいぶんやつれましたね。この三日ばかり寝ていませんね」。朝餉を下げながら母が言った。

「父上はやつれませんでしたか」

「ええ、やはり眠れずひどくお瘦せになりました」

「討たれる者が誰かあかさされましたか」。聞かすにおれなかつた。

「江戸の上屋敷の書院番だということでした」

「父上は江戸へ出向かれてお役目を果たされたのですか」

「書院番も妻を娶ったばかりだったということでした」

「それはたしかなことですか」。立ち止まって、母に背を向けたまま、念を押すように聞いた。

「先代のお殿様はいろいろお噂がありましたからね」

「どんなお噂ですか」

「七人の側室に十六人もお子をお産ませになりました。その全てを嫁入り、婿入りさせるのに重責がたは苦勞なさっていましたよ。庄助が詳しく知っているでしょう」

庄助に確かめると、その書院番の妻は、江戸でそのまま殿に召し抱えられ、松江に戻ることなく二十四歳で病んで死んだという。

貝殻町にある数馬の家の式台の前で案内を乞うと、亭主自らが足音を立てて出てきた。

「おう、喜八郎。中川の藩校で顔を合わせていた以来だな。あれから八年になるぞ」。喜びを表しながら

「これがそれがしの嫁のタミだ。どうだ、美人だろう。綺麗だろう！」。まるで茶人が自慢の茶碗を見せるように、数馬は嫁を手放して自慢した。

「俺の両親は子の年の疱瘡で相次いで死んだが、喜八郎の両親は息災だろうな」

「父はあの年の次の年に亡くなった。母は元気だ。夕

ミ殿の郷は、それがしの母、登志子と同じ亀嵩であると聞きましたか？」

「はい、さようでございます。いいながら顔を赤らめた。この日以降、喜八郎は裏山へ行くのをやめ、部屋に籠って思考した。そして、数馬に書状を書く」と「明日の花見の誘いだ」と言つて庄助に届けさせた。

翌朝、弁当と、瓢箪を腰に確り結び付け、母にも書状を渡して外へ出た。

木次稲荷は城の北側を流れる剣先川の土手にある桜の名所である。町人と武士の花見の場所は自ずと別れる。

町人は数が多く、芸者衆や太鼓持ちに三味線を弾かせて陽気に騒いでいる。一方で侍方は夫々が静かに酒を酌み交わしている。喜八郎はその中を川上に向かった。数馬は鳥居の前で待っていた。

「子供のころ二人でこの川で遊んだな！ 河童の川流れと滝滑り！」。二人は声を出して笑い合った。

この流れの先に「鬼の舌震い」という滝がある。夏になると平らな大岩に子供たちが誘い合つてやって来る。

何十回も滑っていると尻が赤くなる。禪が解けて川から出られずにいた喜八郎に数馬は、下流で待つように目合図すると、誰にも知られないように脇差と着物を持って来た。

「あの時は本当に助かったぞ」。数馬の杯に酒を注ぎながら、喜八郎はしみじみとした口調で言った。二人が緋毛氈を敷いたのは、川の淵の桜の老木の下で、武士たちの近く、町人たちからは少し離れていた。

「まだそんな子供の頃のことを言っているのか」

「……いや、あれで俺は大恥をかかずに済んだ。今度は俺がお前を助ける番だ」。数馬の杯に酒をそそいだ。

「なんだ。どういう意味だ」

喜八郎はその問いには答えず、頭上の桜を見あげた。

重なり合って、たわわに咲いた花は、微かな風にも、舞い散った。

「数馬、貴様は散るには惜しい桜だ」。花びらを杯に受けながら喜八郎は言った。俯いて重箱をつついていた数馬が不審げに顔を上げた。

「喜八郎、俺を斬るつもりか」。そういつた時には既に

数馬は右横にある刀を左に移し、片膝を立てていた。抜き打ちが出来る構えである。

「貴様の妻は美しすぎたようだ」

「どういふことだ」。数馬が聞いた。

「殿は江戸おもても同じことをなさって、婚礼を挙げたばかりの家臣が、上意打ちに合つて妻を召し上げられた」

「なるほど」。全てを悟つた数馬に喜八郎は顔を寄せた。

その間も、桜は頭上に絶え間なく降つた。喜八郎が再び数馬の盃に酒を注ぐと、数馬は

「貴様、それでも友か」。盃を叩き鯉口を切つた。これを見届けた喜八郎は、ことさら声を上げて空に向けて。

「西川数馬、上意である」

上意という言葉聞いて、周りの侍たちは総立ちになった。

二人は刀の鞘に手をおくと、緋毛氈を蹴つて無言のまま摺り足で川の傍に寄つた。町人たちも三味線の音を止めた。聞こえるのは川の瀬音だけである。

喜八郎が無言で刀を振り上げると、間髪入れず、数馬

も刀を抜いた。鋭い金属音がして、二刀は夫々真ん中から折れた。数馬は左手で傷を負った肩を押さえて自ら川の流れに倒れ込んだ。侍たちが川の傍に駆け寄った時には、数馬は既に一度水底に沈んで仰向けになって浮きあがって下流へ流されていくところだった。侍たちは喜八郎を取り巻き、口々に

「お見事でござる。殿のご上意を立派に果たされました」と褒めそやした。

「今日見たことはそれがしが藩庁に証言致そう」。恰幅のいい中年侍が袴の脇を揃えながら言った。喜八郎は、血振りした刀を懐紙で拭いながら

「良しなにお願ひ致します」と言い、足早に立ち去った。

一方、数馬は、桜の花弁に覆われた川の流れの中で仰向けになり手足をユラユラ微動しながら、川下の中州に流れついた。

キセルを手に岸を眺めている船頭は庄助である。船頭の横に立っているのは母の登志子と娘の喜代、その横には数馬の新妻タミがいる。三人は脱藩する喜八郎と数馬

に中州で見送られて、これから亀嵩に向かおうとしていた。

葦をかき分け、数馬に遅れて中州に辿り着いた喜八郎に、庄助は大きく手を振り、竿で船底をトントンと突いた。舟は大川の先の外海に静かに動き出した。

京都に上って、「水戸学」を学びたい数馬と、山伝いに伯備をぬけて諸国の道場で剣技を極めたい喜八郎は肩を並べて舟を見送った。

了



昨年のクラブ活動より(1)

OBペン会員は散策好き、飲み会も大好き

田端地区の文学芸術散歩 6月

- 田端文士村記念館見学 ●文士・芸術村を偲ぶ散策
- 朝倉彫塑館見学 ●谷中銀座



田端文士村記念館にて
龍之介・犀星と記念撮影

文京区 根津から白山へ 散策 11月

根津駅⇒異人坂⇒お化け階段⇒根津神社⇒日本医大⇒
漱石旧居跡⇒海蔵寺⇒大圓寺⇒圓乗寺⇒白山神社



向丘の曹洞宗「大圓寺」にて
「ほうろく地蔵尊」で有名

白山下の炭火焼き鳥
「千鳥足」にて打ち上げ



活 動 報 告



油絵 塚田 實

何でも書こう会

私たちは会社や役所をリタイアすると大幅に時間の余裕ができて、現役時代には思いが及ばなかったことを考えてみたり、読書や旅行、その他さまざまな趣味に没頭したり、多様な世界に入り込むことが可能になります。

そのこと自体もたいへん楽しいことですが、それらをまとめて文章にしてみる、というのがさらに面白い作業なのです。

「何でも書こう会」はそのような発想から生まれた企業OBたちの集まりで、テーマは文字通り森羅万象。

最近の国際情勢や政治経済、科学技術など硬派のものから、歴史、文化、絵画、音楽、さらには宗教、法話、紀行文、食談、雅文、戯文、日々の身のまわりのことといったるまで、じつに様々です。

何を書いても自由、唯一のルールは八〇〇字プラスマインス一〇字ということで、月一回、寄せられた作品（エッセイ）をかわるがわる発表し、それに対して皆で喧々

囂々、楽しい半日を過ごすのです（終わったあとのアフターファイブもお楽しみ）。

それぞれの作品については内容もさることながら、自分の考えや気持ち、あるいはその場の雰囲気などを、いかに確に相手に伝えられるか（ひとりよがりになっていないか）などを考えていかなければなりません。

また同じことを述べるにしても言葉の使い方を工夫して、楽しい表現で、ときには遊び心をもって、個性豊かでウィットに富んだ作品に仕上げられるよう、皆で切磋琢磨していききたいと思っております。

新規メンバーの新鮮なセンスを期待しておりますので、今年もお知り合い、お友達、ご親族などをお誘いいただき、一人でも多くの方と文章を書く愉しみを共有していきたいと思えます。

どうぞよろしく願いたします。

（プロマネ 大森・志村・児玉・吉田）

掌編小説勉強会

昨年は第一〇一回からと、きりのいいスタートになりました。全部で十八作品の投稿がありました。そのなかの十一作品は公開サイトにアップされてます。青春時代を回顧した私小説やその色合いの濃い作品が多く見られました。また、話題になった闇サイト、金をだまし取ろうとする偽メールを使ったフィッシング詐欺をテーマとした作品、中年の独身の息子や娘を抱えてやきもきしている老夫婦を描いた作品もありました。そのうちのいくつかを簡単に紹介します。

『ペンフレンド』 中村 アキヤ

大学に入って高校時代の同級生と北海道旅行を夏休みに実行。旅行中、宿で東京から来ていた女子大生のグループと偶然知り合った。仲間の一人が差し出した名刺で始まった集団交際。親しくなったためぐみとあきは付き合いを始める。学業の忙しいあきらと一足先に社会に出ためぐみ。卒業旅行の冬山で遭難しかけたあきはプロポーズを決意。(前年度からのシリーズもので六編完結)

『人形劇団 細川』 今日 あした

見合い結婚が決まった主人公。婚約中に人形劇団の募集に応募して団員となった。とあることで団員の仲間と婚約者の実家を訪れる。長髪で汚い身なりの団員が婚約者の父親の目にとまり詰問される。まさか、それが婚約解消の原因になるうとは。その頃を振り返って「わたしの人生はすべて私が作ってきたの」と回顧。

『偽メール』 小道 周帆

退屈な老人のもとに通の偽メール。興味津々で探ると実在の若い女性の住所を騙ったものだ。犯人は女性の大学のクラスメイト。フィッシング詐欺の手口が事細かく書かれる。勧善懲悪、犯人はあつげなく捕まる。

『代理見合い』 とんだ 玉三郎

一人娘と同居する夫婦。娘はアパレル会社の店長で忙しく結婚は眼中にない。やきもきする母親は独身の息子、娘を持つ親同士の見合いに参加。四十手前の女性の見合い結婚の現実を知る。娘は仕事に生きることにする。

作品は、URL(<http://www.obpen.com/novel/works/>)から閲覧可能。(プロマネ 兎玉・内藤)

サロン21

昨年は、世界激動の年でした。大量の移民の流入とインフレなどに耐えきれなくなった欧州諸国では、既存の政党を信頼できなくなった国民の間で、ナシヨナリズム政党への支持が急拡大し、米国でもトランプ氏が大統領選に圧勝して再選を果たしています。

一方で、非白人を中心としたBRICSは、五か国から九か国に増加し、さらに加盟申請が後を絶たない状況です。既に人口では欧米を凌駕し、経済でも肩を並べるレベルまで勢いを伸ばしています。数百年続いた白人支配から非白人へ、という歴史的転換は現実の物となるのでしょうか？

激動の年を象徴するように、年末になってもシリア政権の崩壊や韓国の戒厳令騒動などがあり、中東、東アジアにきな臭い動きが続いています。

日本でも新政権が誕生したのですが、世界の激動をよそに、国会では一〇三万円の壁などに終始して、心もとない限りです。

既存の政治家が頼りにならない今、私たち草莽に何ができるのか、サロン21では今年も研鑽を重ねます。

令和六年の各月のテーマとプレゼンターは左記の通りです。(敬称略)

- | | | |
|-----|-------------------|-------|
| 一月 | 中国 軍事強国の夢 | 大平 忠 |
| 二月 | 台湾総統選と台湾有事 | 下山 健夫 |
| 三月 | 脱ロスチャイルド くだばれ拜金主義 | 森田 晃司 |
| 四月 | イスラエルの歴史とガザ侵攻 | 児玉 寛嗣 |
| 五月 | 対英米蘭蔣戦争終末促進に関する腹案 | 森田 晃司 |
| 六月 | 初夏放談会 | |
| 七月 | 人口で語る世界史 | 児玉 寛嗣 |
| 八月 | 夏休み | |
| 九月 | WEFとは何か | 森田 晃司 |
| 十月 | 秋の放談会 | |
| 十一月 | 石破新政権と米大統領選 | 森田 晃司 |
| 十二月 | 日本は2050年までにどうすべきか | 下山 健夫 |

(プロマネ 下山・森田)

ペン俳句のこの一年

佳句鑑賞

西川 知世

二〇二四年はパリオリンピック、大リーグ大谷の活躍となにかにつけ、世情に話題の多い一年であった。

ペン俳句は肅々と句会を続けていたが、ペン俳句の強力なメンバーであり、句会のムードメーカーであった真理子さんのペン俳句退会という試練を受けた。句座に着かれると、それだけで場が華やぐ方であった。この年、一緒に句座を囲んだ感銘句をここに挙げる。

新聞を畳に読んで日向ぼこ

内藤 真理子

タバコ買ふ夫を待つ間の花見かな

ジャスミンの蔓に香りや春深し

真理子さんと句座を共にした日々を感謝し、企業OB

ペンクラブでのさらなるご活躍、ご健康を祈っている。

たまに句会を覗きに来てください。歓迎します。

活動は、毎月第一木曜午後、地域交流センター代々木
吟行は、十一月七日明治神宮。菊花展に加え、観光客、
七五三の人出に賑わう秋日和の一日であった。ペン俳句
メンバーの健脚に舌を巻きつつよく歩き、いつもの句会

場で熱心に句会が繰り広げられた。その後の打上げはいつにもまして盛況だったのは言うまでもない。

奉納の銘酒葡萄酒秋高し

西川 知世

三の鳥居懸崖菊の大ぶりに

眼の蒼き人やカメラや七五三

糸瓜忌や廊下の隅に本の束

声かけて聞く枝折戸白木蓮

初夏の田の面を鎮め鷺一羽

葉桜を打つ雨の音家籠り

安藤 晃二

三椏の優しき花や入日映え

天守より琵琶湖の遙か花霞

千し竿のズボン舞ひ上げ雷怒る

白雲の渦巻きてをり晩夏光

秋空や頭上あの日の大編隊

三極は紙の原料となる木。枝が三つに分かれ、枝ごとに房状に花をつける。匂いも良い。夕日のなか白く咲き揃う姿に優しさを見ている作者である。一転、干し竿の句は、竿のズボンを舞い上げる風は雷の怒りだと詠う。いつも素材の捉え方が自在な作者の句が並んだ。

子狐の随いてくるらし冬山路 大津 そうかい

七夕の握手一つの別れかな

残る蚊や長生きさほど楽でなく

柏手の響き良きかな今朝の冬

冬枯れの菖蒲田光あまねかり

日経俳壇誌上で時にお名前を拝見、俳句仲間として活躍にエールを送りたい。句風は洒脱で、気持ちに正直、残る蚊の句は、句の展開のユーモアがそうかい俳句の真骨頂。さほどという措辞が見事である。冬枯れの菖蒲田はみごとに何も無いが、陽は全てを覆ってあたたかい。

姉の家空木の花の際立ちて 志村 良知

スコトンと言ふ名の岬夏寒し

老拙逝く山茶花大樹花盛り

夕べ迫る根津の社の時雨かな

埴輪展森に残れる暮の秋

うつぎの花は初夏、香りのよい白い花を枝先につける。

久しぶりに会う姉であろうか、作者の心浮き立つ思いが伝わる。猫を可愛がっている人には訣は辛いもの、その哀しさを大きな山茶花の木がつけた満開の花に託すのは繊細で、静かな寂しさが伝わってくる。

鶯の一声鳴きて野辺静か 長尾 進一郎

梅雨晴や散歩の犬の前のめり

大水に倒れし幹の若葉かな

補助輪を取りて子供の夏終はる

短日や床屋帰りの一番星

ようやくの梅雨の晴間。犬の散歩は大切な飼主の仕事。リードをつけて家をでたが、犬の喜びとはうらはらに飼主の歩く速度が遅いのだ。犬の息遣いまで見える。短日は冬の日没が早いこと。いつもの時間と変わらないのに、帰る道にはもう星がでて季節は移ろう。

風花や山曇るとも翳るとも

中村 晃也

遠浅間一日風花舞うてをり

サッチモの濁声ホットウイスキー

橋桁に絡まる小枝水温む

伏せて待つ盲導犬や牛膝

遠くに見える浅間山と作者に舞いくる風花。美しい景である。寒さは一入であるが冬の青空に舞う雪で積もることはない。季語水温むは、寒さが去り川や湖の水が少し温んできたさまを言って季語としては、地理の項。小枝のからまりが春のどかさを表出する。

白波の沖の小島や富士風

新田 ゆふき

立春の雨黒々と幹伝ふ

城跡の空堀浚ふ春疾風

鷹の巢を捉ふるレンズ風光る

髪軽くヘアサロン出て夏燕

立春の句は、黒々と幹を伝っている雨と詠って冬から春へ移る温みを出している。皮膚感覚に近い句。鷹の巢の句は山歩きの好きな作者の目が捉えた句。高い樹の枝や樹の股に営巢する鷹の巢にカメラのレンズの照準を合わせる。春風が眩しく心地よい。

風花が風花を追ひ母の墓

浜口 須美子

手繋ぎて影はひとつに春夕焼

げんげ田に入りて少女の声になる

書の蝶が画廊飛び出す梅雨の街

雨粒のひとつひとつに梅雨の色

風花の句、風花の終着点が母堂の墓であることが、静かな悲しみと追慕を表出している。人との訣れは、時とともに深くなり、淡く静かに心に沈んでいく。書の蝶の句、難解とも言えるが、いかにも須美子俳句の趣、梅雨の街は墨書の蝶が飛び出す不思議空間。

菜の花や輪を描く鳶の空真青

松田 一文字

遠雷や池に水輪の五つ三つ

引き潮に海星の残る晩夏かな

白波の沖の利尻やすき原

白秋や神の巨木の戦ぐ音

遠雷の句の下五、五つ三つと抑え、池の面に少しの時間の経過を出す。遠くの雷と相俟ってそろそろ帰ろうかと少し心が急ぐ。白秋の句は秋の吟行句。明治神宮の杜の樹々は東京という現実の都市の気配も、戦争という史実も吞み込む巨木の神域だった。

ネモフィラの揺れ群青の風生まる
宮原 風
雨の日のブライントタツチ亀の鳴く
ひとり生く余白また良き晩夏光
鳥居門奥へ奥へと深む秋
蓑虫や命ひとつを抱きゐるて

雨の日の句、季語の幹旋が秀逸。亀には声帯がないので鳴かないそう。俳諧味のある季語とブライントタツチは付かず離れず、狐につままれたよう。蓑虫の句、言われれば確かに蓑の中には一つの命がある。抱いているという作者の視点に優しい観察がある。

春風のページをめくる時刻表

森田 元斐

鶯の鳴かぬひとまや守護の杜

青蘆の狭める川へ梅雨出水

中庭の揺るがぬ緑病ひ癒ゆ

鳩の子を踏まぬ間合ひや夏来たる

春風の句に旅への気持ち募る。俳句は映像を介して読む人と気持ちを共有できることが醍醐味。春風の軽やかさと時刻表の分厚い存在感が旅心を誘う。鳩は一度に1〜2個の卵しか産まず、巣立ちが早い。鳩の子を踏まないよう気遣うころ、いよいよ夏到来。



写真 長尾 進一郎

ペン川柳

二〇二四年も毎月事前の投句と投票を行った後、「新宿宮川」で合評会を開催、活発なコメントを交わしながら懇親を深めました。

四月には滋賀県彦根市に遠征し合評会を実施、翌日は長浜で「こども歌舞伎」なども演じられる曳山祭を大いに楽しみました。

年間を通して我々好（浜田）さんが総獲得票一位となりました。最優秀句・優秀句には十一回も選ばれました。二位は火酒（三春）さんと、優秀句以上九回選ばれました。最優秀句に二回選ばれたのは、晃二（安藤）さん、井波（稲宮）さん、我々好さん、拿々（塚田）の四名でした。月間獲得票一位は七月の拿々でした。

十一月には、長らく欠席だった酔雅（西川）さんが復帰し、いきなり最優秀句を獲得しました。残念ながらその他十一回はお休みでした。

今後ともペン川柳会のご支援宜しくお願いします。

以下ペン川柳子の活動をご紹介します。

【我々好^{ウイスキ}】

（浜田道雄）

「上」…上がるもの物価に株価能登の船

「競」…競うよう先逝く友の喪中状

「桃」…桃色の噂に怯える歳は過ぎ

「湯」…妻の出た湯船の足し湯また増えた

「抱」…金メダル抱いて胸張るパリの夏

二月の「競」と、五月の「湯」が最優秀句に選ばれました。「競」では、毎年末になると喪中ハガキが届く数が増えてくる嘆きを詠みました。「湯」では「自分の話ではない」とおことわりがありました。一月の「上」で「能登の船」とありますが、元旦の能登大地震には驚きました。復興が待たれます。物価は着実に上がっているので、給料も継続的に上がってほしいものです。パリ・オリンピック・パラリンピックでは日本人が活躍しました。中でも女子やり投げの北口榛花選手の活躍が、愛嬌のある対応とともに印象的でした。

【火酒】
ウオツカ

(六戸三春)

- 「上」…還流は上意でござる検事どの
「音」…悪口と「ゴハンですよ」はよく聞こえ
「腐」…腐るのは魚もヒトも頭から
「抱」…お抱えの医者と坊主に先越され
「手」…手切れ金払う女と泣く男

六月「音」が最優秀句に選ばれました。一月「上」の「還流問題」の「政治とカネ」は未だに様々な疑問を残したままです。八月「腐」では人の組織も上の方から腐るという警句です。十一月「手」の「手切れ金」では男女逆転の時代を反映していますね。しかし色んな場面で日本は男女格差の是正が進展していません。根本的な仕組みから変えないといけません。

【明迷】
あめいめい

(八木信男)

- 「競」…待合は病気の数を競う部屋
「桃」…鬼嫁の好きなトマトが桃太郎

「選」…抽選に二歳の孫の名も使い

「音」…イビキより寝言に注意午前様

「夜」…夜泣きそば屋台の棚のカップ麺

十二月「夜」は最優秀句に選ばれました。棚に並ぶ世界中のカップ麺が目につかびます。亭主も楽で、客もバラエティを楽しんでいます。「夜鳴きそば」も「夜泣きそば」に転じてしまいました。この句の他八回も優秀句に選ばれました。二月「競」の病院は高齢者の順番待ちで患者が多く滞留しています。自然に病気の数が話題になるのでしょうか。三月「桃」で「桃太郎」がトマトの品種の一つなんて気がつきませんでした。六月「音」では、つつい機嫌良く飲んで、奥様の横でとんでもない寝言をはいてしまうのは十分注意です。

【拿々】
だだ

(塚田 實)

- 「桃」…階段で桃尻揺れて目が点に
「浴」…浴衣着た古女房が若く見え

「選」…選挙戦抱負語れどHOWはなし

「耳」…陰にいて組織牛耳る悪い奴

「夜」…蛍雪のラジオ懐かし深夜便

三月「桃」「七月」「浴」と二回も最優秀句に選ばれました。

「桃」ではストーリーカーと間違われようご注意。「浴」では、かすかな艶めかしさが思い浮かぶようです。友人の話です。「選」では、先の衆議院議員選挙でも、あれもこれもと希望を叫ぶが、それを如何に達成するかを充分語られていないのが残念です。選挙が終われば公約もどこかに飛んでゆきます。「耳」政界では色々思い浮かびますね。「夜」蛍雪時代の「ラジオ深夜便」が懐かしいですね。女子アナの甘い声についつい聞き惚れてしまいます。

【井波】

(稲宮健二)

「上」…退職後上にまします山の神

「桃」…あつけらかん桃色遊戯活写され

「湯」…ぬるま湯で三十年間あつと過ぎ

「抱」…抱き合わせ長寿裏目で義母の世話

「夜」…綺麗どこ夜汽車で隣酒交わす

一月「上」と九月「抱」と二回も最優秀句に選ばれました。「上」では退職後やつと上司から解き放たれたと思つたら、家にはどんと「山の神」が控えているのは皆そうです。「抱」は長寿時代では良くありそうな話ですね。「桃」「湯」「音」いずれも優秀句でした。「桃色遊戯」では多くの政治家・有名人が週刊誌に活写され、最近も某政党の代表が犠牲になりました。「湯」サラリーマンは「企業戦士」派と「ぬるま湯」派の二手があつたようです。「夜」のレトロな雰囲気は、今の新幹線時代には中々ありません。

【零門】

(松谷 隆)

「選」…選ばれるはずの挨拶役立たず

「音」…引くよりは札をよこせが民の声

「腐」…腐るほど迷句を詠んだ二十年

「抱」…病巣を抱えていてもあの笑顔

「耳」…耳にタコでも止められぬ忘れ物

四月「選」は最優秀句に選ばれました。この光景、先の選挙では沢山あったのでしょね。この句の他五回も優秀句に選ばれました。六月「音」は話題になった「税額控除」より、給付金が良いとのことを詠んだものです。零門さんは川柳子二十年で、「迷句」じゃなくて、「名句」が多かったです。九月「抱」は亡くなられた奥様のことを詠んだものです。「耳」いくら注意されても、すぐ忘れるのは高齢者にはよくあることで仕方ありません。もうそんなこと忘れましょう。

【見二】

(安藤晃二)

「桃」…あにおとうと思ひ出に無し雑道具

「選」…連れ添って先付手形落ちるまで

「腐」…八十路超え切るに切れない腐れ縁

「耳」…マニアック朝食至福パンの耳

「夜」…今は昔トンガリ帽子の聖夜かな

八月「腐」と十月「耳」の二回最優秀句に選ばれました。「腐」の「腐れ縁」は何とも言えない長い友人関係を想像します。「耳」の「パンの耳」は色んな調理法で美味しくいただけるそうです。「桃」、男兄弟だと雛の思ひ出はないようです。華やかなひな飾りは家を明るくします。「選」、若い頃は元気に任せてよく言っていました。妻にどんな先付手形を出したのでしょうか。気になりますね。「夜」、今やクリスマス頃銀座でトンガリ帽子を被って闊歩する人はあまりいないようです。NHKの連続放送劇『鐘の鳴る丘』の主題歌「とんがり帽子」を思い起こしますね。

【だし】

(大野 暁)

「競」…農林省競馬で稼ぎ知らん顔

「選」…ウイスキーそれともビール選ぶのか

「音」…円安で外には行けず音をあげる

「腐」…女房より腐らせるのは俺のドジ

「耳」…彼女からプロポーズされ耳疑う

二月「競」と四月「選」は優秀句に選ばれました。だ
しさんの句は歌舞伎からの引用とか、説明を聞く「あ、
なるほど」と納得する句が沢山ありました。ペン川柳子
の中で最高齢ですが、いつも元気で。「選」、飲み会で
は「取り敢えずビール」派が多いように思います。それ
から焼酎派、ハイボール派、日本酒派などに分かれるよ
うです。

【安兵衛】

(山縣正靖)

「競」…割り負けになるなど競いのんだくれ

「桃」…桃まつりあの子はいずれおばさんか

「選」…病院で逝くか自宅か選ぶ齡

「耳」…耳寄りな話に潜む深い闇

「夜」…夜が明け弾効逮捕内乱罪

十月「耳」は優秀句に選ばれました。昨年は「闇バイ

ト」の話題が尽きませんでした。最近金に困った若者
だけでなく、困窮した年金生活者も狙われているよう
です。最期はどこで逝くかは深刻な問題です。自宅で逝き
たくても死期が分からないので、難しい決断です。「夜」
の韓国大統領の突然の「非常戒厳」には驚きました。日
韓関係の行く末が心配です。

【酔雅】

(西川武彦)

「手」…手を焼いた子供に今は手を引かれ

昨年は体調不良でお休みが多かったですが、十一月
「手」に投句があり、いきなり最優秀句に選ばれました。
多くの高齢者に当てるはまるようです。

今年も楽しい川柳会にしてゆきたいと思っています。

(世話人 塚田 實)

ペン・フォト句会

令和六年は通常通り、八月を除く毎月代々木駅近くの会場に集まり、「付け句」と「自由句」の両方の合評を行いました。

「付け句」は、予め当月担当から示された「お題写真」に基づいて、各メンバーが二句ずつを提出しておきます。句会当日、全句の中から各々が投票し順位を決めた上で、各句の批評や議論をする、という方法で行っています。今年度のお題と出題者は次のようになりました。

- | | |
|----------------------|----|
| 一月…自宅から見た富士山 | 矢澤 |
| 二月…旧岩崎家別邸の庭園 | 安藤 |
| 三月…塩屋岬灯台と美空ひばりの歌碑 | 大越 |
| 四月…江川せせらぎ緑道の桜とチューリップ | 清水 |
| 五月…無人の八百屋 | 長尾 |
| 六月…自宅近くの保育園児たち | 中村 |
| 七月…飯能市東吾野の古民家 | 新田 |

- | | |
|-------------------|----|
| 九月…ビルの巡回警備ロボットと少女 | 松田 |
| 十月…ボルシエのシヨールム | 矢澤 |
| 十一月…樹木に生えたサルノコシカケ | 安藤 |
| 十二月…西の市の熊手 | 大越 |

「自由句」は文字通り、各自が自由に撮った写真（2L版）とそれに付けた句をA4版に纏めて持ち寄り、壁に貼り出して、投票と批評をするという方法で行っています。自由句の一部は本号の表紙裏などに掲載しています。

各回のお題写真と付け句の入選作品は、ホームページのフォト句サイトに出ていますので、ご興味ある方は是非ご覧下さい。

会の終了後は、その月の幹事が選んだ店で夕食会を行って親睦を深めています。今後も和気あいあいの活動を続けて行きたいと思います。見学参加は何時でも歓迎です。また、夕食会だけの参加も大歓迎です。

（プロマネ 松田昌康・長尾進一郎）

英語を読もう会

旬の情報、論説の紹介を旨とし、メンバーの提題により読む。

開催月	題 名	担当名
1 月	WH:Nippon-U.S. Steel deal deserves serious scrutiny Reuters: 米鉄鋼メーカー、US Steel 社の日本製鉄による買収計画に米政府が警鐘。	安藤
2 月	WHO weighs up AI risks and benefits for health care AFP: WHO は医療における AI のリスクと効能評価の重要性を強調。	安藤
3 月	Continued European naivete could prove fatal Joschka Fischer, (Project Syndicate 欧州の発信機関、在チェコ) Fischer 氏はドイツ元副首相グリーン党党首。欧州は弱腰であってはならない。	安藤
4 月	Apple antitrust suit mirrors strategy that beat Microsoft Reuters: 米政府はアップル社がスマホの五分野における競争を排除、技術を抑え込んだとして同社を提訴。その分野は super apps, 他	安藤
5 月	World braces for year of American living dangerously Richard Haass, 25/Mar/2024, (Project Syndicate) アメリカの危険な年に身構える世界。選挙結果に気を取られる米国を憂える。	安藤
6 月	A D-Day commemoration that was not just about beating Hitler Biden, Macron and Zelensky vowed to defend Ukraine and democracy AP: ノルマンディ上陸記念式典に因み、西側主要国間の戦略の微妙な違い、プーチンの牽制に記事は触れる。	児玉
7 月	Fed's Powell to Testify as Inflation, Hiring Cool Bloomberg,8/Jul/2024: 利上げによるインフレ抑止に努めた FED としては、利下げの実行には更なる確認が必要と主張。慎重論を堅持の立場。	安藤
9 月	Harris goads Trump into flustered performance on pivotal night, BBC News,10/Sept/2024: 米国大統領選 9 月 10 日の両候補によるディベート直後の BBC による解説記事。	森田
10 月	Japan's new prime minister is his own party's sternest critic This could make it harder for Ishiba Shigeru to govern effectively 英国の The Economist,1/Oct/2024: 石破茂氏による内閣観察。	児玉
11 月	America Deserves Donald Trump. The World Doesn't Bloomberg: トランプ氏の行動様式は計り知れず、世界は危惧する。	安藤
12 月	The hard truth: Americans don't trust the news media Jeff Bezos, (The Washington Post のオーナー) : ベゾス氏はアマゾンの創設者でもある。今メディアの偏見が云々され評判が悪いが、必ずしも当たらない。WP は公平を期して、誇りをもって日夜注力している。	安藤

何でも読もう会

世話人が決まらず、暫くお休みをしていました。

「自分の好きな作者ばかりを読んでもしょう。『読もう会』ではいろんな作者の本が課題本として採り上げられ、大いに刺激を受ける」

「読んだ本を自分だけで感じているよりも、仲間の人からの感想を聞く新鮮な気持ちになる」等々。

そんな声が力となり、六月から再出発の形になりました。昨年はいろんなジャンルの本を選んでみました。

【六月】

・『橋』

橋本 治

作者橋本治は「駒場祭」のポスターで有名。この作品は、日本経済の高度成長期に育った母たちと、その娘たちがバブル崩壊後に殺人事件を起こす。

・『私と小鳥と鈴と』

金子みすゞ

【七月】

・『博士の愛した数式』

小川 洋子

記憶が八十分間しか持たない元数学博士と博士の語る

美しい数式に耳を傾ける家政婦。

・『魔術』

芥川龍之介

【九月】

・『神去なあなあ日常』

三浦しをん

都会で育った主人公が山奥にある神去村での生活を通じて、伝統的な生活習慣や林業の実務を学んでいく。登場人物は個性的で魅力的。

【十月】

・『破船』

吉村 昭

座礁した船から、あらゆる物資を奪い取る。極貧の村で生き抜くための、秘密の風習であった。

【十一月】

・『紅梅』

津村 節子

一年半にわたる吉村昭氏の闘病と死を、妻と作家両方の目から見つめ、純文学に昇華させた衝撃作。

◆皆さん！『読もう会』にご参加ください。

・毎月 第三月曜日 午後一時～三時

・地域交流センター『代々木』

↓課題本等の問い合わせは、プロマネ 清水 勝まで

ホームページ関連

二〇一九年末に、それまでは20万円弱だったOBペンHPの年間メンテナンス費用が、翌年から35万円くらいに値上がりすると聞いた。二〇一七年まで会計係をしていた私にとっては驚きであり、「将来はこの費用を自分たちでコントロールしたい」という思いが募った。当時、私はHPに興味がなく何も知らないド素人だった。

「もし再値上げなどで、費用を出せなくなったらOBペンでHPのメンテをするしかない。その場合に備えよう」と思い、まずOBペンHPがどのような構造に作られているかを、素人のわかる範囲で調査した。調査の過程で、現在の費用は世間相場を越えていないことと、下げるにはOBペンでメンテするしかないこともわかった。

素人の私には、HPの構造が凄く複雑に思えた。会員ページと公開ページの区分け以外も複雑だった。「簡素化しよう」。そうすれば素人にも扱いやすいし、ステップ数も相当少なくなる。例えば作品のアップでは、ワードファイルをHTMLに変換していたが、もしpdfファイル

ルの作品を貼り付けるなら素人でも容易だ。そこでまず、作品アップ時にpdfファイルを使うように変更した。(株)プラスの担当者も作業時間が減ると言ってくれた。

次に着手したのはトピックス欄と17文字最新作品欄の画像データ化による簡素化。EUCJに変換する手間はなくなり、画像データを貼り付けるだけになった。最後に、昨年一月にアップデートしたトップページ。これは外部の方々のアクセス数を増やし、HPの発信力強化を目的としたが、同時にトップページの簡素化を図ったものだ。外部からのアクセス数の指標となる「会のご案内」「入会案内」「各グループの紹介」へのアクセス数の変化を調べると明らかな増加がみられた。よって、アップデートの主目的は達成できたと考えている。

これで現状HPの簡素化はほぼ完了した。今後は(株)プラスと密に相談して、OBペンの状況にあったメンテナンス方法を見つけ、会員の皆様に説明してご理解いただきながら、HPの維持が会運営の重荷にならないようにやりくりしていきたいと思っている。

(HP世話人 松浦俊博)

クラブ活動を振り返って

令和六年(二〇二四年) Ⅱ

(会員への敬称略)

一、役員

会の簡素化を図るべく前年に行われた役員選挙で五人の新役員が選出され、左記の分担で会の運営を務めた。

理事・会長	吉田 真人
理事・会計担当	長尾進一郎
理事・IT担当	志村 良知
理事・HP担当	松浦 俊博
理事・事務局	児玉 寛嗣
監事	大森 海太

二、四半期会の活動報告

在籍数…二〇二五年一月二〇日現在 五十三名
令和六年から、月例会を四半期会と改めて、年に四回

開催

一月四半期会(十八日) Z o o m 併用

・新春特別講演会

講師 山崎敏充(元最高裁判所判事)

『やさしい裁判の話』

五月四半期会(十六日) Z o o m 併用

・『悠遊』三十一号合評会

七月四半期会(十八日) Z o o m 併用

・会員講演Ⅱ 一杉秀樹

『塔のある村へ ジョージアの旅』

十月四半期会(二十四日) Z o o m 併用

・会員講演Ⅱ 豊澤幸平

『野球MLBを追いかけて 65年』

令和六年の入退会者

・退会 新井良侑さん、川村邦生さん、

長谷川修さん、山縣正靖さん

・入会 豊澤幸平さん（一月）、瀬尾勝弘さん（八月）

荒岡 衛さん（九月）

令和五年年までのコロナ禍により、自宅からオンラインで活動するスタイルが普及していた。コロナはようやく終息したようだが、オンラインは定着して遠隔地或いは健康面から会場に來られない会員にとってはむしろ参加の機会が増えた。それと並行してコロナ禍で自重していた散策の会（六月は田端地区の文学芸術散歩、十一月は根津から白山へ散策）など、親睦活動も復活した。今後もさらに新しい取組みに挑戦し、サークルの輪を広げたい。

（事務局 児玉寛嗣）



油絵 福本 多佳子

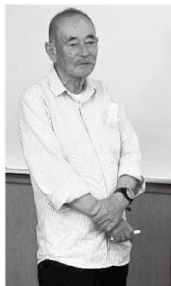
昨年のクラブ活動より(2)

OBペン会員の講演は面白い

7月 一杉秀樹氏

「塔のある村へ ～ジョージアの旅」

2008年に訪れたジョージアの様々な町と自然を紹介



観光地ではない辺境
への自由で気まま旅
が好き
不便はあるが、珍しい
建物を見て食べ物を
味わい、その地の人々
と交流するのは楽しい



宿のお嬢さん、着ているものは
すべてお母さんの手縫い



10月 豊澤幸平氏

「野球 MLBを追いかけて65年」

純粋な時に好きだったものは永遠



- 米国のプロ野球MLBに興味を持ったきっかけ
- 全本拠地30球場の訪問達成
- MLB野球、野球場の醍醐味
- MLBに係り米国人との交流
- 日本人選手のMLB進出
野茂英雄が切り開いた道



小学校3年



金京法一さんを偲ぶ

大野 豊

僕が金京法一さんと初めてお会いしたのは、富田中学に入学して一年二組にクラス分けされ「この組の級長は金京さん」と告げられた時でした。彼の才能に驚かされたのは数学の時間でした。僕が頭を抱えていた難問をその場で易々と解いてしまうのです。

それ以来、僕は勉強の方は諦めて、もっぱら運動会系の活動に切り替えました。相撲部と柔道部で汗を流し、走ることで百メートルからマラソンまで。元来が左利きだったので両手砲丸投げの記録を作りました。

学制改革で僕は私立の南山中学に転校し、金京さんはそのまま名前を変えた四日市高校に進みました。

再会したのは東京大学でした。僕は理一、彼は医学部志望で理二に入学したのです。その時、彼の一家は三鷹に住みました。また偶然に僕も東大三鷹寮に入りました。特に東大本郷第二食堂で開かれるパーティーでは、彼

の美人の妹さんと踊れるのを目的に、精出して通ったものでした。妹さんは真城千都世という芸名で、SKD（松竹歌劇団）の花形スターでした。その後も松竹映画のスターとして大活躍でした。北海道の知床半島を舞台に数々の名作を生み出しています。

東大を卒業すると、またまた運命のいたずらで二人とも財閥系の商社に就職しました。彼は三菱商事。僕は當時は第一物産、後の三井物産です。商事のダンスパーティーにも遠征して、商事の美女に熱を上げましたが、今では名前も出てきません。薄情な奴だつて。

定年後は、又々全くの偶然が二人を結びつけました。僕は、企業OBベンクラブを立ち上げた八木大介先生が後継者の仕事ぶりに満足できず、記者クラブで開いた勉強会に参加したのです。二人の共通の友人ということで彼に勧誘の知らせが届きます。サロン21での彼の活躍は皆さんご存じのとおりです。

さらに商事のOBとして経団連で大活躍です。その様子は三菱造船出身でやはり経団連で活躍された団野弘一さんからいろいろ伺っています。

都甲 昌利さんを偲んで

松谷 隆

「新プロジェクトができそうです。松谷さん、プロマネをぜひ。今からいろんなことを経験しておけば」と、当時の運営委員長の都甲さんの発言を受けたのは入会翌月の月例会のときでした。

『エバアーグリーン』と命名されたこのプロジェクトは、メンバー十名が毎月二編、自分が決めたジャンルに関するエッセイを書くというものでした。

都甲さんはご自分の得意とされるゴルフについてのエッセイで、発祥とされるスコットランドから始まり、最後にはお薦めの数冊のゴルフエッセイを紹介されるといふ入れ込みようでした。

ほぼ同時期に、都甲さんがプロマネをされていた航空貨物情報誌への旅行記の提出を依頼されたときは、文章書きで入会したのではないので、躊躇していました。そ

のとき、「まず《何でも書こう会》で発表し、その結果を利用する」よう指導を受けました。

愚作には余すところなく赤ペンが入りました。でもコメントを取りこんだ最終版には「問題なし」を頂き、無事掲載されたことは決して忘れません。

「新入りが煽てに乗ってプロマネに」と既定のレールに乗せられた筆者は、翌年末になんと都甲さんから運営委員長を引継ぐ羽目になりました。その際も、「困ったことがあれば、いつでも相談に乗る。遠慮するな」と励まして頂いたことも忘れておりません。

長身で背筋もまっすぐな姿勢のダンディ、物静かで理路整然とした話ぶりには憧れていました。ロシア人ともうまく仕事を成し遂げられたに違いないと信じています。しかし、もう、そのお姿を拝見できないのは非常に残念です。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

種々ありがとうございました。どうぞ安らかに。

合掌

会 員 名 簿 (五十音順)

氏 名	主 な 活 動 分 野
浅井 壮一郎	サロン21
荒岡 衛	書こう会、エッセイ
安藤 晃二	書こう会、エッセイ、英読会、俳句、川柳、フォト句
池田 隆	書こう会、エッセイ、サロン21、読もう会、写真
池松 孝子	書こう会、エッセイ
市川 忠夫	書こう会、エッセイ、英読会、サロン21
稲宮 健一	書こう会、エッセイ、川柳
上田 信隆	エッセイ、サロン21
宇敷 辰男	書こう会、エッセイ
内田 満夫	書こう会、エッセイ、会員談話室
大越 浩平	書こう会、エッセイ、フォト句
大津 隆文	書こう会、エッセイ、俳句
大塚 喜子	掌編小説、書こう会、エッセイ、読もう会
大月 和彦	書こう会、エッセイ、読もう会、フォト句
大平 忠	書こう会、エッセイ、サロン21、会員談話室
大野 <small>たのし</small> 暲	書こう会、エッセイ、サロン21、会員談話室
大森 海太	書こう会、エッセイ
川口 ひろ子	書こう会、エッセイ
木村 敏美	エッセイ
荒野 <small>あらの</small> 喆也	書こう会、エッセイ
児玉 寛嗣	書こう会、エッセイ、掌編小説、英読会、サロン21、読もう会
清水 勝	掌編小説、読もう会、フォト句
志村 良知	書こう会、エッセイ、読もう会、俳句
下山 健夫	エッセイ、サロン21、英読会、フォト句
杉浦 右藏	書こう会、エッセイ、サロン21
瀬尾 勝弘	書こう会、エッセイ
塚田 實	書こう会、エッセイ、掌編小説、川柳、絵

氏名	主な活動分野
豊澤 幸平	書こう会、エッセイ
内藤 真理子	書こう会、エッセイ、掌編小説、読もう会
長尾 進一郎	書こう会、エッセイ、俳句、フォト句、写真
中村 晃也	書こう会、エッセイ、俳句、フォト句、写真、掌編小説
西川 武彦	エッセイ、掌編小説、サロン21、川柳、写真
西川 知世	俳句、エッセイ
新田 由紀子	書こう会、エッセイ、読もう会、俳句
野上 浩三	書こう会、エッセイ、掌編小説
野瀬 隆平	書こう会、掌編小説、サロン21、読もう会、英読会、写真
馬場 真寿美	書こう会、エッセイ、掌編小説
浜口 須美子	エッセイ、俳句、写真
浜田 道雄	書こう会、エッセイ、読もう会、川柳、写真
原田 信	書こう会、エッセイ、会員談話室
一杉 秀樹	書こう会、エッセイ
福本 多佳子	読もう会、エッセイ、掌編小説、絵
藤原 道夫	書こう会、エッセイ
松浦 純子	書こう会、エッセイ
松浦 俊博	書こう会、エッセイ
松谷 隆	書こう会、エッセイ、掌編小説、読もう会、川柳
松田 昌康	フォト句、エッセイ、俳句
三 春	書こう会、エッセイ、読もう会、川柳
宮原 由利子	俳句、読もう会、エッセイ
森田 晃司	サロン21、英読会、エッセイ、俳句
八木 信男	エッセイ、川柳、絵、会員談話室
矢澤 正二	エッセイ、フォト句、写真
吉田 真人	書こう会、エッセイ

(2025年1月20日現在)

編 集 後 記

▽「悠遊」三十二号をお届けします。one generation（一世代）という語句は約三十年を意味します。「悠遊」も皆様のお力添えで三十二歳を迎え、人間でいえば働き盛りの大人に成長しました。今まで「悠遊」を育ててきた方々のご努力に感謝しつつ、私も伝統の一役を担えたことは大きな喜びです。今回も会員の皆様から沢山の作品をお寄せいただきました。また、体調がすぐれない方々からいただいた元気づけられました。力作ぞろいの作品を是非お楽しみください。

（松浦）

▽「編集」は初めての経験でした。今回提出された作品は全て、書くことの喜びや楽しみに溢れています。その事に私は感動しました。過去の「悠遊」をひも解いて、時代の変遷を感じました。

（大塚）

▽入会した年に『悠遊』の編集に携わって今年で五年になります。ご指導くださった先輩方々、素晴らしい作品をお寄せ頂きました会員の皆様に感謝いたします。三十二号をもちまして卒業させて頂く事になりました。貴重な経験をさせて頂きました。

（宮原）

企業OBペンクラブ同人誌

『悠遊』第三十二号

二〇二五年四月一日発行

発行者 企業OBペンクラブ会長

吉田 真人

印刷所 新灯印刷株式会社

東京都新宿区水通町二一五（〒一六二〇八一）

TEL 〇三―三二六〇―九二六一

連絡先 企業OBペンクラブ事務局

児玉 寛嗣

Eメール: kgobpenclub@gmail.com

クラブURL: <http://www.obpen.com>

入会案内はクラブURLホームページの「入会のご案内」

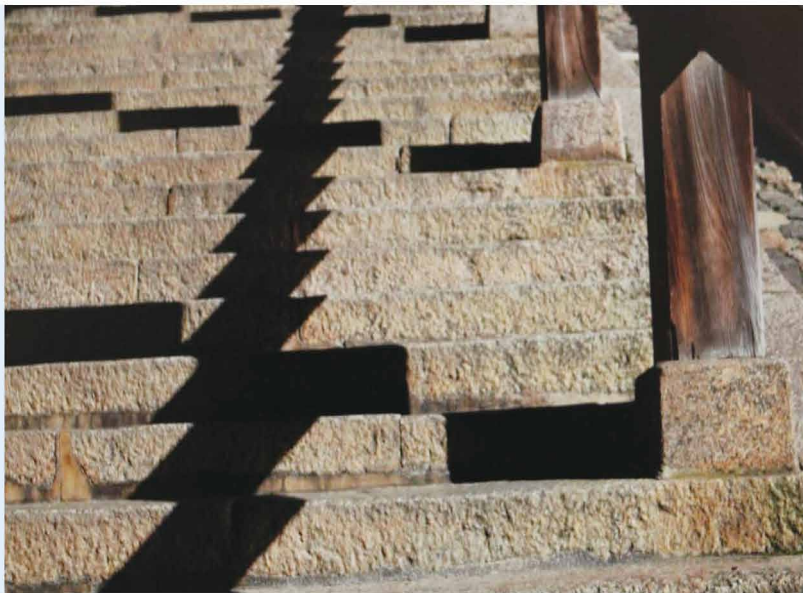
見学希望・入会希望は事務局まで

口座 三菱UFJ銀行海老名支店（409）

企業OBペンクラブ（普通） 1086096

冬の日に
影落としたり
垂の紋

下山 健夫

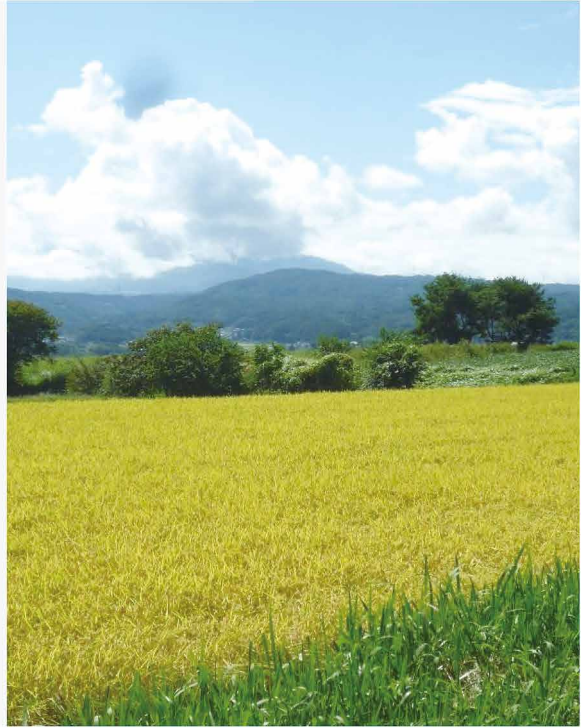


幸せな
二人劇場
おおブラボー

清水 勝

全秋や
値上がりを待つ
稲穂かな

矢澤 正二



晩秋の
奥日光の
静けさよ

中村 晃也

父鳥や
首煮き像に

蛇莓

大越 浩平



大家族
こりゃかなワンと
道空ける

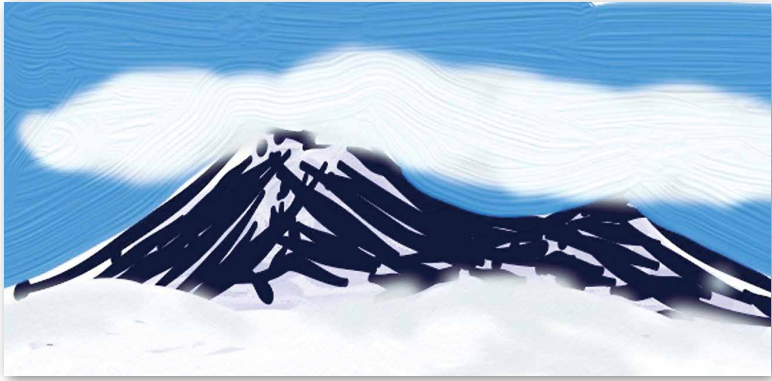
長尾 進一郎



木村 敏美



塚田 實



八木 信男



福本多佳子



安藤 晃二